

よ ね ぎ わ じ ょ う あ と

米 沢 城 跡

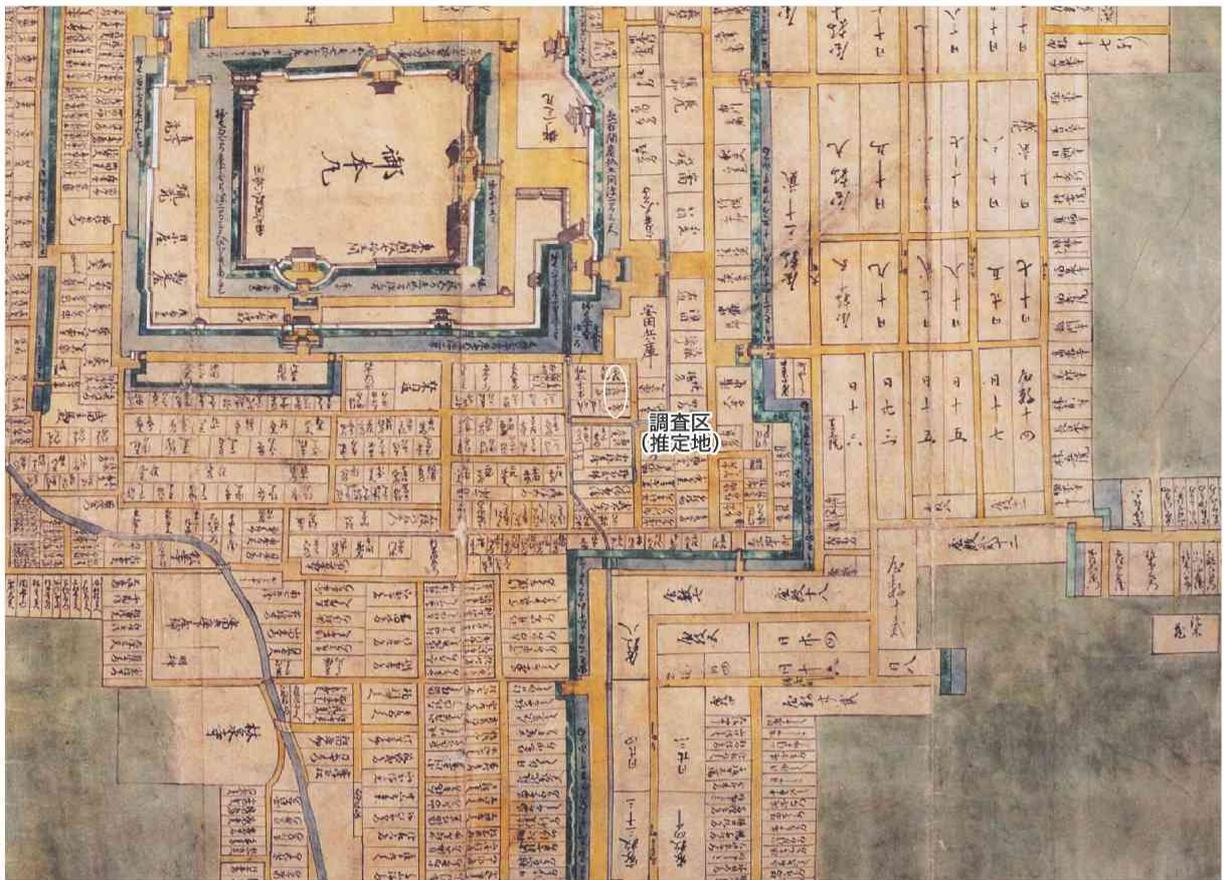
第3次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第135集

平成16年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター





御城下絵図元禄7年 米沢市上杉博物館所蔵



SD171出土岸窯産陶器



SD171完掘状況



SK273出土状況



SK273出土漆器碗



人名刻書・墨書遺物 左：「五日 駒方茂衛門」、右：「七月廿四日 志源□□（四郎カ）」

序

本書は財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、米沢城跡の第3次調査の成果をまとめたものです。

米沢城跡は山形県の東南部、米沢盆地内の米沢市に所在します。米沢市は、中近世においては、伊達氏・上杉氏の城下町として栄えました。今でも市内の各所に、歴史的な地名や名所などが見られます。現在では、山形新幹線の開通や高速道路網の整備によって、山形県の南の玄関口としての役割を果たしています。

この度、主要地方道米沢猪苗代線3・4・4窪田・諸仏線改良工事に伴い、工事に先立って米沢城跡の発掘調査を実施しました。

調査では、中近世の建物跡や、それに伴う廃棄土坑が多数検出されました。特に近世の屋敷地で使用した食膳具が大量に出土し、当時の家臣団の生活を窺わせる資料が発見されています。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産と言えます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木村 幸

例 言

- 1 本書は主要地方道米沢猪苗代線3・4・4窪田・諸仏線改良工事に係る「米沢城跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県土木部の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記の通りである。

遺 跡 名 よねざわじょう 米沢城跡
遺 跡 番 号 1216
所 在 地 山形県米沢市城南一丁目
調 査 主 体 財団法人山形県埋蔵文化財センター
理 事 長 木村 宰
受 託 期 間 平成15年4月1日～平成16年3月31日
現 地 調 査 平成15年5月7日～平成15年6月6日（E・F区）
平成15年7月24日（G・H区）
調 査 担 当 者 調 査 第 二 課 長 尾 形 與 典
主任調査研究員 小 林 圭
調 査 研 究 員 押 切 智 紀（調査主任）
調 査 研 究 員 槇 綾

調 査 指 導 山形県教育庁社会教育課文化財保護室

- 4 本書の作成・執筆は押切智紀・槇綾（I～III・V）が担当し、尾形與典が監修した。「IV 理化学分析」については株式会社吉田生物研究所に依頼した。
- 5 委託業務は下記のとおりである。
遺構写真実測 国際航業株式会社
出土遺物保存処理 株式会社吉田生物研究所
- 6 出土遺物、調査記録類については、報告書作成終了後すみやかに山形県教育委員会に移管する。
- 7 発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただいた。

山形県置賜総合支庁建設部道路計画課、山形県教育庁置賜教育事務所、米沢市資産税課、米沢市教育委員会、米沢市上杉博物館
青木昭博（米沢市教育委員会）、阿子島功（山形大学人文学部）、角屋由美子（米沢市上杉博物館）、関根達人（弘前大学人文学部）

凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S B…掘立柱建物跡	S K…土坑	S D…溝跡
S P…ピット	S X…性格不明遺構	S A…柵列
E B…柱跡	R P…登録土器・陶磁器	R W…登録木製品
X O…出土地点不明遺物	P…土器・陶磁器	S…石

2 遺構番号は、現地調査段階での番号を、そのまま報告書での番号として踏襲した。

3 遺構図に付す座標値は、平面直角座標第X系により、高さは海拔高で表す。

4 遺構概要図・遺構配置図・遺構実測図等の方位は磁北を示している。

5 グリッドの南北軸は、N-14°53'-Wを測る（第2次調査の設定軸を補正）。

6 遺構実測図は、各々スケールを付した。

7 土層観察においては、遺構を覆う基本層序をローマ数字で表し、遺構覆土については算用数字を付して区別した。

8 遺構実測図・土層断面図中のスクリーンパターンについては次のように表示した。

() 炭化物 () 攪乱 () アタリ

9 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。

10 遺物実測図・拓影図は、各図版にスケールを付した。

11 遺物観察表中において、括弧内の数値は、図上復元による推定値、または残存値を示している。

12 遺物実測図中の () は炭化物・油煙、() は黒漆、() は赤漆、() は金箔を表す（漆器を除く）。

13 写真図版中の「御城下絵図」は米沢市上杉博物館から、「字限図」・「航空写真」は米沢市から提供を受けた（航空写真の複製については、株式会社国際航業に依頼）。

14 基本層序及び遺構覆土の色調記載については、1999年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目次

I	調査の経緯	
1	調査に至る経緯	1
2	調査の方法と経過	1
II	遺跡の立地と環境	
1	地理的環境	2
2	歴史的環境	3
3	遺跡の層序	5
III	遺構と遺物	
1	掘立柱建物跡・柵列	9
2	溝跡	11
3	土坑・性格不明遺構	16
4	その他の遺物	39
IV	理化学分析	
1	出土木製品の樹種調査結果	49
2	近世漆器の塗膜構造調査	51
V	考察	
1	歴史的考察	53
2	遺構の変遷	53
3	遺物組成の変遷	55
	報告書抄録	巻末

表

表1	土器・土製品・陶磁器観察表(1)	42	表11	陶器集計表	48
表2	土器・土製品・陶磁器観察表(2)	43	表12	ガラス製品集計表	48
表3	土器・土製品・陶磁器観察表(3)	44	表13	木製品集計表	48
表4	土器・土製品・陶磁器観察表(4)	45	表14	石製品集計表	48
表5	ガラス製品観察表	45	表15	金属製品集計表	48
表6	木製品観察表	46	表16	出土木製品同定表	50
表7	石製品観察表	47	表17	調査資料	51
表8	金属製品観察表	47	表18	断面観察結果表	51
表9	土器集計表	47	表19	拝領家臣の変遷	54
表10	磁器集計表	47			

図 版

第1図	調査区概要図	2	第19図	S K170・321・322・183	25
第2図	地形分類図	2	第20図	S K170出土遺物	26
第3図	遺跡位置図	4	第21図	S K170・321出土遺物	27
第4図	米沢城跡関連調査概要図	6	第22図	S K321・322出土遺物	28
第5図	遺構配置図	7	第23図	S K322・183出土遺物	29
第6図	基本層序	7	第24図	S K183出土遺物	30
第7図	S B156・S A229	9	第25図	S K206・207・317・310・253	32
第8図	S B311・312・313	10	第26図	S K251・252・273・277	33
第9図	S D85・169・171・172	12	第27図	S K206・207・310・253・251・252・273出土遺物	34
第10図	S D85・169・171出土遺物	13	第28図	S K273出土遺物	35
第11図	S D171出土遺物	14	第29図	S K273出土遺物	36
第12図	S D171出土遺物	15	第30図	S K273・277出土遺物	37
第13図	S X72・S K90・205	18	第31図	S K277・その他の遺物	38
第14図	S X72・S K90出土遺物	19	第32図	その他の遺物	40
第15図	S K90出土遺物	20	第33図	その他の遺物	41
第16図	S K90・123・325出土遺物	21	第34図	屋敷地推定図	54
第17図	S K123・164・325・159・160	23	第35図	遺構相関図	55
第18図	S K325・159・160出土遺物	24	第36図	出土陶磁器変遷図	57

写真図版

巻頭写真1	御城下絵図ほか	写真図版16	出土遺物(8)
巻頭写真2	S D171完掘状況ほか	写真図版17	出土遺物(9)
巻頭写真3	S K273出土漆器椀ほか	写真図版18	出土遺物(10)
写真図版1	調査区近景ほか	写真図版19	出土遺物(11)
写真図版2	重機稼動状況ほか	写真図版20	出土遺物(12)
写真図版3	E B133断面ほか	写真図版21	出土遺物(13)
写真図版4	S D171全景ほか	写真図版22	出土遺物(14)
写真図版5	S X72完掘状況ほか	写真図版23	出土遺物(15)
写真図版6	S K325検出状況ほか	写真図版24	出土遺物(16)
写真図版7	S K170・321・322断面ほか	写真図版25	出土遺物(17)
写真図版8	S K251・252断面ほか	写真図版26	出土遺物(18)
写真図版9	出土遺物(1)	写真図版27	出土遺物(19)
写真図版10	出土遺物(2)	写真図版28	出土遺物(20)
写真図版11	出土遺物(3)	写真図版29	出土遺物(21)
写真図版12	出土遺物(4)	写真図版30	出土遺物(22)
写真図版13	出土遺物(5)	写真図版31	出土遺物(23)
写真図版14	出土遺物(6)	写真図版32	出土遺物(24)
写真図版15	出土遺物(7)	写真図版33	出土遺物(25)

写真図版34	出土遺物 (26)	写真図版39	塗膜断面写真 (2)
写真図版35	出土遺物 (27)	写真図版40	塗膜断面写真 (3)
写真図版36	木材組織写真 (1)	写真図版41	塗膜断面写真 (4)
写真図版37	木材組織写真 (2)	写真図版42	御城下絵図
写真図版38	塗膜断面写真 (1)		

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

今回の調査は、主要地方道米沢猪苗代線3・4・4窪田・諸仏線道路改良工事に係る緊急発掘調査である。県教育庁社会教育課文化財保護室と県置賜総合支庁建設部が協議をし、工事対象区域について記録保存が必要とされた。その結果、県置賜総合支庁建設部より委託を受けた財団法人山形県埋蔵文化財センターが主体となり、発掘調査を実施した。

米沢城（本丸～三の丸）に関する発掘調査は、今までに米沢市教育委員会が9回（1986年第1次、1989年第2次、1990年第3次、1991年第4・5次、1998年第6次、1999年第7次、1999年第8次、2000年第9次）、当センターが2回行っている。

第1次調査（1998.7.13～12.10）は、置賜広域文化施設建設に伴うもの、第2次調査（2000.5.17～7.7）は、今回の調査と同様主要地方道の改良工事に伴うもので、今回の調査区の道路の北側に位置する。調査区は、置賜総合文化センター「伝国の杜」（旧二の丸堀跡）のすぐ南東側にあり、近世において家臣団の屋敷地が軒を連ねていたと思われる。調査結果をみても建物跡とそれに伴う土坑・溝跡が検出された。

家臣団の屋敷地

2 調査の方法と経過

今回の調査は、平成15年5月7日から6月6日まで（E・F区）と7月24日（G・H区）の延べ32日間実施した。工事区画からE区（道路拡幅部分）・F～H区（電線地中化工事部分）に調査区を分け、調査を実施した。

調査の進行は次の通りである。5月7日に器材搬入・環境整備等を行い、その後重機による表土掘削、ジョレン等による面整理を行い、遺構の検出を行った。その結果、屋敷跡と土坑・溝跡などが確認された。その後、遺構精査・記録・写真撮影などをしながら調査を進めた。

方眼座標の設定については、東西軸をX軸、南北軸をY軸とし、南北は5m毎、東西は調査区の幅を考え、A～1間は2m、1～2間は3m毎、その他は5m毎に番号を付している。なお、2次調査のグリッドを踏襲したが、前回より今次の調査区が東に広がったため、新たに東に向かってA～Cのグリッドを設定した。また磁北との角度を補正している。

また、グリッド北西隅をグリッド名にしている。58-1グリッドの国上座標は、平面直角座標系第X系： $X = -232,484.685$ ・ $Y = -63,525.442$ である。

F区については5月20日立会調査を行ったが、遺構等は確認できなかった。

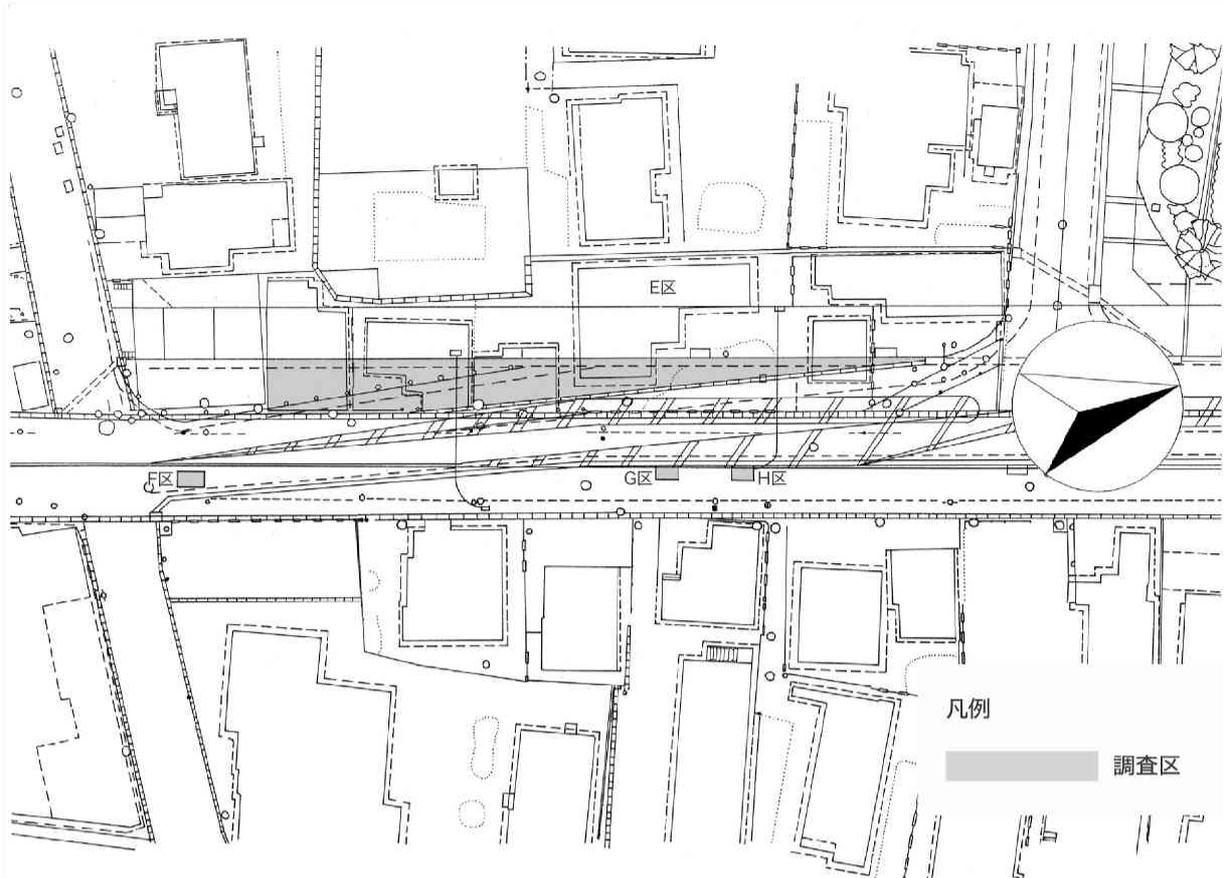
5月22日に県置賜総合支庁建設部の要請で、E区南側を30mほど拡張した。

5月23日に関係者と地域住民向けの調査説明会を実施している。

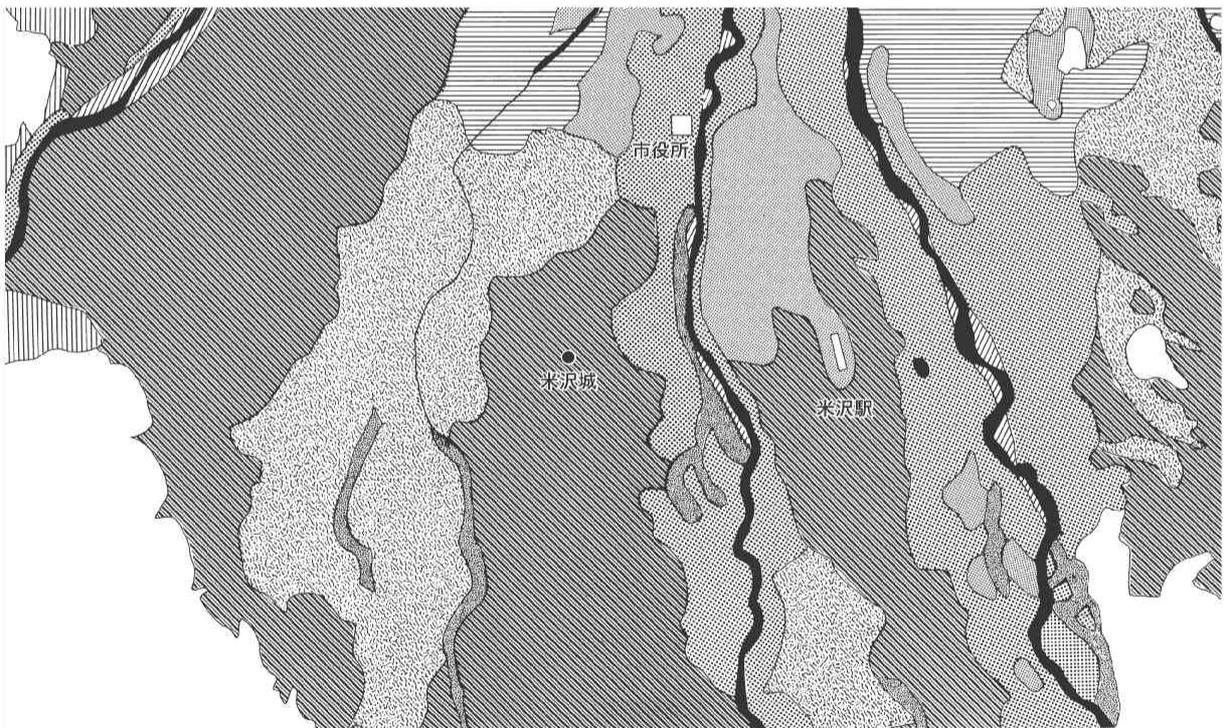
6月6日にE・F区の調査について終了し、器材を撤収した。

G・H区については、本調査終了後の7月24日に立会調査を行い、柱穴等を検出した。

F～H区については、上下水道の配管により遺構の大半は壊されていた。



第1図 調査区概要図(S=1:1,000)



第2図 地形分類図(山形県発行5万分の1 土地分類調査より)

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

山形県の南端部、福島県との県境に位置する米沢市は、城下町として栄えた。東部に奥羽山脈、南部に吾妻山地、そして西部には玉庭丘陵、また北流する松川（最上川）とその支流、羽黒川、鬼面川等によって形成された米沢盆地の南部にあり、米沢市街地は松川に由来する扇状地上に立地している。

松川扇状地

市街地のほぼ中央に位置する上杉神社がかつての米沢城本丸に当たり、遺跡範囲（本丸・二の丸・三の丸の一部）は東西約850m、南北約900mについて登録されている。今回の調査区は

南三の丸

2 歴史的環境

米沢城は、長井時広によって築城されたと伝えられているが、文献・考古資料とも不明確である。本格的に城下町が形成されたのは、伊達晴宗が米沢城を本拠とする1548年（天文17）以降と考えられる。なお、周辺には晴宗の隠居所と考えられる荒川2遺跡があり、その他中小の館跡が市域の各所に見られ、伝承であるが伊達家の館と言われるものが多い（第4図 遺跡位置図）。その後1591年（天正19）豊臣秀吉によって、伊達政宗が岩出山に移配されてからは蒲生領となるが、8年後の1598年（慶長3）には上杉領となり家臣の直江兼継が配されている。1601年（慶長6）関ヶ原の戦いで西軍に属した上杉景勝は、120万石から30万石に減封され米沢に入ることとなった。

米沢城

三の丸の造成は、1608年（慶長13）城郭増築と共に着手した。それまで家臣団の住居は、「諸士の義は慶長六年御入国の節は宅地も定まらざる故皆仮屋住居にて送りし処同十五年屋敷割あり宅地を賜りし故始て住居を定たり」（『官見談』）とあり、造成前は仮住居の状態であったことが窺える。工事が本格化したのは翌年からで、直江兼継の指図により、平林正恒を奉行として実施された。二の丸周辺にあった町屋は郭外に移され、屋敷地の割替が行われた。しかし、郭内の空間は限られており、下級武士の居住域までは確保できなかったため、三の丸は上中級家臣団の屋敷地と役所の区域となった。具体的には、譜代の高家衆や上士たる侍組と三手組の馬廻組・五十騎組・与板組の居住域ということになる。造成当初、直江兼継は各組毎「一所」に集住すべきことを指示している（山形県1961）。しかし、屋敷替は以後頻繁に行われており、江戸中期以降は急激に増加する（渡辺2003）。

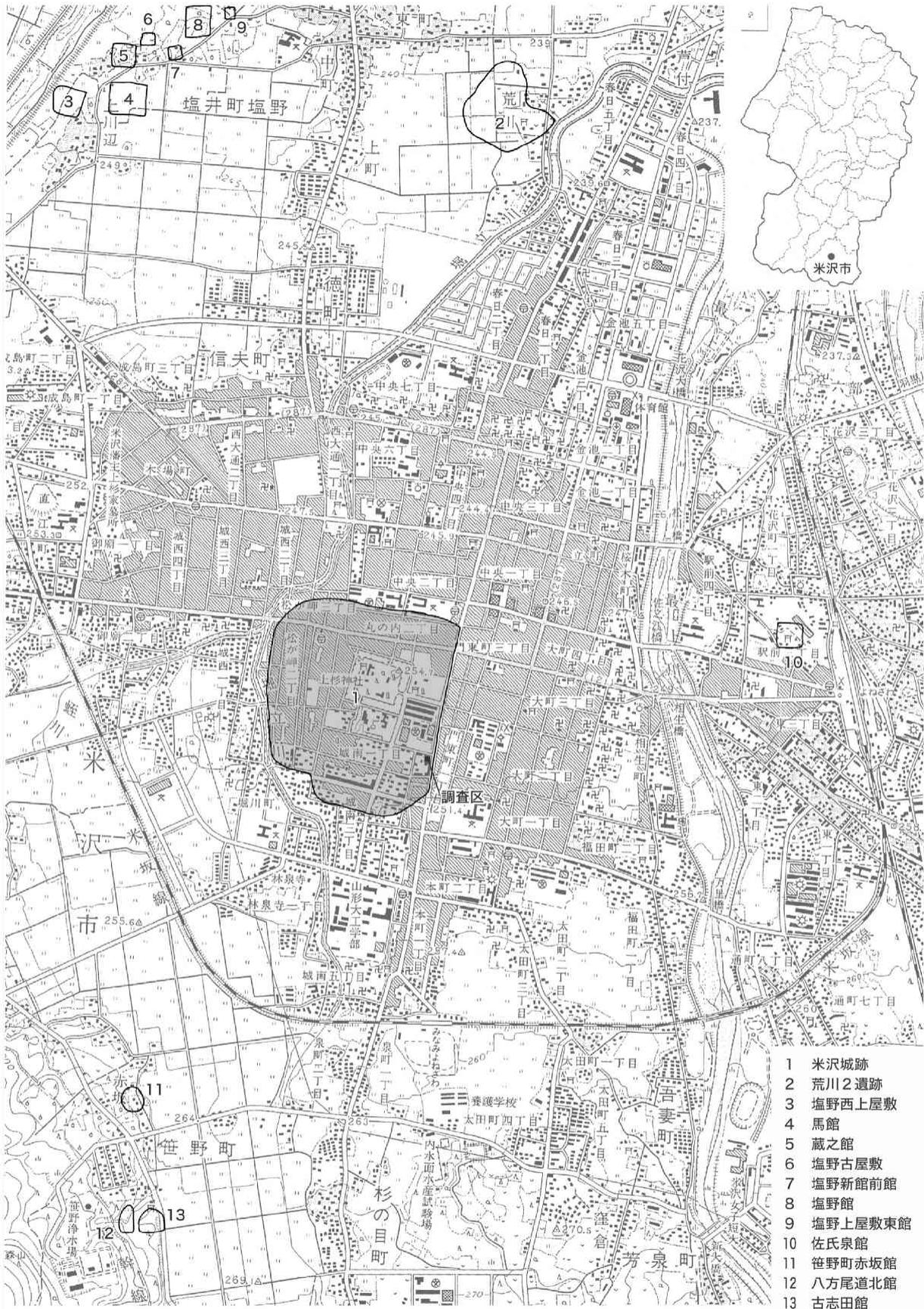
三の丸造成

次に周辺の発掘調査について若干述べることにする。

当センターが行った第1次調査においては、中世末から近世の土器や陶磁器、木製品が出土し、二の丸堀跡・御入水堰の土手が確認された。堀は、底面に障壁を持つ「障子堀」である（高桑他1999）。第2次調査においては、堀跡の一部と溝、多数の土坑を検出し、16世紀以降の遺物が出土した。廃棄土坑が多い点では今回の調査と傾向が似ている（齋藤2001）。

周辺の調査

米沢市教育委員会が行った主な調査は、第4次調査（1991. 5. 28～9. 20）、第6次調査（1998. 7. 13～12. 10）、第8次調査（1999. 8. 23～1999. 10. 29）、第9次調査（2000. 7. 23～8. 11）が



第3図 遺跡位置図 (国土地理院発行2万5千万分の1地形図「米沢」・「糠野目」・「米沢北部」・「米沢東部」を使用)

ある。第4次調査は米沢城史苑建設に伴うもので、東二の丸跡に当たる。掘立柱建物跡27棟、土坑37基、溝跡21条、その他給水施設や洗い場状遺構、便所などが検出された。14世紀～18世紀までの遺構と考えられている。第6次調査は当センターと合同で行われ、市担当調査区は二の丸に配されていた寺院跡と考えられ、礎石建物跡や石組水路跡などが検出されている。台所用具等の生活雑器が大量に出土している。第8・9次調査は市道拡幅工事に伴うもので、今回の調査区同様、南三の丸の敷地内に当たる。二の丸堀跡、池状遺構、土坑などが検出されている。出土遺物としては、土師質土器、瓦質土器、陶磁器、土製品（埴埴）、木製品などが挙げられる。堀跡の形状が絵図と異なることが指摘されている。

3 遺跡の層序

今回の調査では、基本層序を調査区毎に4箇所設定して堆積状況を観察した²⁾。

I・I'層は現代の整地層で、埋土内にコンクリート片が混じる。II・II'・III層とI層との間に焼土・炭化物が特に多く堆積している。III層からは、近世の陶磁器が出土している。出土状況からII～III層は近世末～近代の整地層と思われる。

整地層
遺構確認面

IV層に砂質シルト層が堆積している。今回の調査ではこの層を遺構確認面とした。10cm強ほどの堆積であるが、各地点で確認された。その下層に黒色の粘土層（無遺物層）があり、それより下層になると砂または礫層がみられる。礫層³⁾はE・G区で確認され、F・H区では深堀を実施しなかったため発見できなかった。しかし、1次調査の基本層序でもIII層より下層が礫層であり、当該地域の地層の堆積として、必ずあるものと思われる。その堅い地盤故に中世以降長期間生活が営まれたものと思われる。

IIないしIII層を掘り下げて遺構確認面を検出できるのは、これまでの調査と同様である。遺構の中には、II・III層を掘り下げているものも少なくない。

註

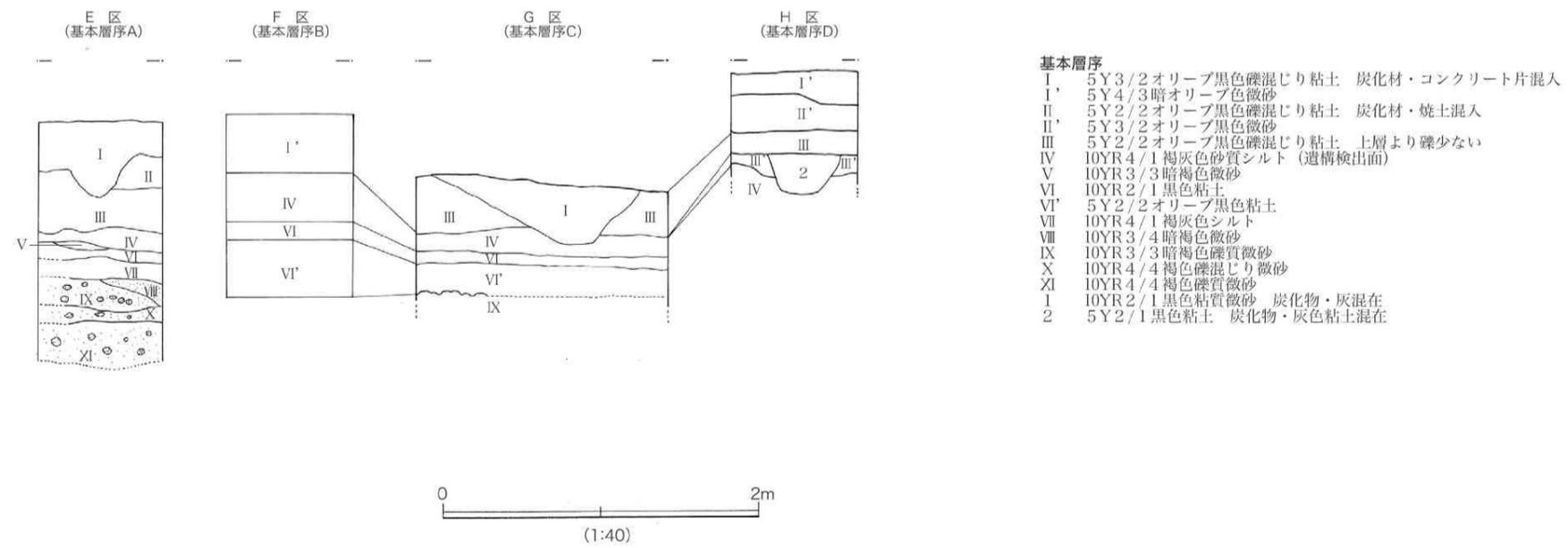
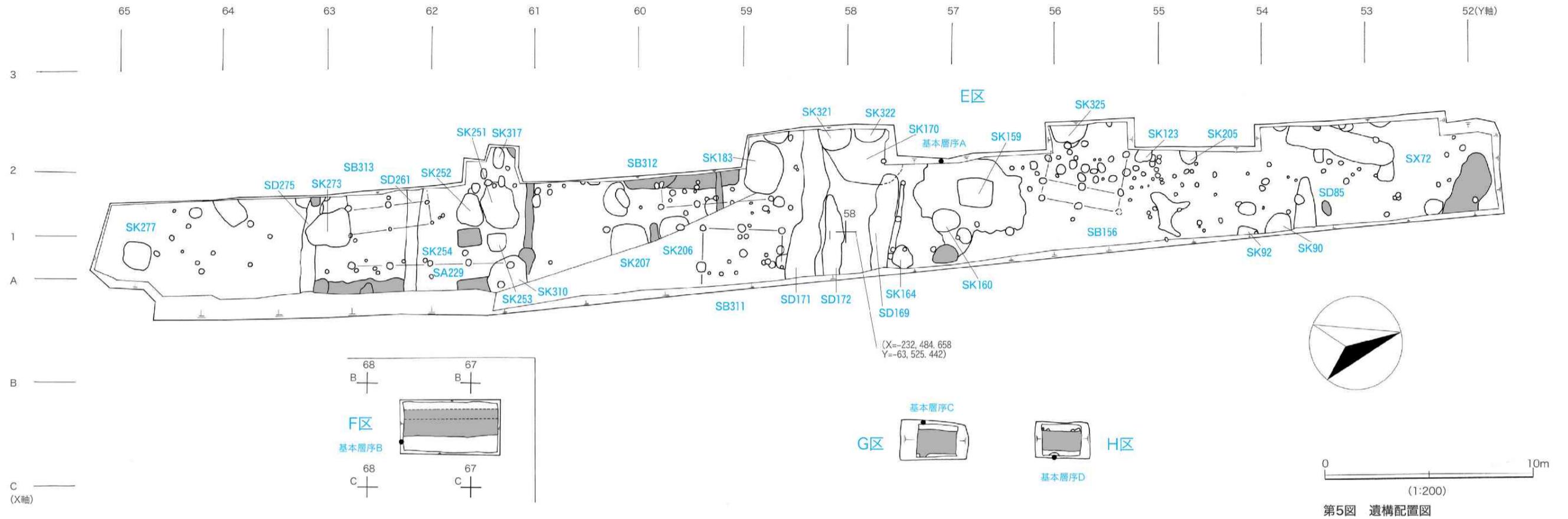
- 1) 角屋由美子氏のご教示による。
- 2) 阿子島氏から調査区の東西で砂利層が上昇してくる箇所を検出し、旧河道の痕跡を確認できればとのご教示を頂いた。E区と道路を挟んで東側のG区での土層の比較では砂利層の高さが数cmしか変わらず、痕跡を見つけ出せなかった。
- 3) 扇状地扇端部の堆積要素として礫層は一般的である（阿子島功氏のご教示による）。

引用文献

- | | | |
|------|------|---|
| 山形県 | 1961 | 『新編鶴城叢書下巻 山形県史 史料篇』山形県 |
| 渡辺理絵 | 2003 | 「米沢城下町絵図と侍の居住について」『山形県地域史研究28』山形県地域史研究協議会 |
| 高桑登他 | 1999 | 『米沢城跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第66集）山形県埋蔵文化財センター |
| 齋藤健他 | 2001 | 『米沢城跡第2次発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第89集）山形県埋蔵文化財センター |
| 月山隆弘 | 1994 | 『米沢城発掘調査報告書』（米沢市埋蔵文化財調査報告書第44集）米沢市教育委員会 |
| 菊池政信 | 2000 | 『米沢城東二の丸跡発掘調査報告書』（米沢市埋蔵文化財報告書第68集）米沢市教育委員会 |
| 月山隆弘 | 2002 | 『米沢城南三の丸跡発掘調査報告書』（米沢市埋蔵文化財報告書第76集）米沢市教育委員会 |



第4図 米沢城跡関連調査概要図



※水系レベルはすべて251.100m
第6図 基本層序

III 遺構と遺物

1 掘立柱建物跡・柵列

調査では、多数の柱穴が検出されたが、調査区が幅5～7mの長方形の設定のため、建物跡と認識できるものは僅かだった。しかし、調査区域は伊達期までは町屋、上杉期以降は上杉家臣団の屋敷地として使用されており、柱穴群はそれに関連すると思われる。

ここでは、掘立柱建物跡・柵列に該当するものについて述べることにする。

SB156 (第7図)

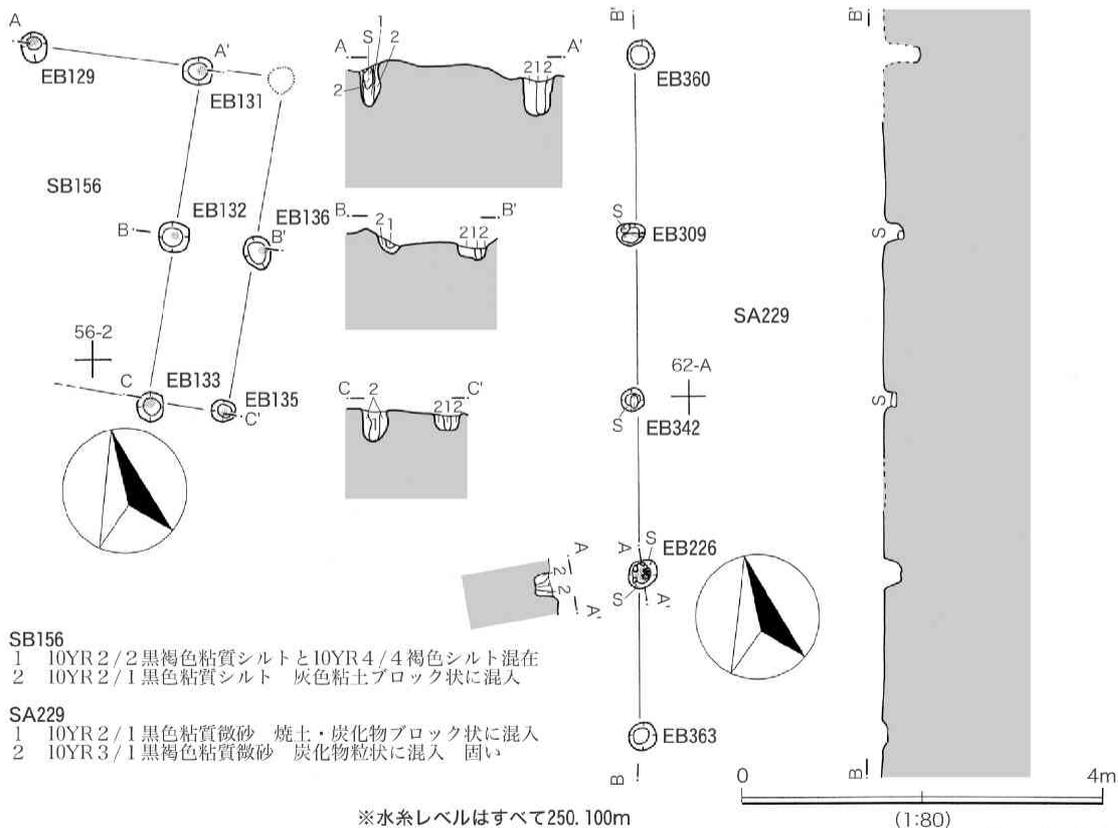
E区55-3・56-2グリッド(以下G)に位置し、東側に庇を持つ建物跡である。身舎の規模は、南北2間(梁行4.1m)、東西不明で、主軸方向はN-66°-Wを指す。柱穴の長径は24～40cm、深さは確認面から14～40cmである。南北の両端の柱穴は中央のものより深い。覆土は、柱痕部分に多量の焼土や炭化木が混在している。掘方は灰色の粘土がブロック状に混じり固くしまっている。柱が焼けた状態で検出されたため被災した建物と思われる。

被災した建物

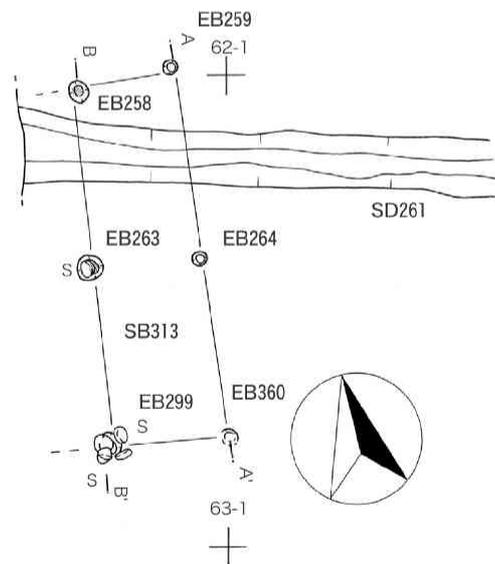
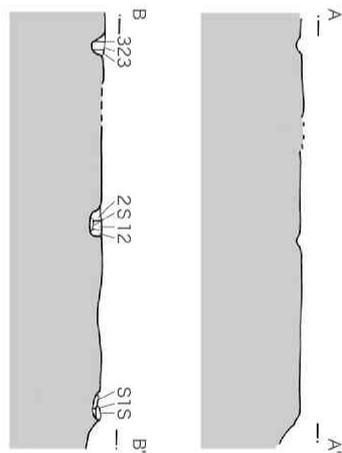
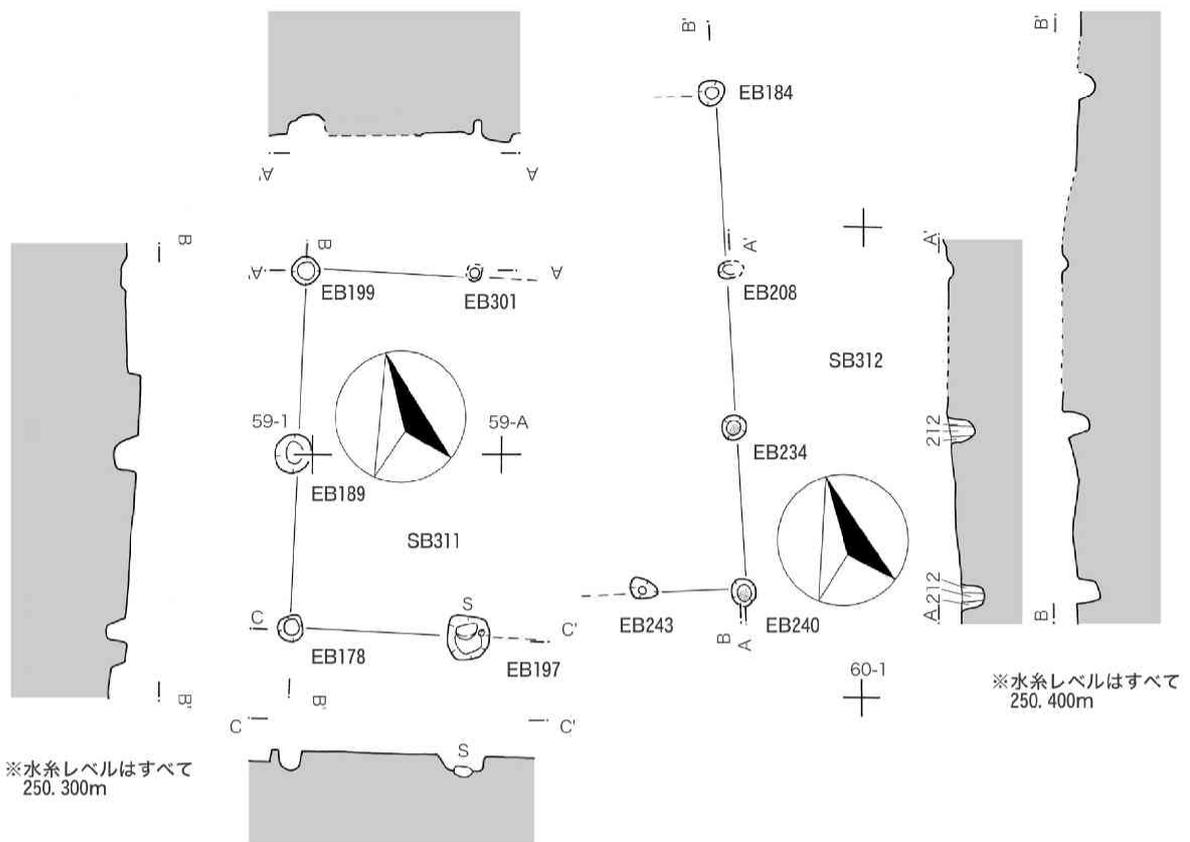
SA229 (第7図)

E区61・62-1Gに位置し、北端の柱穴は一部SK310に壊されている。北側に攪乱などがあり、規模は不明である。主軸方向はN-15°-Wを指す。柱穴の直径は26～32cmで、深さは確認面から8～40cmである。柱穴の中には底面に根石を敷いているものもある。西側に広がる建物

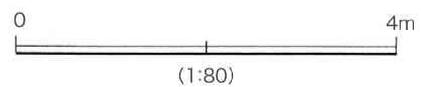
根 石



第7図 SB156・SA229



- SB312**
- 1 10YR 2/2 黒褐色砂質シルト 焼土・炭化物ブロック状に混入
 - 2 10YR 3/1 黒褐色砂質シルト 黄色砂粒状に混入 固い
- SB313**
- 1 10YR 3/1 黒褐色砂質シルト 炭化物混入
 - 2 10YR 2/1 黒色砂質シルト 焼土・炭化物混入
 - 3 10YR 3/1 黒褐色砂質シルト 炭化物混入
 - 4 10YR 4/1 褐色シルト 炭化物混入



第8図 SB311・312・313

S B311 (第8図)

E区58・59-1Gに位置し、東側が調査区外のため不明である。身舎の規模は南北2間（梁行?4.1m）、東西不明で、主軸方向はN-70°-Wを指す。柱穴の直径は20~48cmで、深さは確認面から5~30cmである。E B197のように根石を敷いているものもある。E B301がS D171から壊されているため17世紀後半以前の遺構と考えられる。

S B312 (第8図)

E区58・59-2Gに位置し、西側が調査区外のため不明である。身舎の規模は南北3間（梁行?5.6m）、東西不明で、主軸方向はN-80°-Wを指す。柱穴の直径は25~30cmで、深さは確認面から6~30cmである。柱痕の覆土に多数の焼土と炭化物が混入していた。S K183から切られているため16世紀末~17世紀以前の遺構と思われる。

S B313 (第8図)

E区62-2Gに位置し、東側に庇を持つ建物跡である。西側が調査区外のため不明である。身舎の規模は、南北2間（梁行?4m）、東西不明で、主軸方向は、N-85°-Wを指す。柱穴の直径は15~28cmで、深さは確認面から5~18cmである。庇部分の柱穴は浅く掘り込まれている。E B263のように根石を敷いているものもある。S K273に一部壊されている。

2 溝跡

溝跡は、調査区全体で10条検出された。全て東西方向を軸としたもので、南北に走るものは検出されなかった。また、S D275を境にして南側では中近世の遺構は確認できなかった。

S D85 (第9・10図)

E区53-2Gに位置し東側が調査区外のため不明である。長さは2.4mで、幅は0.5~1.1mである。深さは確認面から50cmを測る。覆土上層に焼土・炭化物が混入している。

出土遺物は、土器2点、磁器9点、陶器5点、碁石1点である。上層から肥前磁器碗、瓶などが出土している。出土した磁器はすべて肥前磁器で皿、碗、瓶が出土している。中には、厚手の「くらわんか手」（4）のみみられる。瓶は覆土上層で出土しているが、文様が単純な蛸唐草と松のセットで、江戸末期の様相を示している。これらの遺物から18世紀末には廃絶したと思われる。

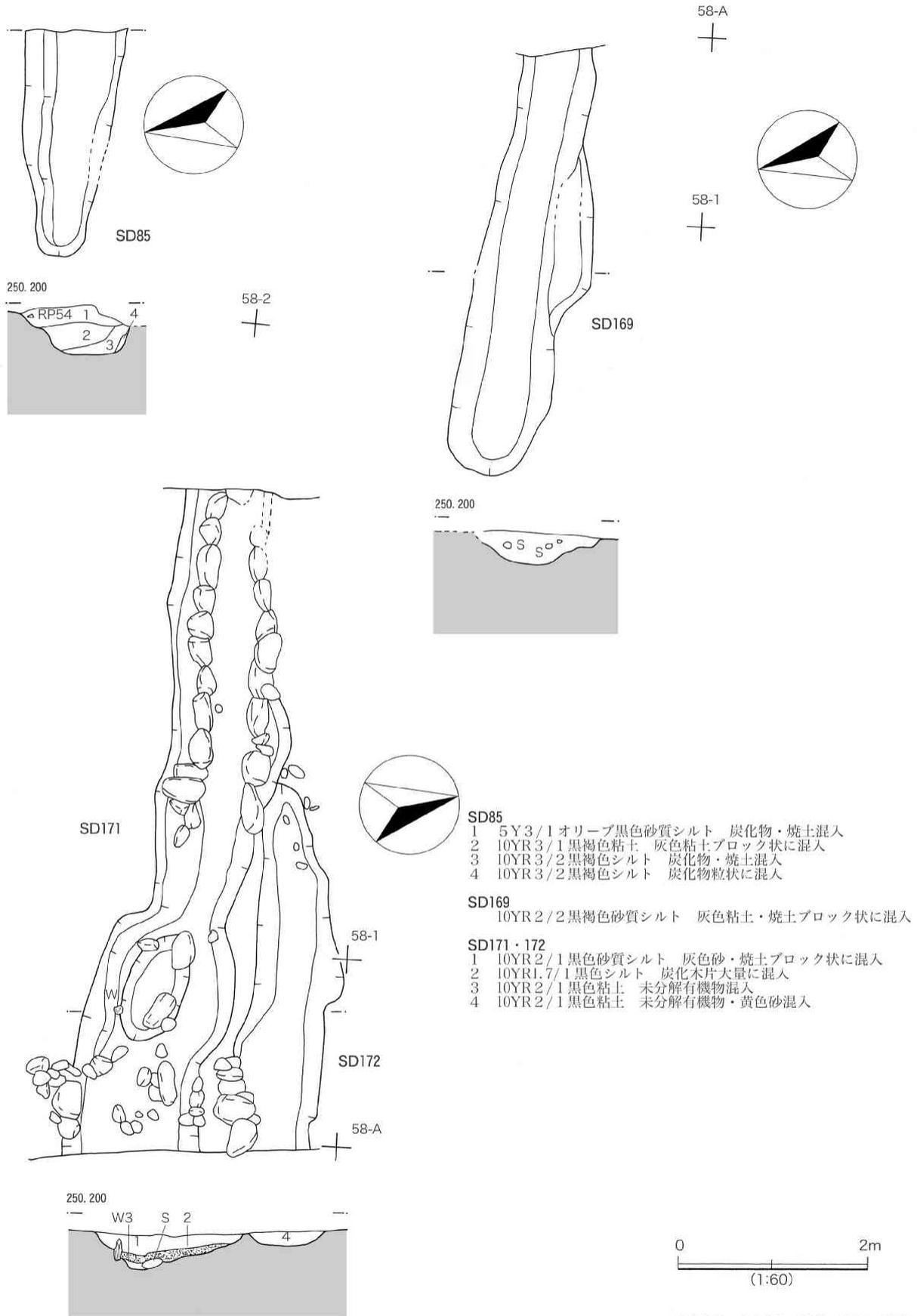
S D169 (第9・10図)

E区57-1・2Gに位置し、東側が調査区外のため不明である。長さは4.5mで、幅は0.7~1.2mである。深さは確認面から34cmを測る。覆土は人為堆積と考えられ、焼土、灰色粘土が混在している。

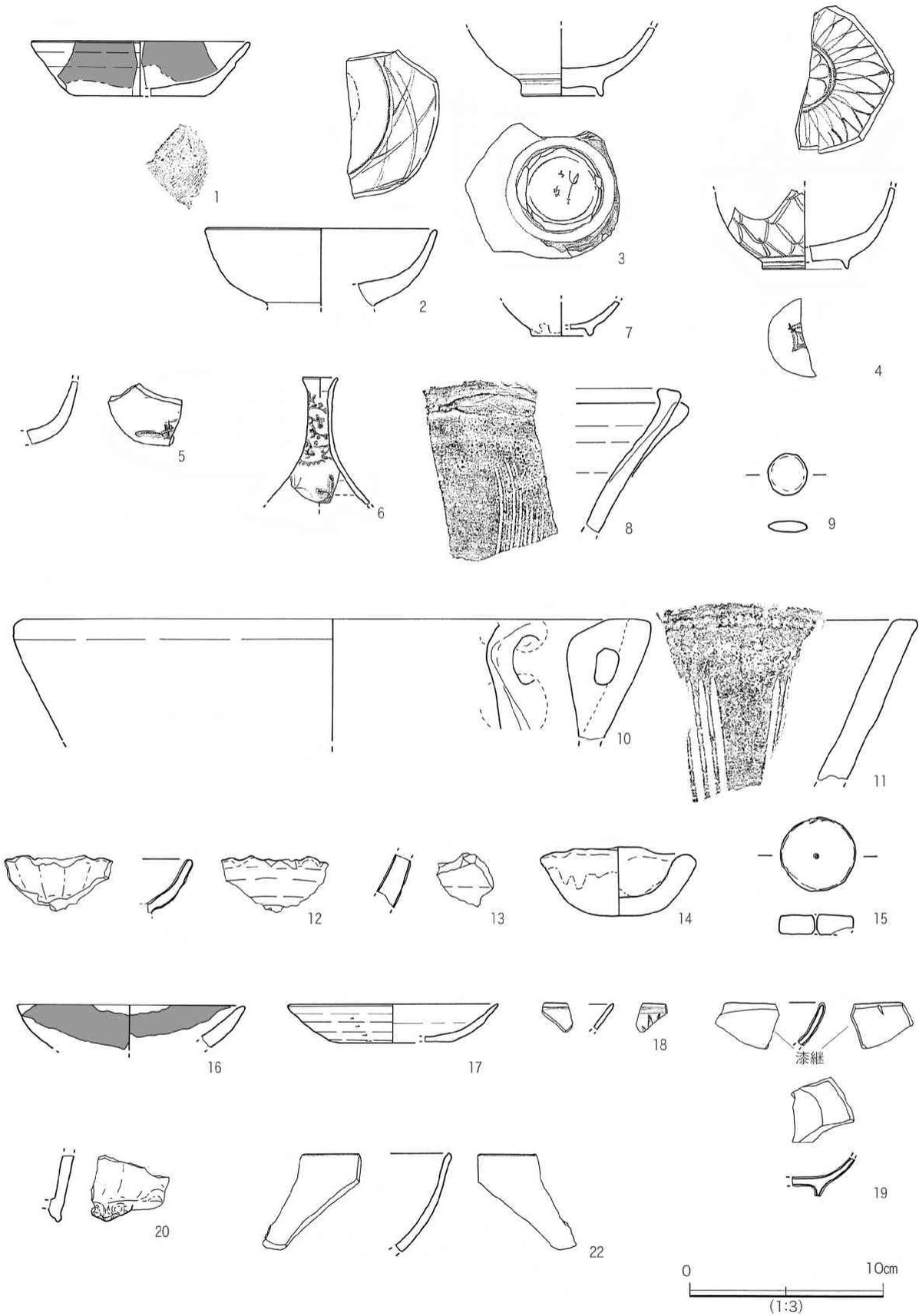
出土遺物は、土器、土製品4点、陶器2点、石製のト車1点である。出土土器・陶磁器の内訳が内耳土鍋・埴塙・志野焼・瓦質土器のみである。志野の輪花皿（12）と盤（13）は大窯期もしくは登窯期の製品と思われ、それに先行する窖窯期のものはない。1次調査でも同時期のものが堀跡下層から出土している。土器としては内耳土鍋があり、外面が被熱して炭化物が付着している。口縁部に向かって、やや外傾する器形である。出土した遺物から17世紀初頭には廃絶したと思われる。

S D171・172 (第9~12図)

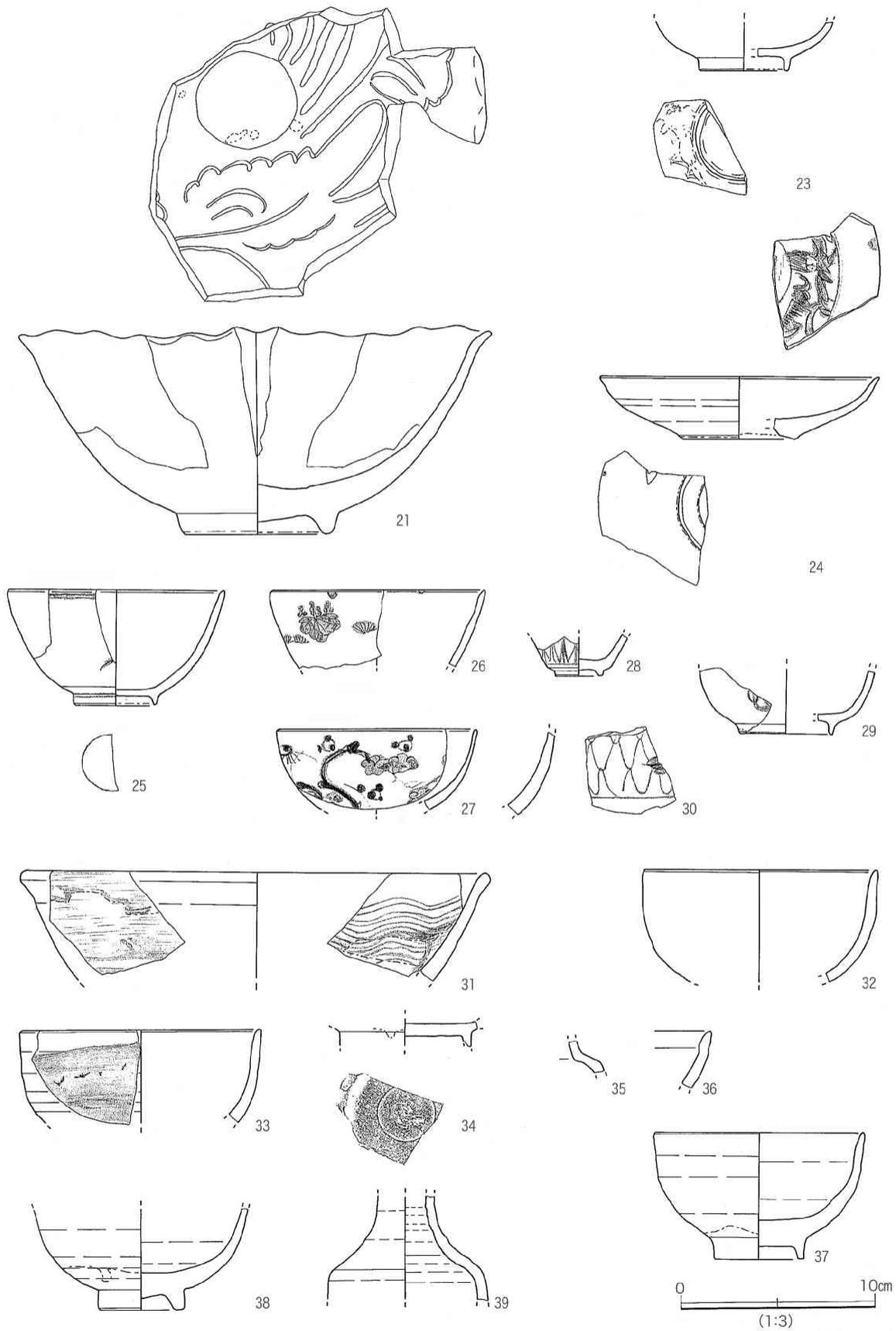
S D171はE区58-A~3Gに位置し、西側の一部がS K170・321により壊され、中央部分土



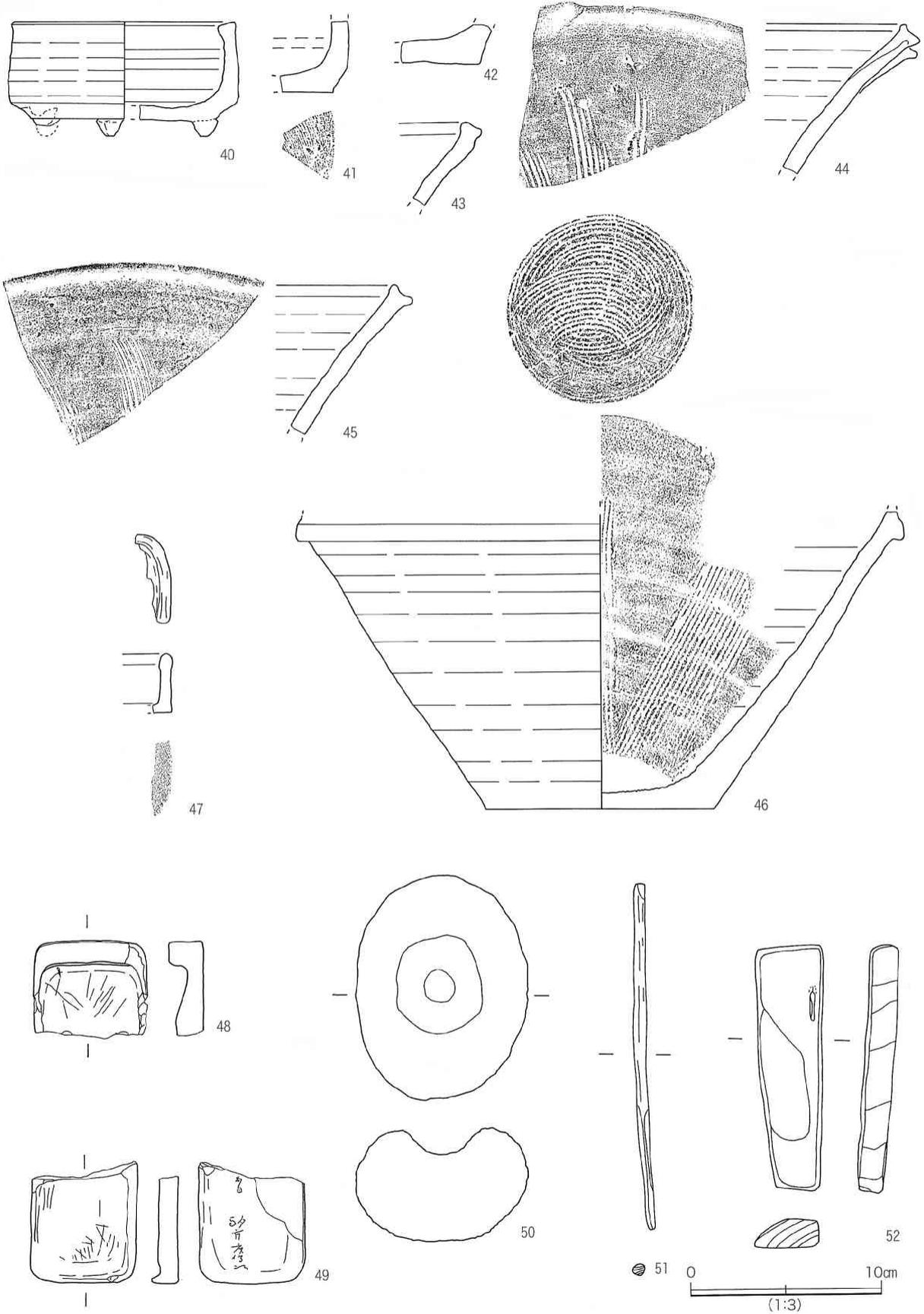
第9図 SD85・169・171・172



第10図 SD85・169・171出土遺物



第11図 SD171出土遺物



第12図 SD171出土遺物

層が攪乱のため壊されている。長さは7mで、幅は0.8～1.7mである。深さは確認面から35cmを測る。溝の両岸は川原石による補強がなされ、東側に向かって幅が広がっている。東側に窪みがあり、最下層から近世陶器が出土している。覆土は3層で、下層に黒褐色粘土、中層に炭化木が多量に混入している黒褐色シルト、上層に焼土が若干混入しているオリーブ黒色シルトが堆積している。

出土遺物は、土器5点、磁器34点、陶器43点と硯、凹石や箸、楔である。

下層の遺物

下層からは17世紀後半代の遺物が多く出土している。中でも肥前磁器と岸窯産陶器が多く、前者では染付の碗、皿、瓶のほか、青磁変形皿、香炉、鉢、色絵碗、白磁うがい茶碗があり、後者では碗、徳利、香炉、水注、甕、播鉢がある。特に波佐見青磁の鉢(21)は、高台の形状や内面の片切り彫りの葉文などから木場山窯より後出の長山田窯の製品と考えられ、比較的丁寧な作りから17世紀後半代のものと思われる¹⁾。また、岸窯の播鉢は口唇部が外に張り出すもの(44・45)と口縁部が内傾するもの(43)があり、前者は1次調査堀跡中層、後者は同調査堀跡下層から出土している(高桑1999)。香炉(40)は岸窯跡出土品の中でも中心となる器形で、底部から直線的に立ち上がる特徴がある(堀江2003)。その他唐津二彩手鉢、肥前京焼き写しの碗や瀬戸・美濃の天日も出土している。木製品としては箸や楔が、石製品として凹石が出土している。

中層の遺物

中層は炭化層で被熱した木片が多数出土した。出土品は18世紀代のものが多く、陶磁器の出土量は下層ほどではない。肥前磁器が已然として大半を占める。他には、産地不明の鬚盥などがある。一部被熱した硯(48・49)が2点出土しているが同一固体の可能性はある。その内1点(49)の裏面には「五日 駒方茂衛門」と刻書されている²⁾。

刻書された硯

上層の遺物

上層覆土にも焼土などが混入しているが、中層ほどではない。遺物は18世紀後半以降のものが多く、18世紀末には廃絶したと思われる。出土量は少なく、肥前磁器や大堀相馬や会津本郷の窯場の陶器が僅かにみられる。

S D172はE区58-2～AGに位置し、東側が調査区外のため不明である。長さは3.9mで、幅は50cmである。東側の一部に石組が残存している。覆土は黒褐色粘土の単層で、S D171の最下層のそれと同様である。遺物が出土しておらず、時期判定は困難であるが、位置や覆土堆積状態からみて、S D171以前の可能性がある。

3 土坑・性格不明遺構

土坑・性格不明遺構は調査区全体で48基検出された。被災などで一括廃棄されたものや崩落土による自然堆積のものなどがある。調査区南側では近代の土坑のみ検出され、近世の遺構は皆無であった。土坑の中には木組みの用水施設(洗い場状遺構?)と思われるものがある(S K159)。

ここでは主な土坑・性格不明遺構について述べることとする。

S X72 (第13・14図)

E区52-2・3Gに位置し、西側が調査区外のため不明である。長径5.1mで、短径1.1～1.3mである。深さは確認面から最大で55cmを測る。覆土は上層にややグライ化した粘土が堆積し、下層に炭化物・焼土を多量に混入した粘土あるいは砂混じり粘土が堆積している。遺構内に土

が堆積してくる過程で、縁辺を護るために土留めの杭が打ち込まれ、板材も敷かれている。出土遺物は木製品のみで、差歯下駄台部1点と連歯下駄2点である。差歯下駄の上部には線刻画が描かれており、漆も塗られている。下駄はすべて底面近くから出土した。出土した遺物から近世でも古い段階を想定できる。

S K 90 (第13～16図)

E区53-1・2Gに位置し、東側が調査区外のため不明である。長径1.3mで、深さは確認面から最大で15cmを測る。S K 90より上層に近代の整地層と炭化層が堆積している。炭化層からは近代以降と思われる遺物が出土している。覆土は2層で、下層に炭化層が堆積している。

出土遺物は磁器5点、陶器6点のほか、連歯・差歯下駄や樽などの木製品である。16世紀代の中国青花の碗が出土しているが、下層から19世紀代の肥前系磁器や会津本郷産の磁器などが確認されていることから、遺構の廃絶時期は19世紀代と考えられる。出土状況から歪曲し腐蝕した下駄以外の樽（底板・側板・栓）や不明部材は当該期（19世紀）に廃棄したものと思われる。

S K 205 (第13図)

E区54-3Gに位置し、西側が調査区外のため不明である。長径0.85mで、深さは確認面から最大で50cmを測る。東側で柱穴を壊している。覆土は黒褐色砂質粘土の単層で、若干礫が混入する。

出土遺物は、大堀相馬産の小片1点である。遺物から廃棄時期を19世紀に求められる。

S K 123 (第16・17図)

E区55-3Gに位置し、西側が調査区外のため不明である。長径0.8mで、深さは確認面から最大で35cmを測る。覆土は黒褐色砂質粘土の単層で、前述のS K 205と同じ堆積がみられる。

出土遺物は、肥前磁器1点である。型打ちの輪花皿で19世紀の所産である。土層の観察と遺物からS K 205と同時期に求める。

S K 164 (第17図)

E区57-1Gに位置し、平面形が楕円形である。長径1.1m・短径1mで、深さは確認面から最大で28cmを測る。覆土は黒褐色砂質シルトの単層で、炭化物などがブロック状に混じる。

出土遺物は内耳土鍋小片のみで、一部S D 169出土のものと接合した。

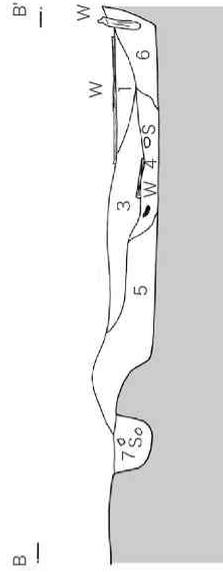
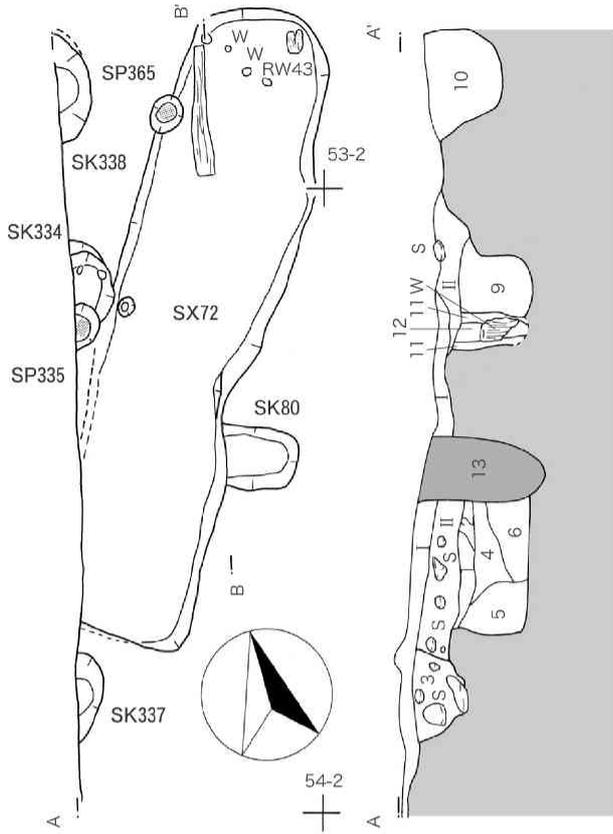
S K 325 (第16～18図)

E区55-3Gに位置し、西側が調査区外のため不明である。長径1.55mで、深さは確認面から最大で70cmを測る。覆土は黒色粘土で、灰色粘土や木片が混入している。遺構直上の整地層（礫が多量に混じる）から大堀相馬産の火入（201）が出土している。

出土遺物は、磁器6点、陶器5点、陶製品（焼台）1点、土人形1点、石製品2点、金属製品（簪）1点、木製品1点である。出土した遺物から19世紀には廃絶したと思われる。

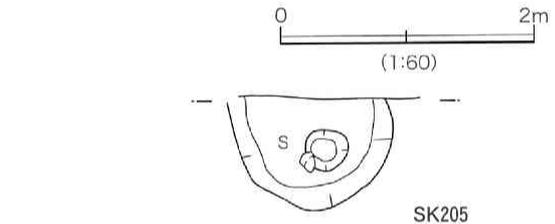
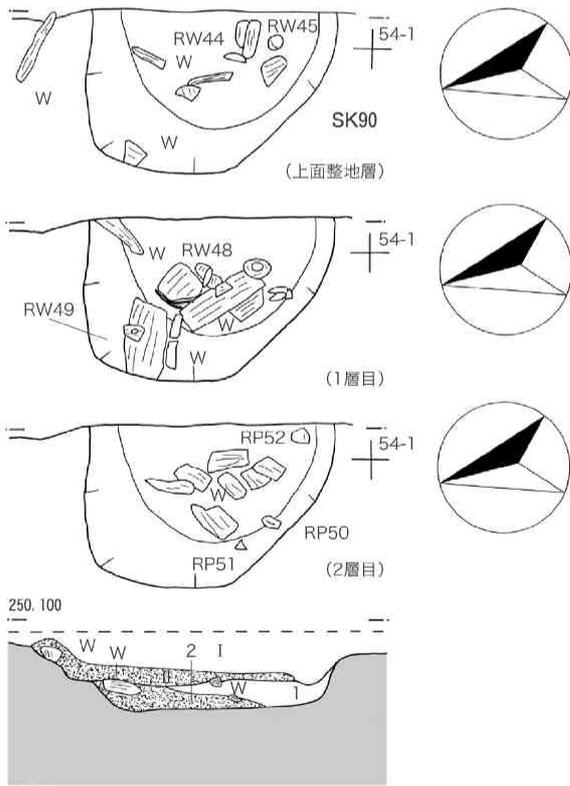
S K 159・160 (第17・18図)

S K 159はE区56-2Gに位置する。平面形が南北に長い長方形である。掘方まで含めた規模は、長径1.7m・短径1.4mで、深さは確認面から35cmを測る。遺構の周囲を浅く窪ませて、階段状に板材を敷いている。北側には板材で囲んでいる様子が窺える。覆土は、木組み内部が黒褐色礫混じり粘土で、掘方が黒褐色礫混じり微砂である。幅10cm程度の角材を使って木組みを

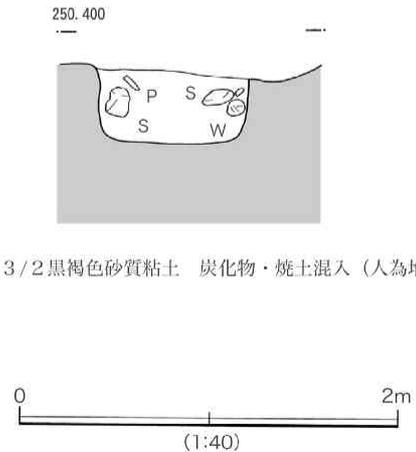


- SX72・SK80・334・337・338・SP335
- I 10YR 2/2 黒褐色砂質シルト 未分解有機物・焼土・炭化物混入(整地層)
 - II 10YR 2/1 黒色砂質シルト 未分解有機物・炭化物・灰色粘土混入(整地層)
 - 1 5Y 3/1 オリーブ黒色粘土 ややグライ化
 - 2 10YR 5/1 褐灰色粘土
 - 3 10YR 3/1 黒色粘土 炭化物ブロック状・木片多量混入
 - 4 10YR 1.7/1 黒色粘土 木片・炭化物混入
 - 5 10YR 3/1 黒褐色粘土 灰色粘土・炭化物・木片混入
 - 6 10YR 2/2 黒褐色砂混じり粘土 焼土・褐灰色粘土混入
 - 7 10YR 1.7/1 黒色砂質粘土 礫混じる
 - 8 10YR 3/1 黒褐色礫混じり粘土 灰色粘土ブロック状に混入
 - 9 5Y 2/1 黒色礫混じり粘土 灰色粘土ブロック状に混入
 - 10 5Y 3/2 オリーブ黒色礫混じり粘土未分解有機物・黄色砂混入
 - 11 5Y 2/1 黒色粘土 灰色粘土混入
 - 12 5Y 2/2 オリーブ黒色粘土 灰色粘土ブロック状に混入
 - 13 10YR 2/3 黒褐色礫混じり粘土 灰色粘土・黄色砂混入(攪乱)

※水系レベルはすべて250.400m

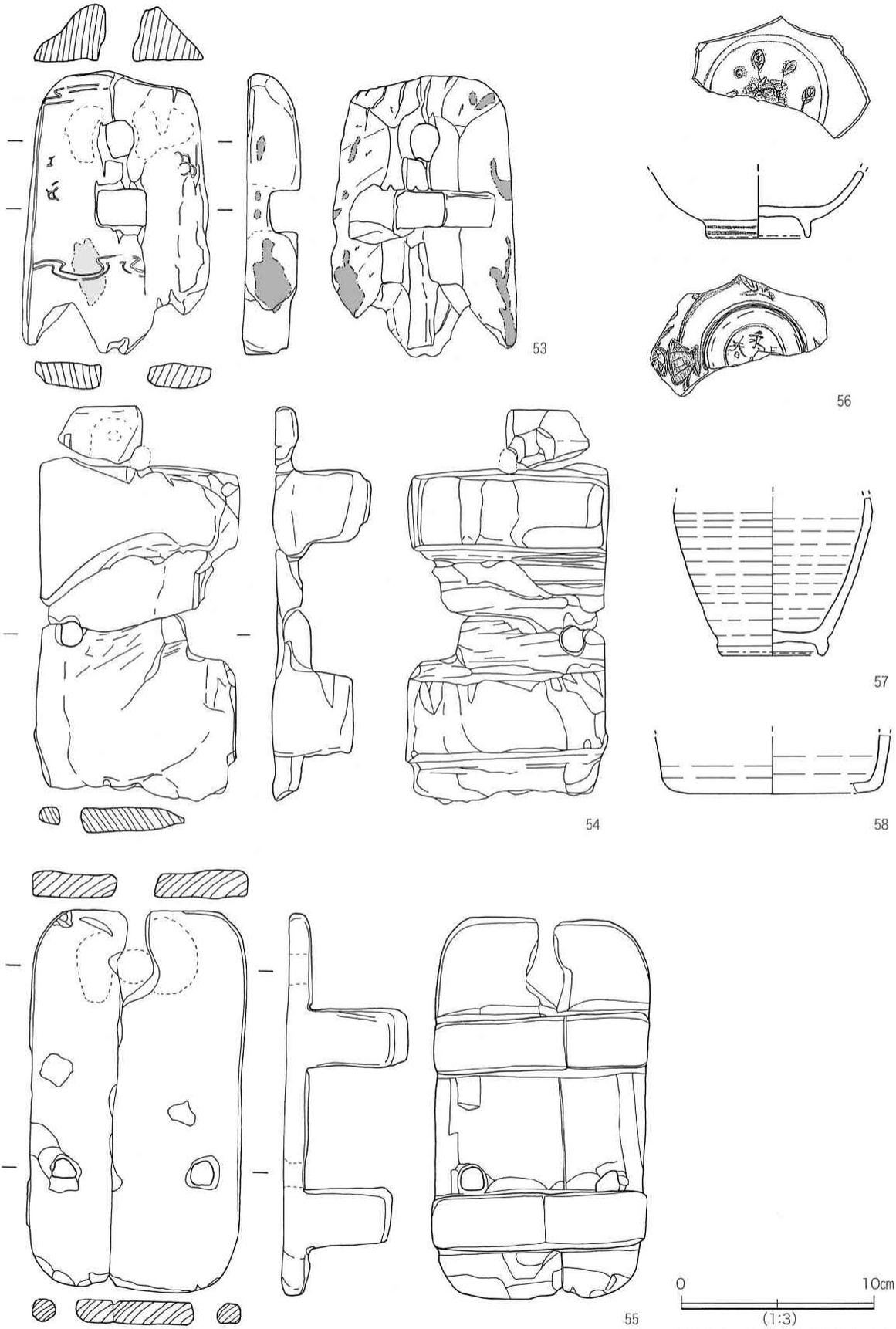


SK205
10YR 3/2 黒褐色砂質粘土 炭化物・焼土混入(人為堆積)

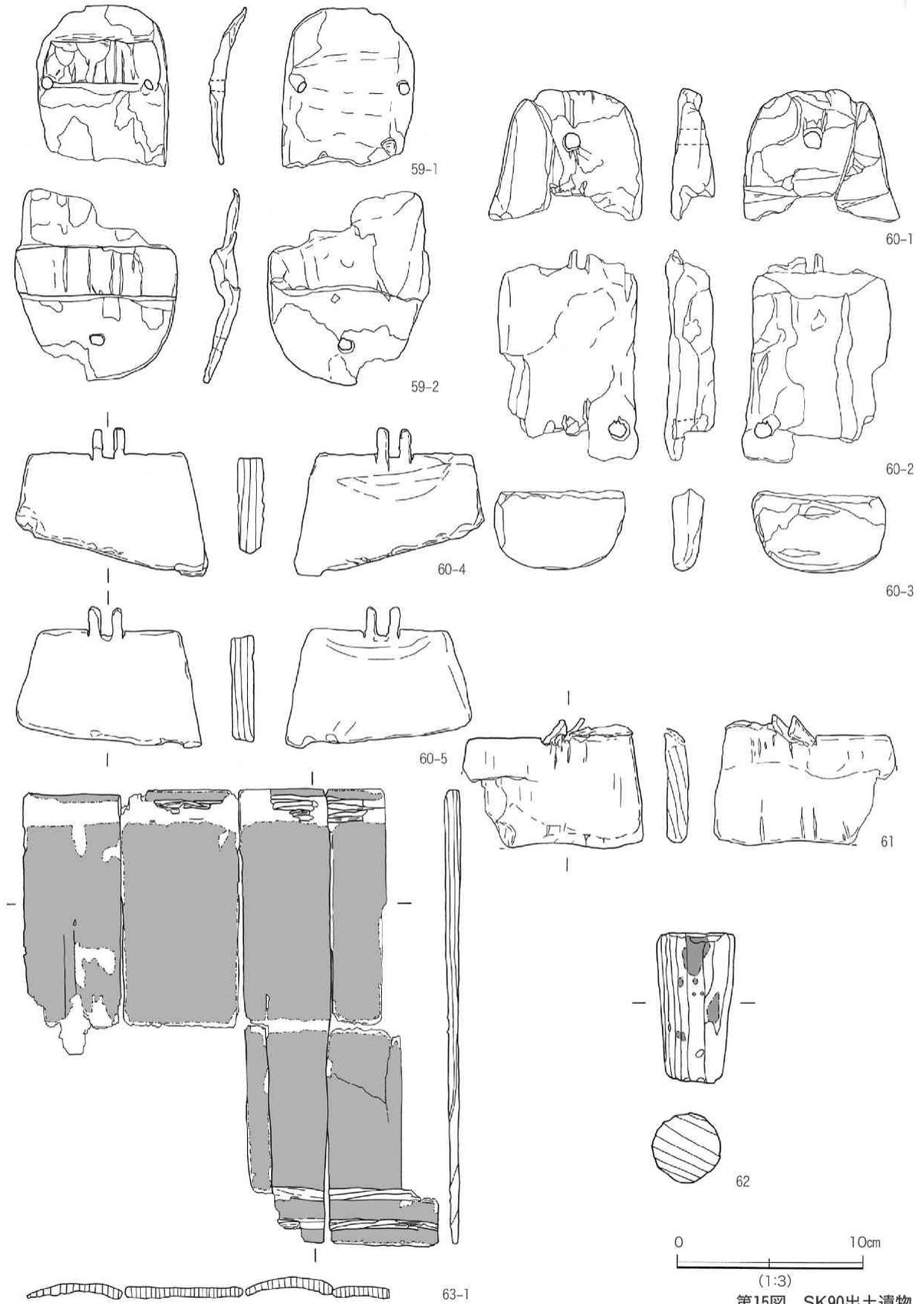


- SK90
- I 10YR 3/3 暗褐色砂質粘土 未分解有機物混入
 - II 10YR 2/1 黒色シルト 炭化物・木片混入
 - 1 10YR 3/2 黒褐色シルト 炭化物粒状・木片混入
 - 2 10YR 3/1 黒褐色シルト 上層に炭化物多い・下層に木片(板材)散乱

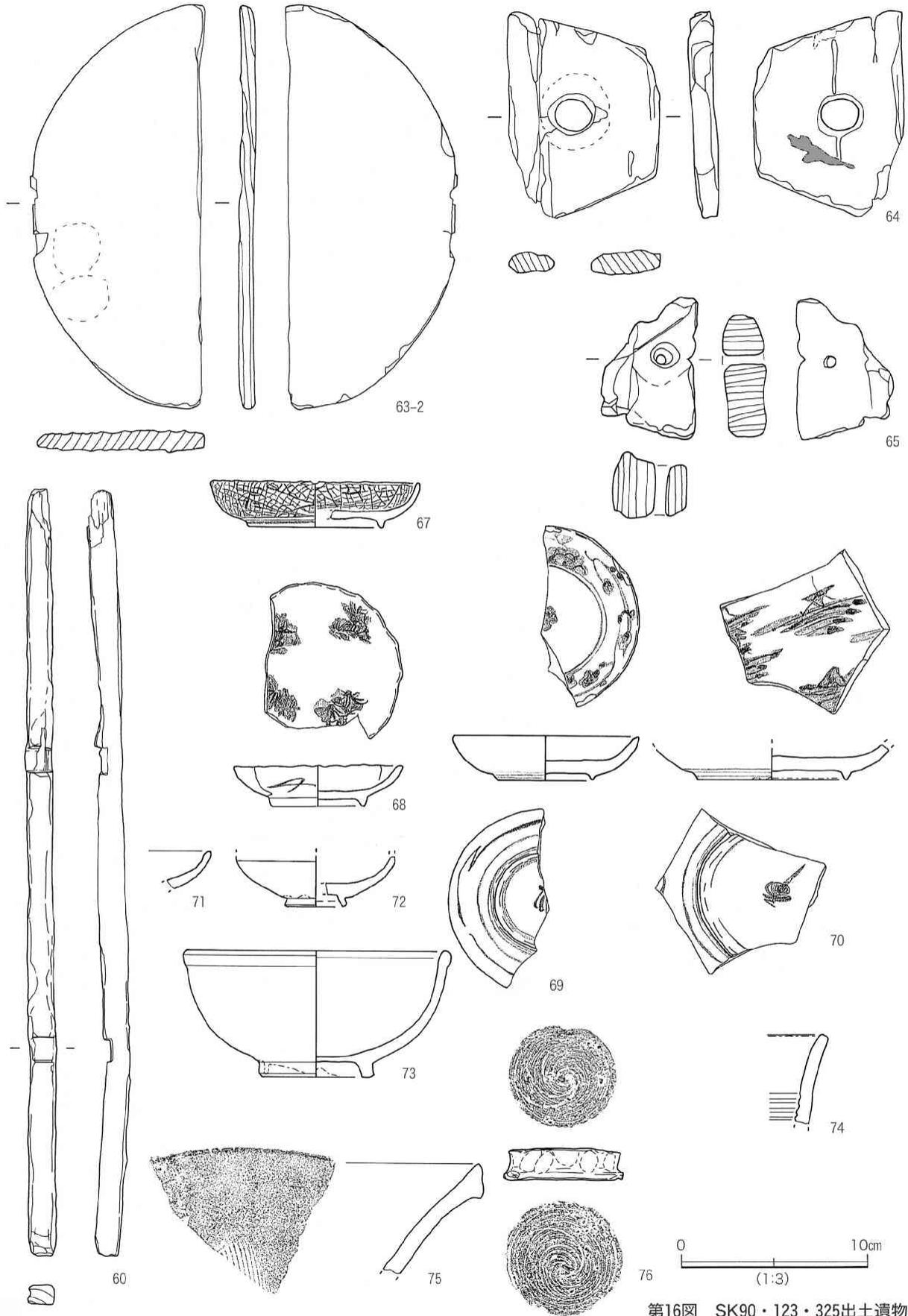
第13図 SX72・SK90・205



第14図 SX72・SK90出土遺物



第15図 SK90出土遺物



第16図 SK90・123・325出土遺物

洗い場状遺構

している構造である。検出当初井戸跡を想定したが、深さが35cm程度と浅く、角材と杭で簡単に組んだだけの施設であることから洗い場状遺構と考えられる。洗い場状遺構については、米沢城東二の丸の発掘調査（月山他1994）にて検出されており、地面を方形に掘り込み、丸太材を四角に組んでいる（遺構名Z P 7）。

出土遺物は、土器2点、磁器8点、陶器8点、ガラス製品1点、その他多くの木片である。

S K 160はE区56・57-2 Gに位置し、平面形が楕円形である。遺構直上に板材を敷いてあるためS K 159より古い遺構を想定できる。長径1.3m、短径1 mで、深さは確認面から最大で30cmを測る。覆土は2層であるが、下層に若干細砂が多く混じる。

出土遺物は、土器2点、磁器12点、陶器4点、籬3点である。

双方とも出土遺物の様相は酷似し、肥前の製品のほかに平清水産や肥前系の陶磁器、大堀相馬産・会津本郷産の陶器がある。19世紀には廃絶したと思われる。

S K 170・321・322（第19～23図）

S K 170³⁾はE区57-3～58-2 Gに位置し、西側が調査区外のため不明である。中央部が窪み、一部板材が敷かれている。深さは確認面から最大で30cmを測る。

出土遺物は、土器1点、磁器53点、陶器21点などである。17世紀後半代の遺物があるが、近現代のものが大量に含まれることから近年まで使用されていたと思われる。

S K 321とS K 322は57・58-3 Gに位置し、双方とも上層をS K 170により壊されている。西側が調査区外のため不明である。長径がそれぞれ1 mと1.5mで、深さは確認面からそれぞれ35cmと1 mを測る。覆土はややS K 322の方が砂を多く含むのが黒褐色の粘質土である。

出土遺物は、前者が土器3点、磁器16点、陶器11点、後者が磁器28点、陶器10点である。双方とも近代の遺構と思われる。前者では特に軍帽形の磁器小坏（135）が出土している。内面に「□□記念」とあり、底部が飛行機の形状をしている⁴⁾。後者では、被熱した成島焼の壺・甕が出土している。近代の遺物も多く被熱しており、大正8年の大火災が想起される⁵⁾。

大正8年の大火災

S K 183（第19・23・24図）

E区58-2・3 Gに位置し、平面形は楕円形である。長径2.5m・短径1.75mで、深さは確認面から最大で70cmを測る。覆土は黒褐色砂質粘土の単層で人為堆積である。

出土遺物は土器5点、土製品1点、磁器2点、陶器1点、その他夥しい数の木製品（箸、下駄、曲物部分など）である。瓦質土器の鉢（133）の口縁部に穿孔があり、吊り下げるための穴と思われる。出土した遺物から17世紀には廃絶したと思われる。

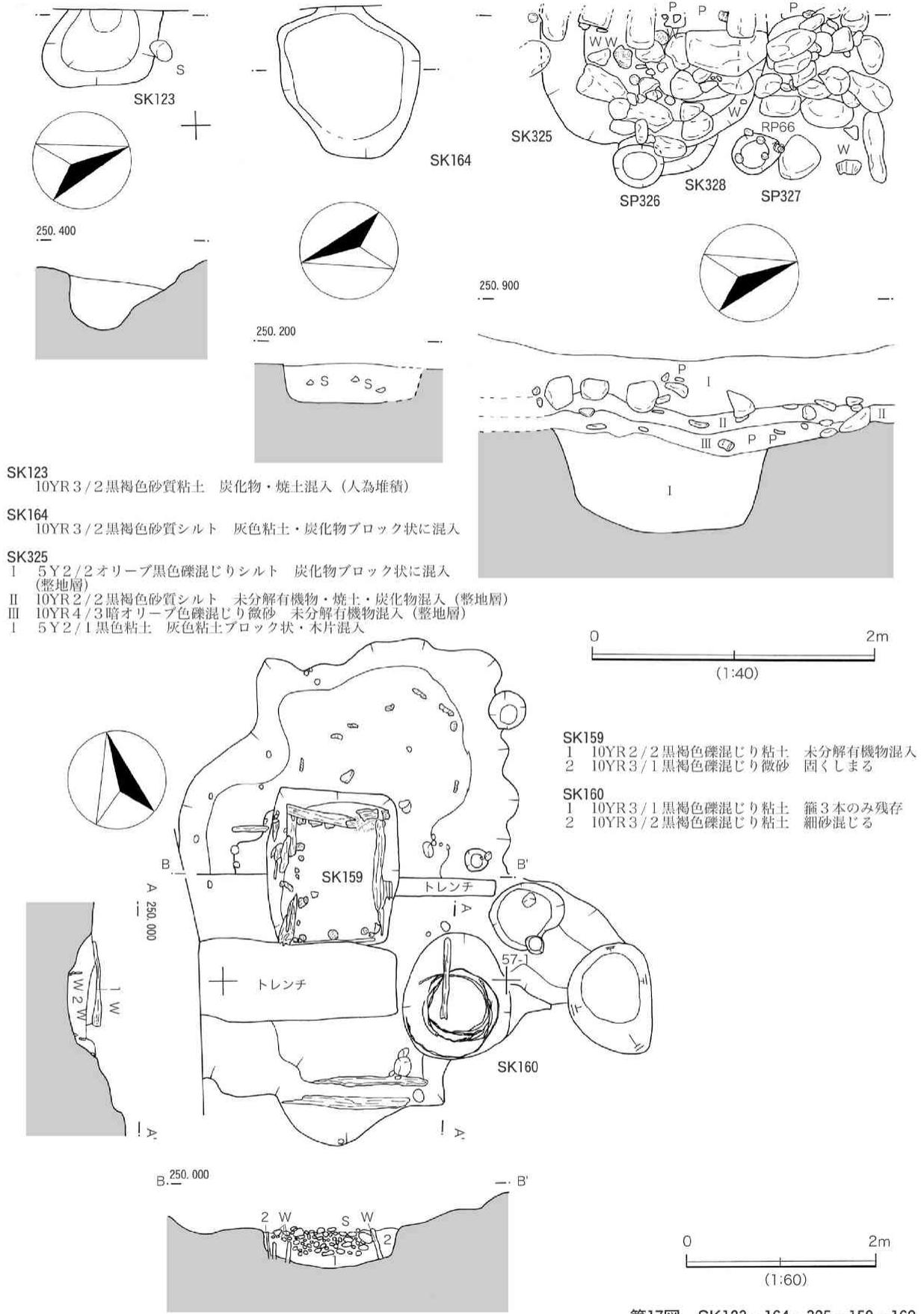
S K 206・207（第25・27図）

S K 206はE区59-1・2 Gに位置し、東側が道路造成時の攪乱により壊され不明である。中央部に窪みがある。長径1.45mで、深さは確認面から50cmを測る。覆土は4層で、3層目に炭化層が堆積している。

出土遺物は、炭化層より上層で確認され、陶器2点、石製品1点である。砥石（143）は被熱して表面に煤が付着している。遺物の様相から17世紀後半代には廃絶したと思われる。

S K 207はE区59-2～60-1 Gに位置し、S K 206と同様に東側が不明である。長径1.85mで、深さは確認面から70cmを測る。覆土は4層で中層に炭化層がある。

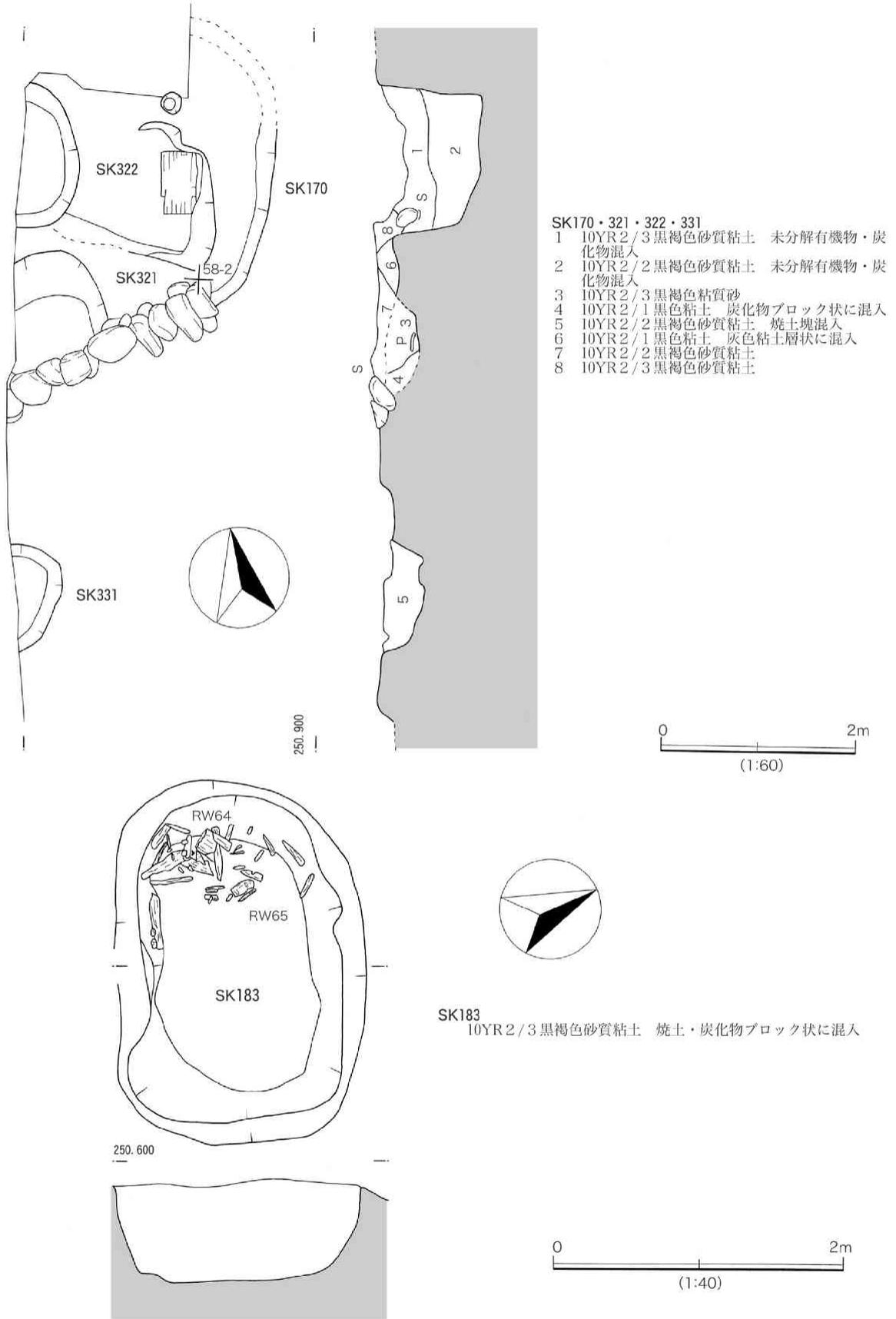
出土遺物は最下層と炭化層で確認され、土器1点、磁器2点、陶器2点である。中国青磁碗



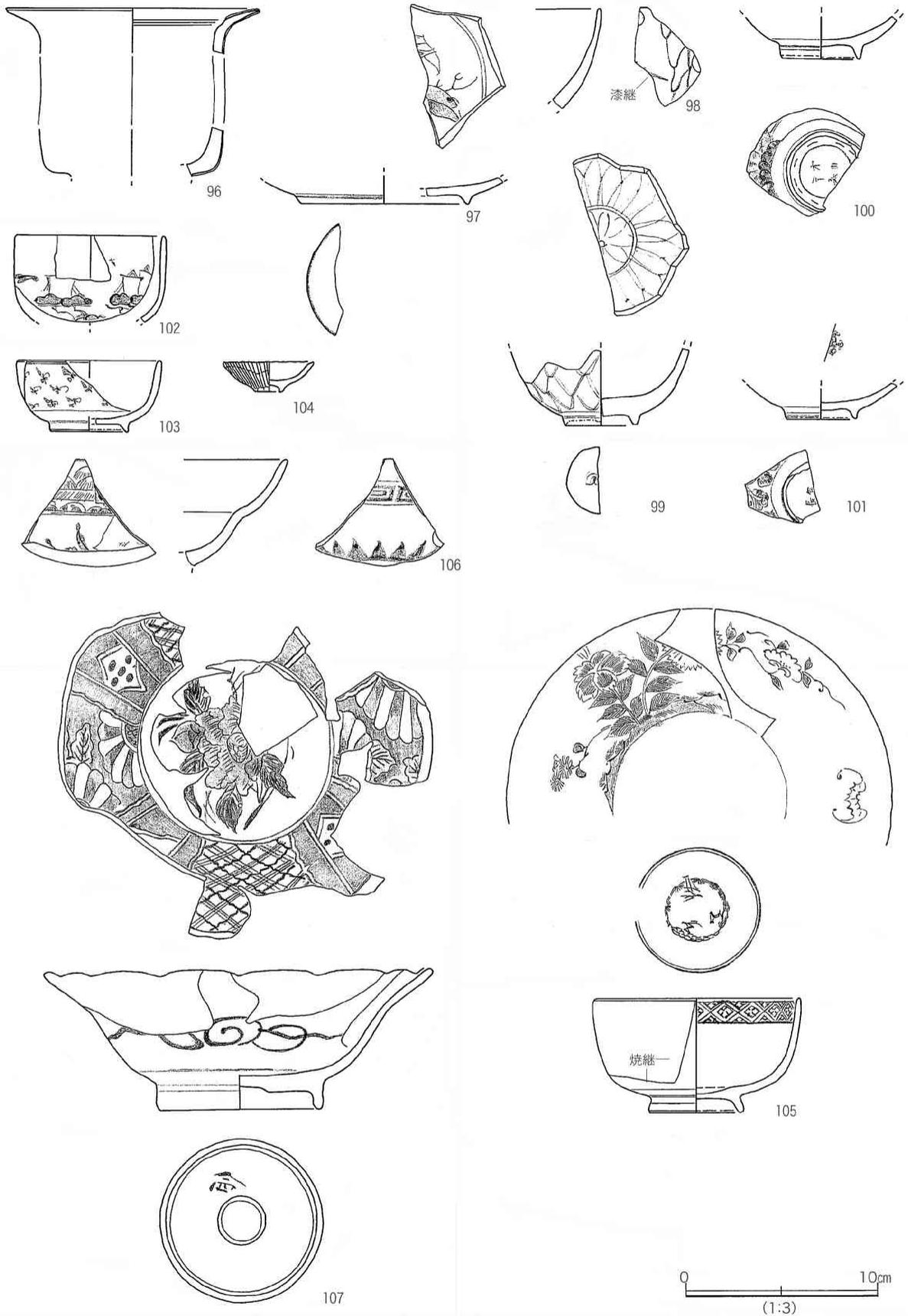
第17図 SK123・164・325・159・160



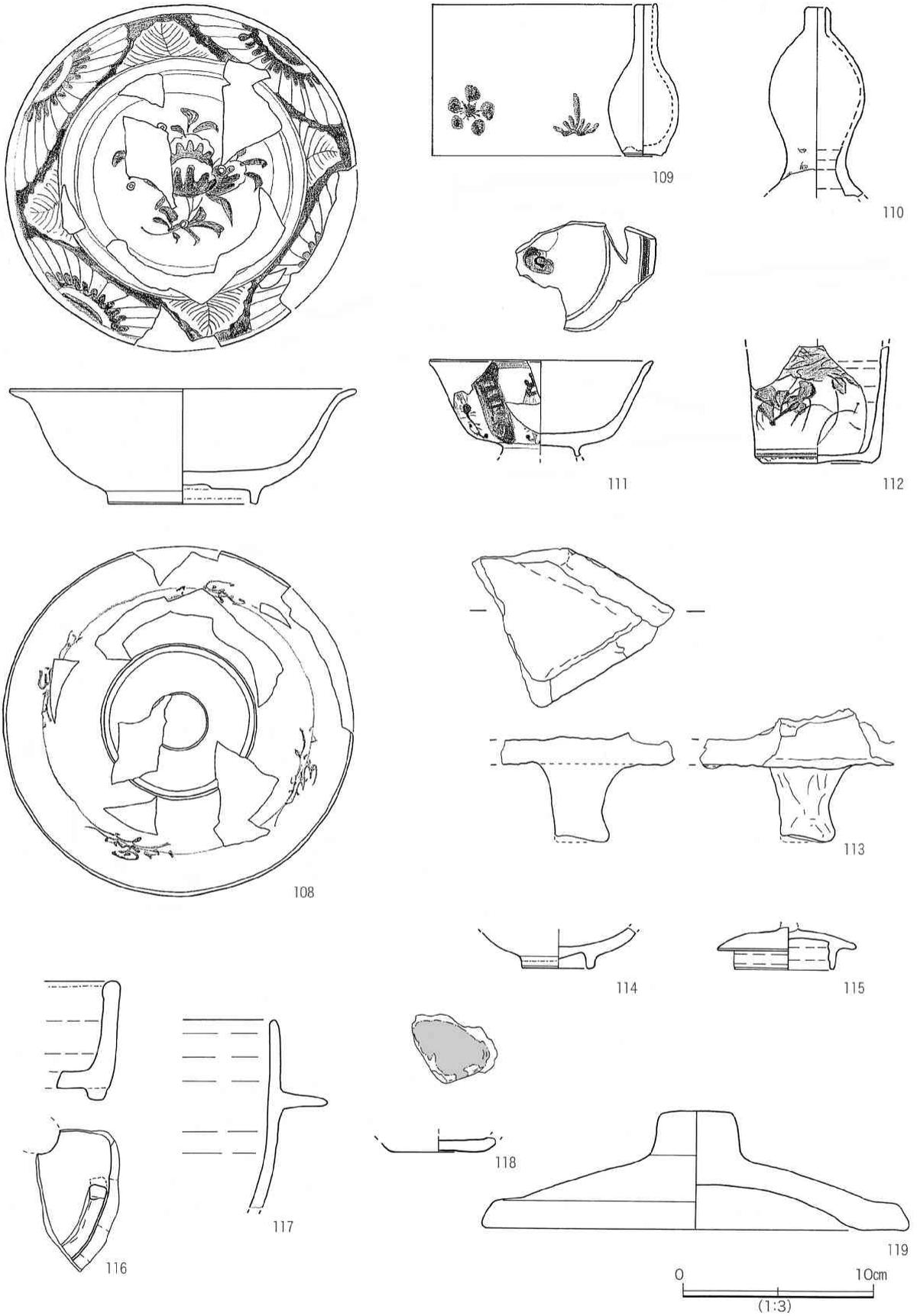
第18図 SK325・159・160出土遺物



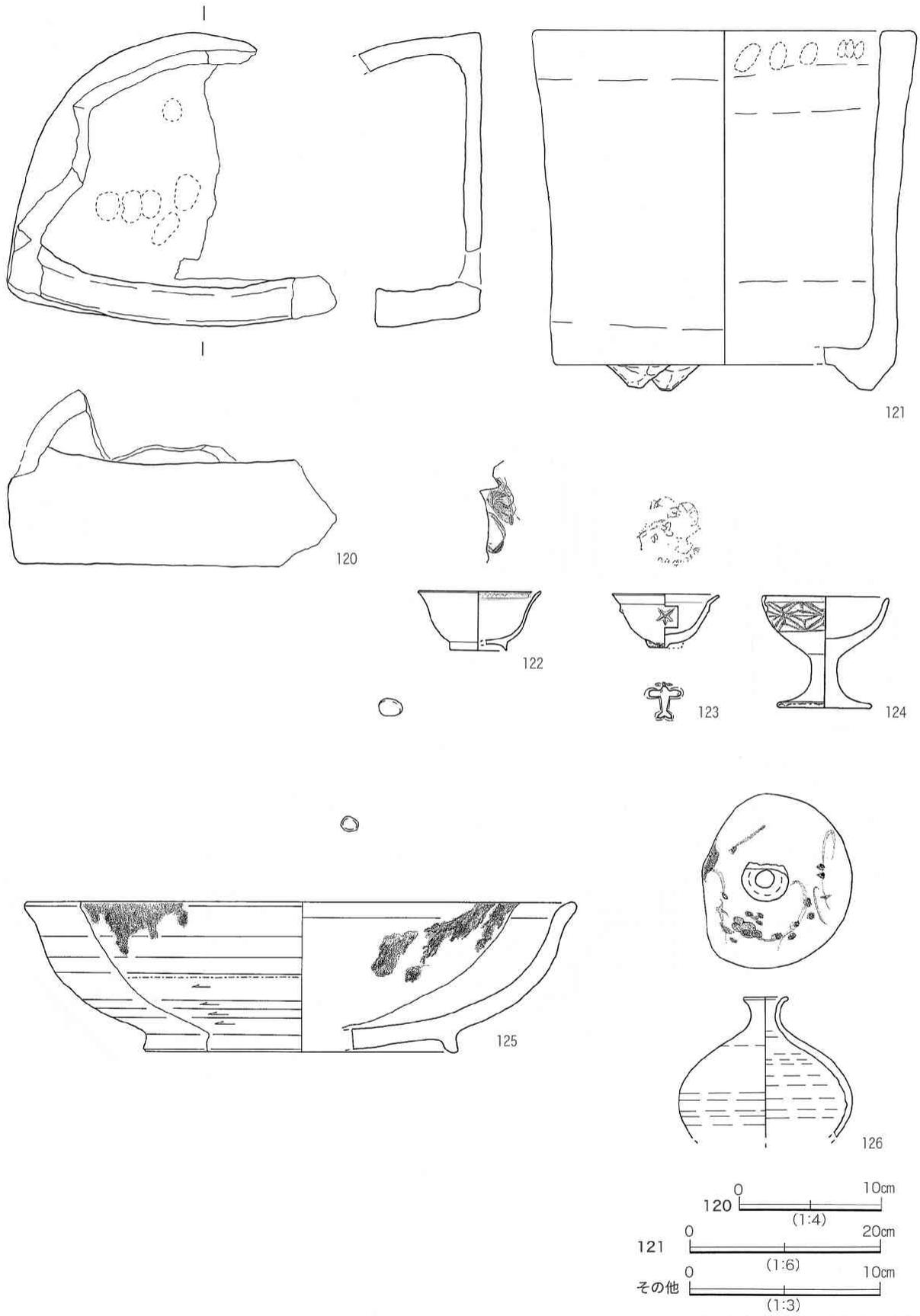
第19図 SK170・321・322・183



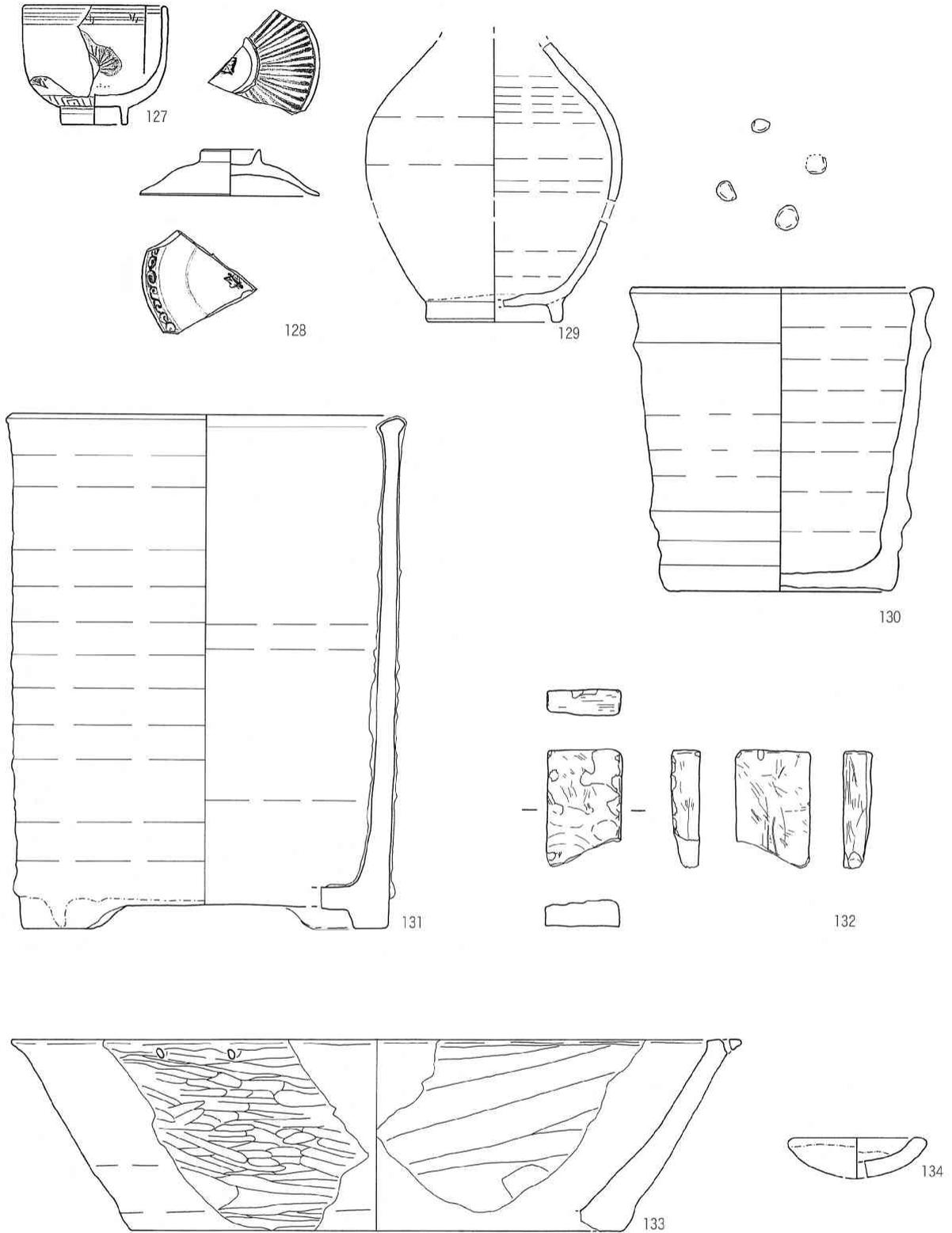
第20図 SK170出土遺物



第21図 SK170・321出土遺物

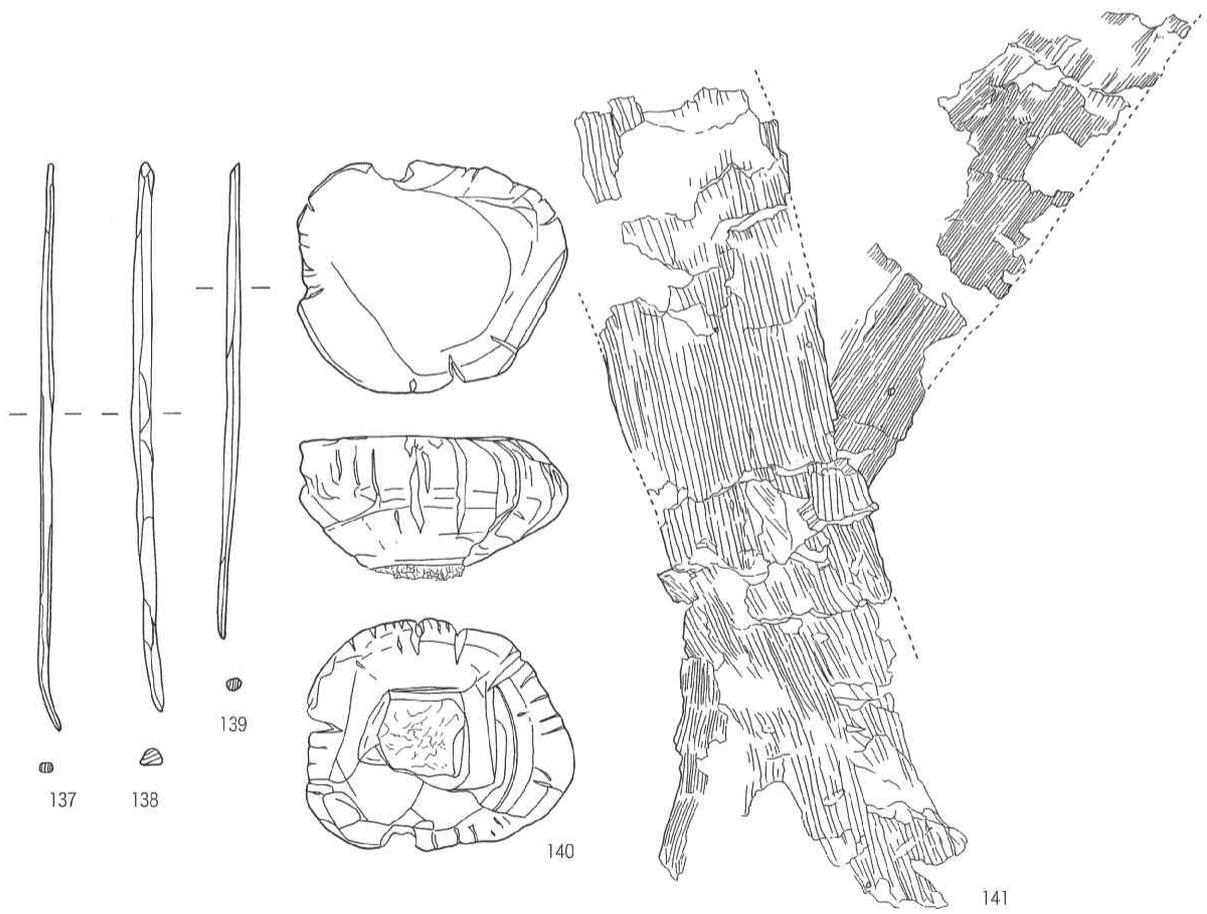
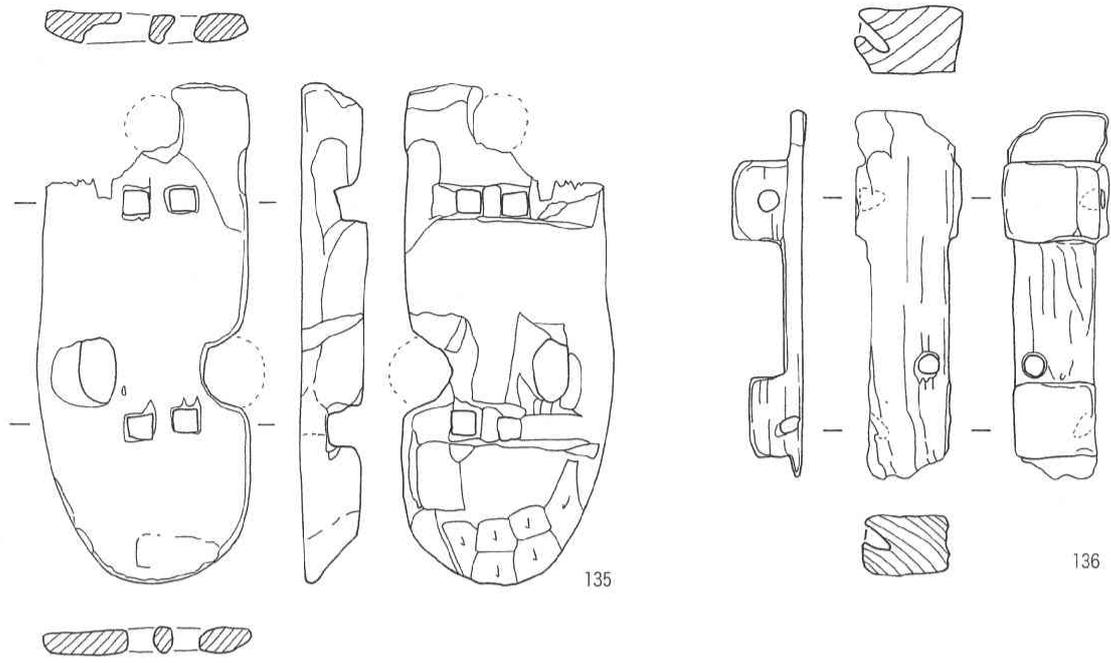


第22図 SK321・322出土遺物



0 10cm
(1:3)

第23図 SK322・183出土遺物



第24図 SK183出土遺物

(144)、瀬戸美濃天目(145)と播鉢(147)が出土しており、16世紀代の様相を呈している。

S K 317 (第25図)

E区61-3Gに位置し、平面形は楕円形である。長径1m、短径0.5mで、深さは確認面から最大で30cmを測る。覆土は黒褐色砂質シルトの単層である。

出土遺物は、土器1点、磁器1点、陶器1点である。遺物から近代のものと思われる。

S K 310 (第25・27図)

E区61-1~AGに位置し、東側は調査区外のため不明である。長径1.85mで、深さは確認面から最大で30cmを測る。覆土は黒色粘土の単層である。

出土遺物は土器1点、土製品1点である。遺物から16世紀末には廃絶したものと思われる。

S K 253 (第25・27図)

E区61-1Gに位置し、平面形は隅丸方形である。長径0.9m、短径0.85mで、深さは確認面から最大で30cmを測る。南側に板材の囲みがあり、底面に大きめの礫が埋土している。覆土は4層で下層に黒褐色粘土、上層に黒褐色シルトが堆積している。

出土遺物は、磁器1点、陶器1点である。遺物から19世紀には廃絶したと思われる。

S K 251・252 (第26・27図)

S K 251・252ともにE区61-2Gに位置し、平面形は双方とも不整形である。前者は長径2.2m、短径1.5mで、深さは確認面から最大で25cmを測る。後者は長径1.55m、短径1.2mで、深さは確認面から最大で18cmを測る。覆土は多少の色調の差はあるが、焼土混入の黒褐色砂質シルトの単層である。

出土遺物は、S K 251が土器9点、土製品1点、陶器1点、S K 252が土器8点、土製品2点である。内耳土鍋(152)の口縁部がやや直立しており、S D 169・S K 164出土遺物より新しい要素を含んでいる。廃絶の時期を双方とも17世紀としたい。

S K 273 (第26~30図)

E区62-2~63-1Gに位置し、平面形は不整形である。南側でS D 275を壊している。長径2.1m、短径1.4mで、深さは確認面から45cmを測る。覆土は黒色礫混じり粘土の単層で、多量の自然木が廃棄されていた。

出土遺物は、土器4点、磁器8点、陶器5点、その他多くの木製品(下駄、漆製品、刳物など)である。土器では「かわらけ」が多く、内1点(156)には「七月廿四日 志源□□」と墨書されている⁶⁾。陶器では17世紀後半の京焼き写し碗(159)・京焼色絵碗(160)がある。木製品では差歯下駄、漆器椀・皿、柄杓底板(?)、箸、刳物鉢その他不明部材が遺構の底面から出土している。薄手の漆器製品はほとんどが腐蝕しており、採取できない状態のものもあった。漆器碗の165・166は腰が張り、器壁がやや垂直になってくるころのもので、17世紀後半以降の様相を示す。165は外面に緑色漆・口唇部に黒漆・内面に赤漆が見える。特に緑色漆(藍+石黄)を塗っていることは珍しい点である。17世紀後半以降に廃棄されたと思われる。

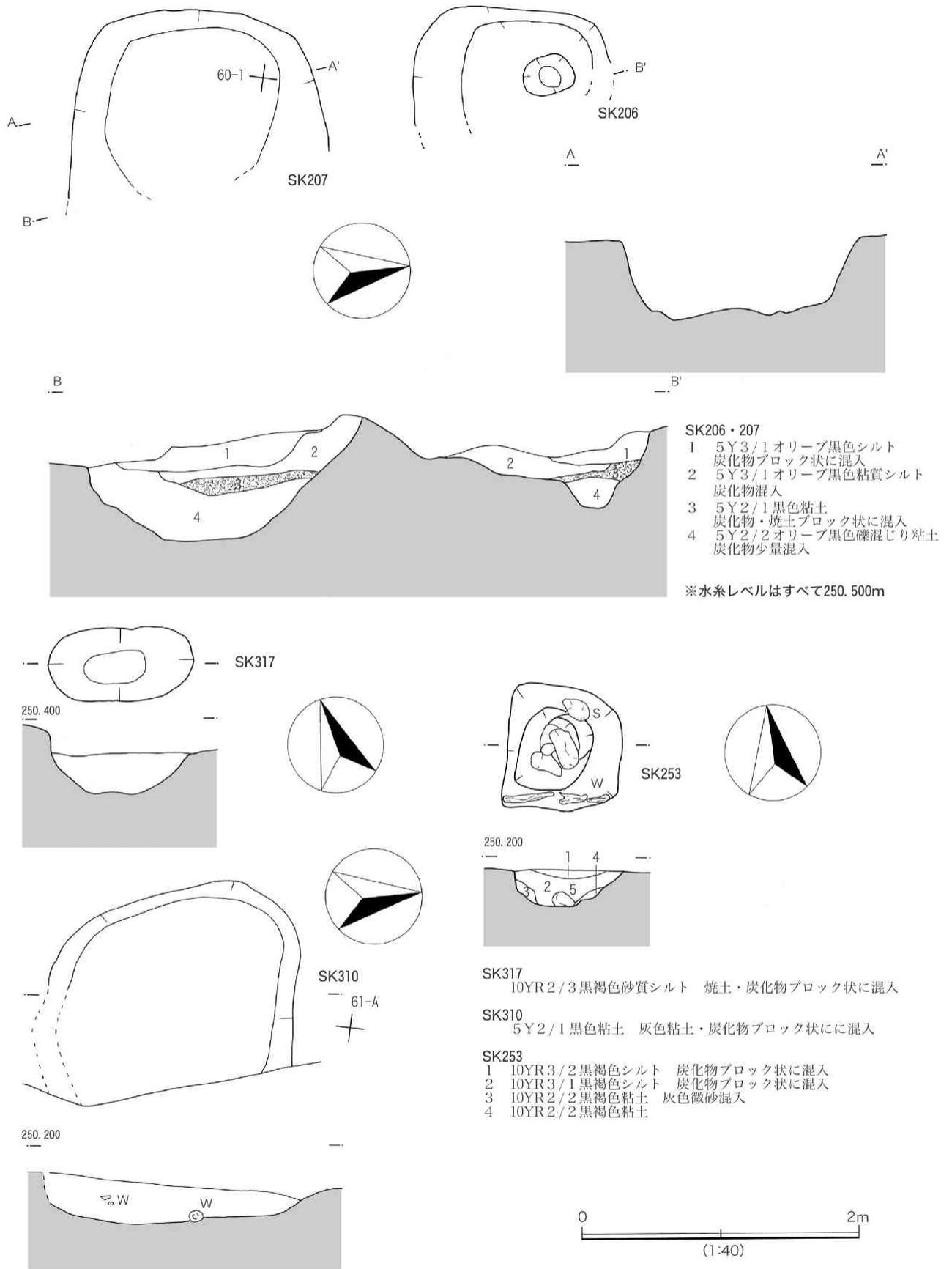
墨書かわらけ

緑色漆

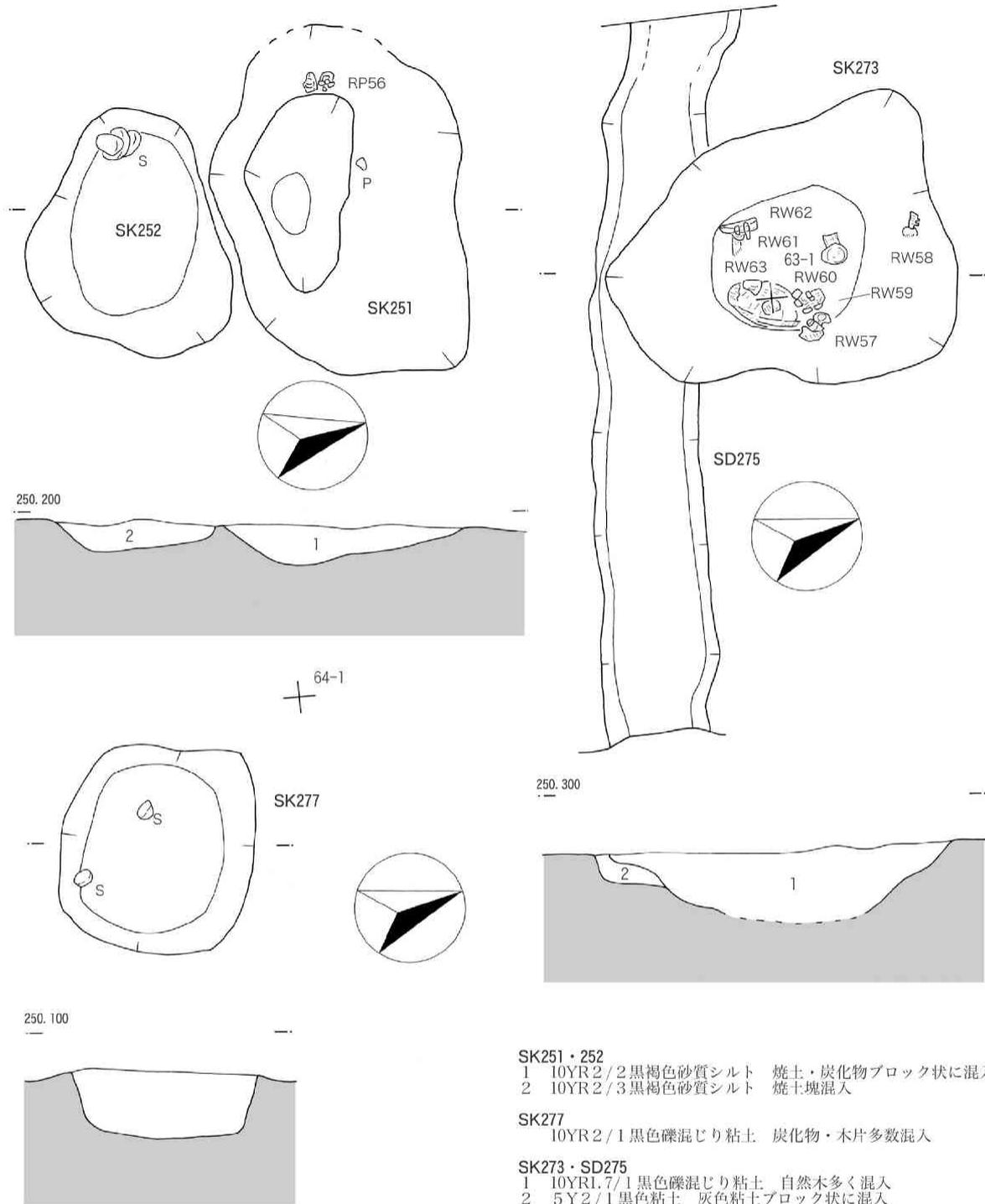
S K 277 (第26・30・31図)

E区64-1Gに位置し、平面形は隅丸長方形である。長径1.3m、径1.2mで、深さは確認面から43cmを測る。覆土は黒色礫混じり粘土の単層で、木片とガラス片が混じっていた。

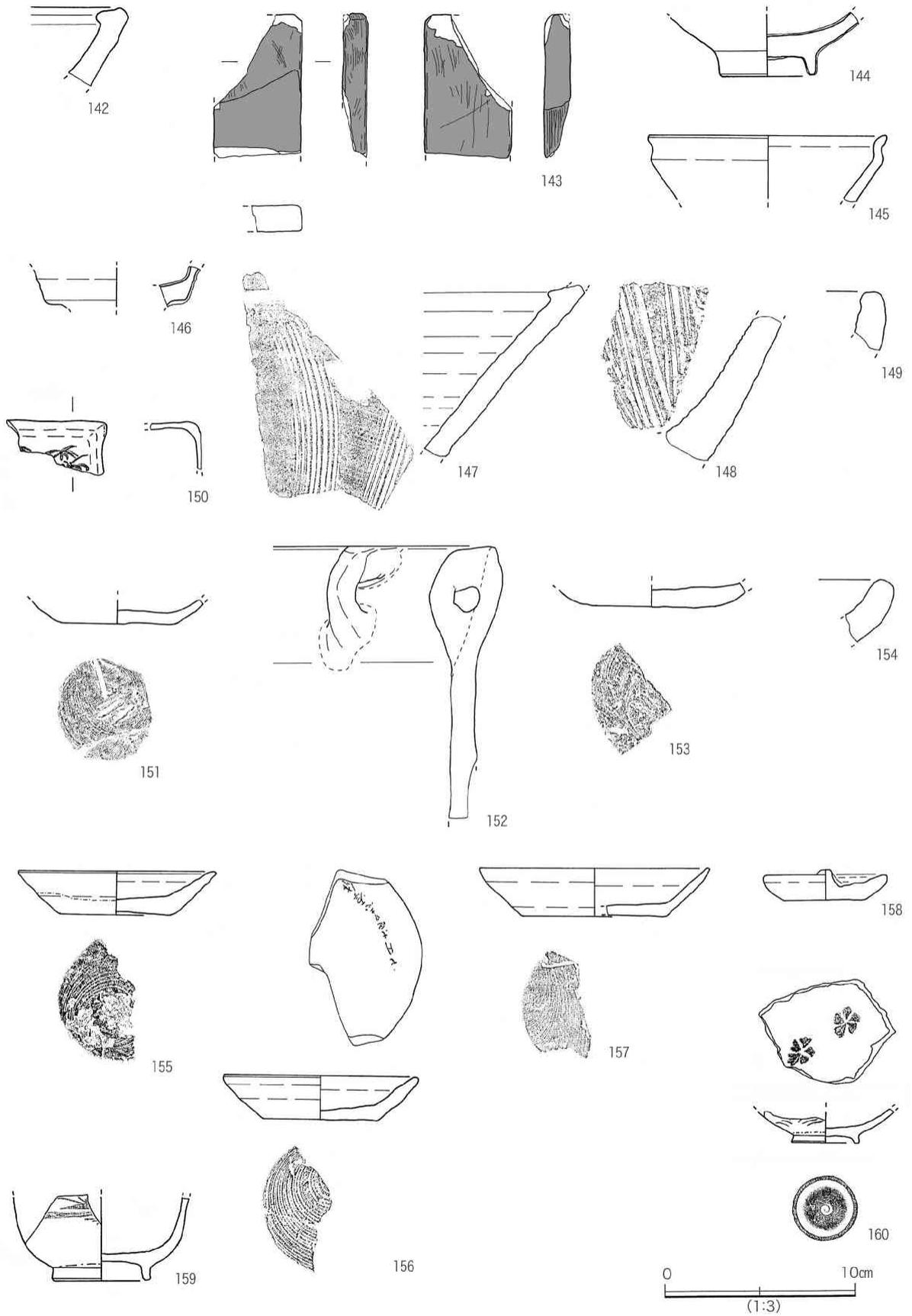
出土遺物は、土器1点、磁器23点、陶器5点、ガラス製品6点である。遺物から近代の廃棄



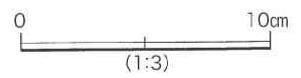
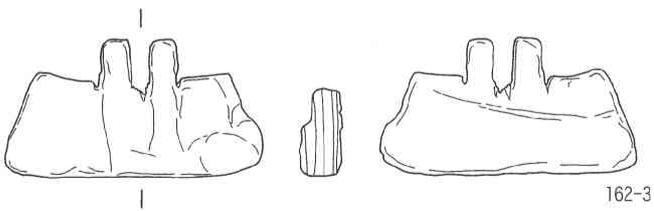
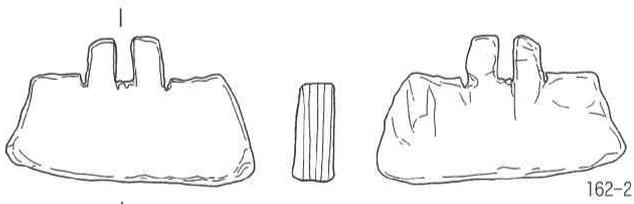
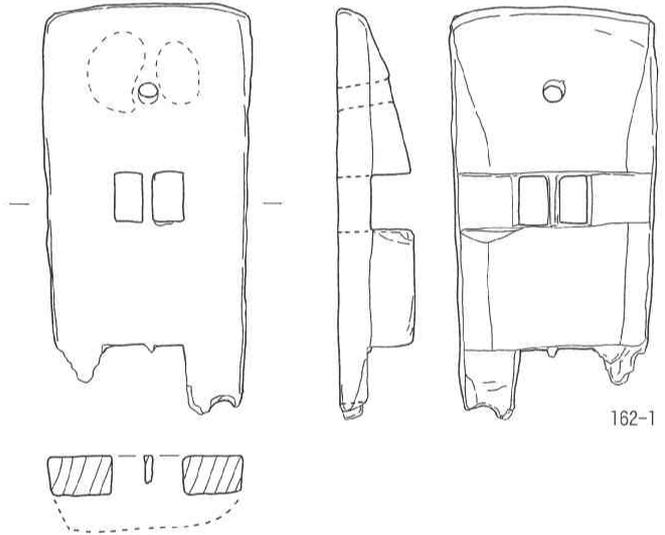
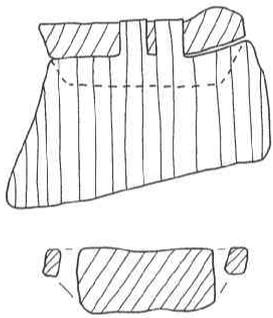
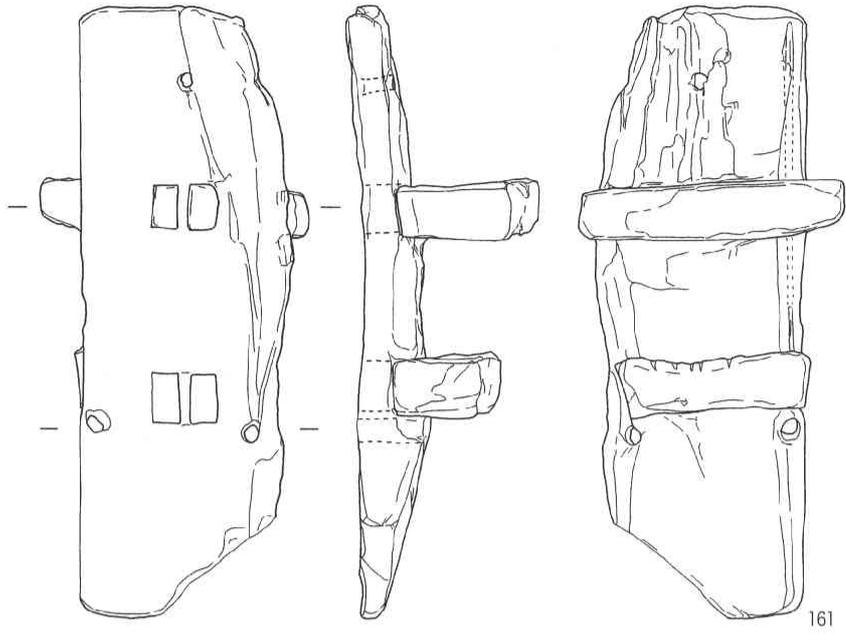
第25図 SK206・207・317・310・253



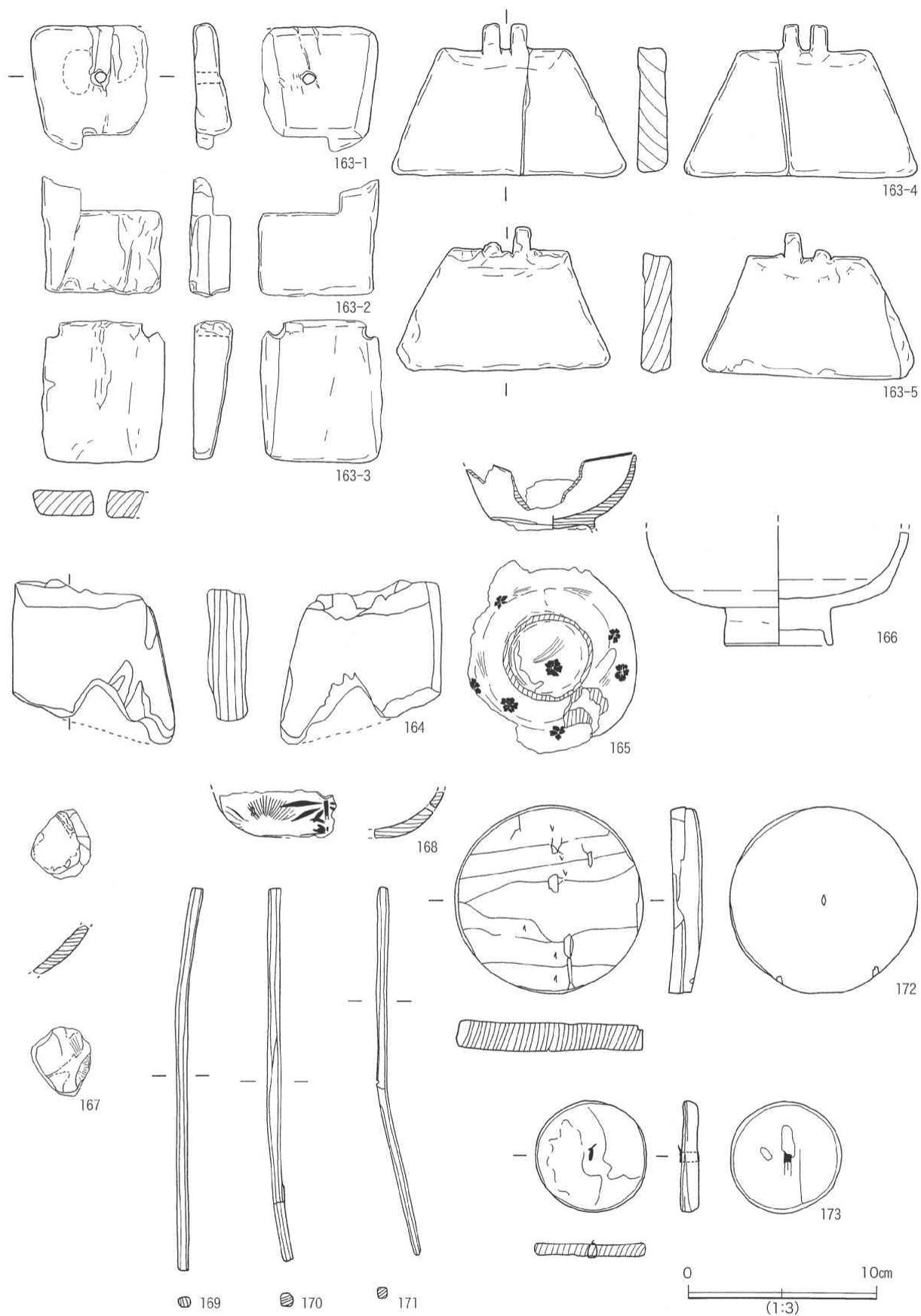
第26図 SK251・252・273・277



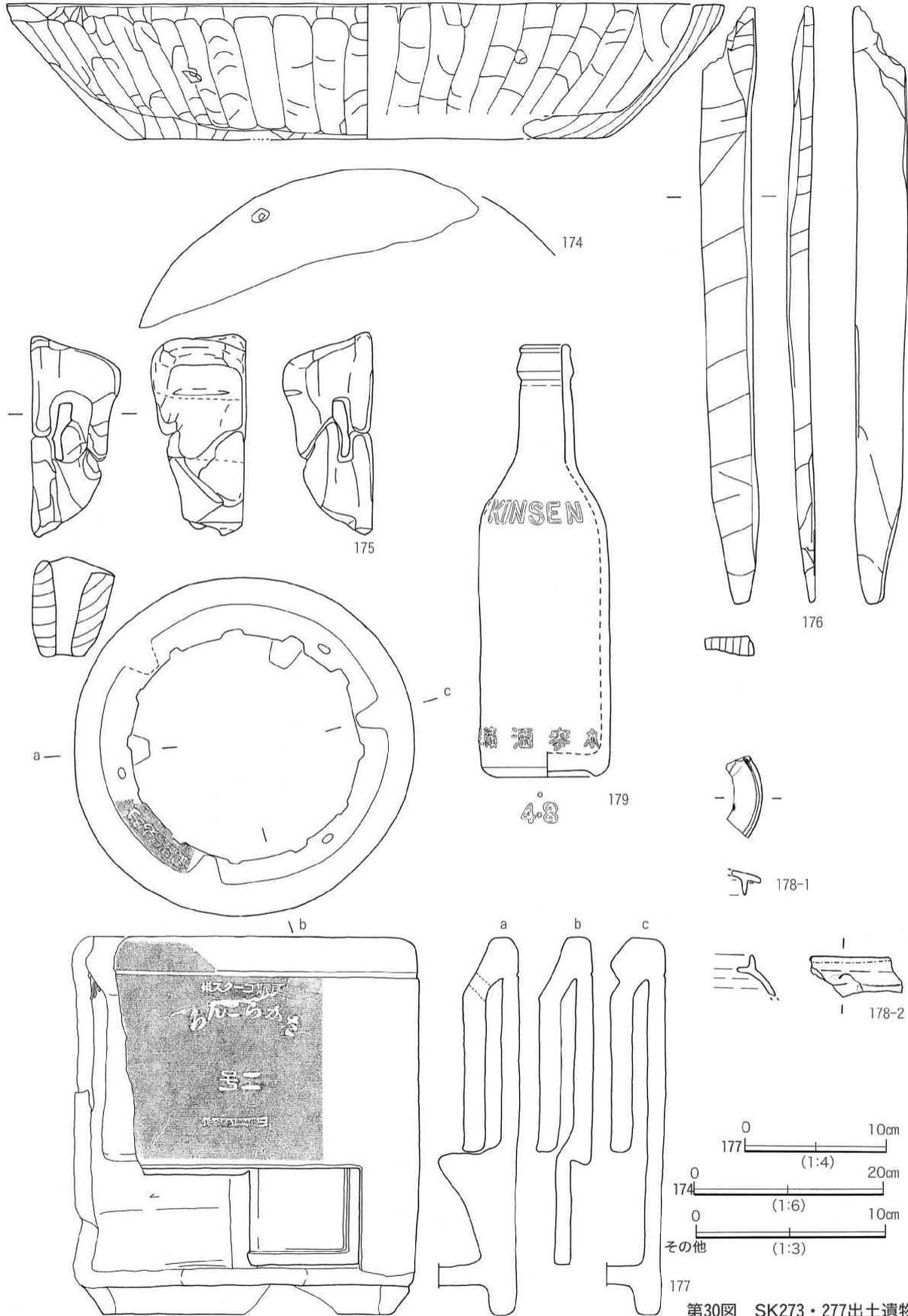
第27図 SK206・207・310・253・251・252・273出土遺物



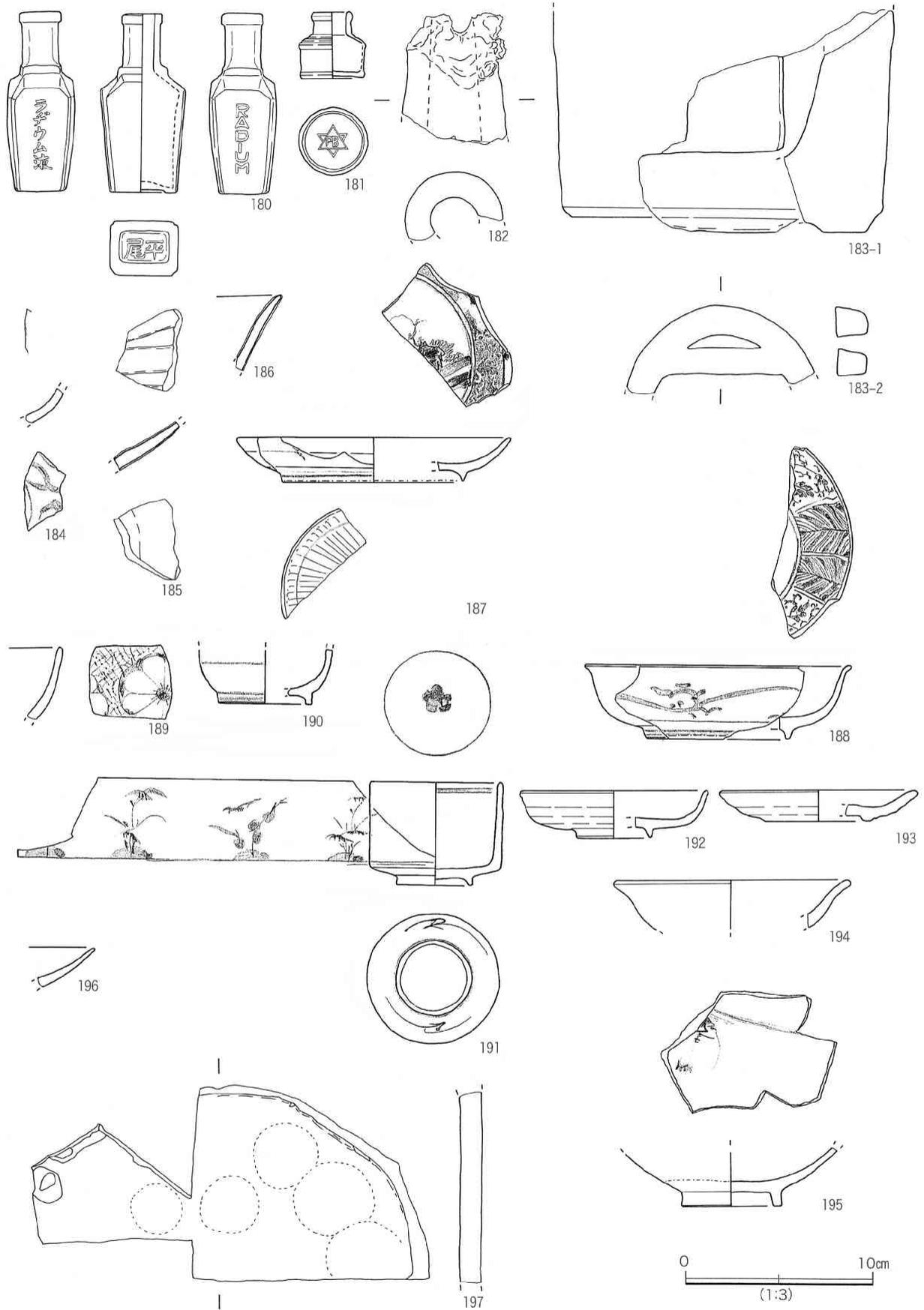
第28図 SK273出土遺物



第29図 SK273出土遺物



第30図 SK273・277出土遺物



第31図 SK277・その他の遺物

土坑と思われる。

4 その他の遺物

その他の遺物については図版31～33で掲載している。ここでは、特に遺構外出土の遺物について述べてみたい。

遺構外から多数の遺物が出土したが、後世の整地によって壊された遺構が多かった。遺構外からは土器17点、土製品1点、磁器160点、陶器127点、ガラス製品4点、その他金属製品（古銭）、樹脂製品（歯ブラシなど）、磁器製品（水笛など）が出土している。

土製品では、1次調査同様鞆羽口（182）が出土している。先端部に溶解した鉄が付着している。土器としては「かわらけ」、内耳土鍋、瓦質土器鉢の小片などがある。

中国製品では青花碗破片（184）がある。漳州産と考えられ、16世紀の所産である。

磁器は肥前産のみで構成され17世紀後半代のものが多い。次いで18世紀代、さらに19世紀になると少なくなる傾向がある。187は肥前磁器の皿で、見込の山水を丸く囲み、周囲を花唐草の文様を墨ハジキの技法で描いている。これは遺物量の多い17世紀後半代のものである。19世紀に特に顕著であるが、磁器では会津本郷産、肥前系のものが多い。遺構内ではそれに瀬戸産が加わる。肥前系については、会津蚕養窯との関連性も考えられる⁷⁾。肥前系では191のような筒形碗や会津本郷産では192のような底部の小さい無文の皿が出土している。

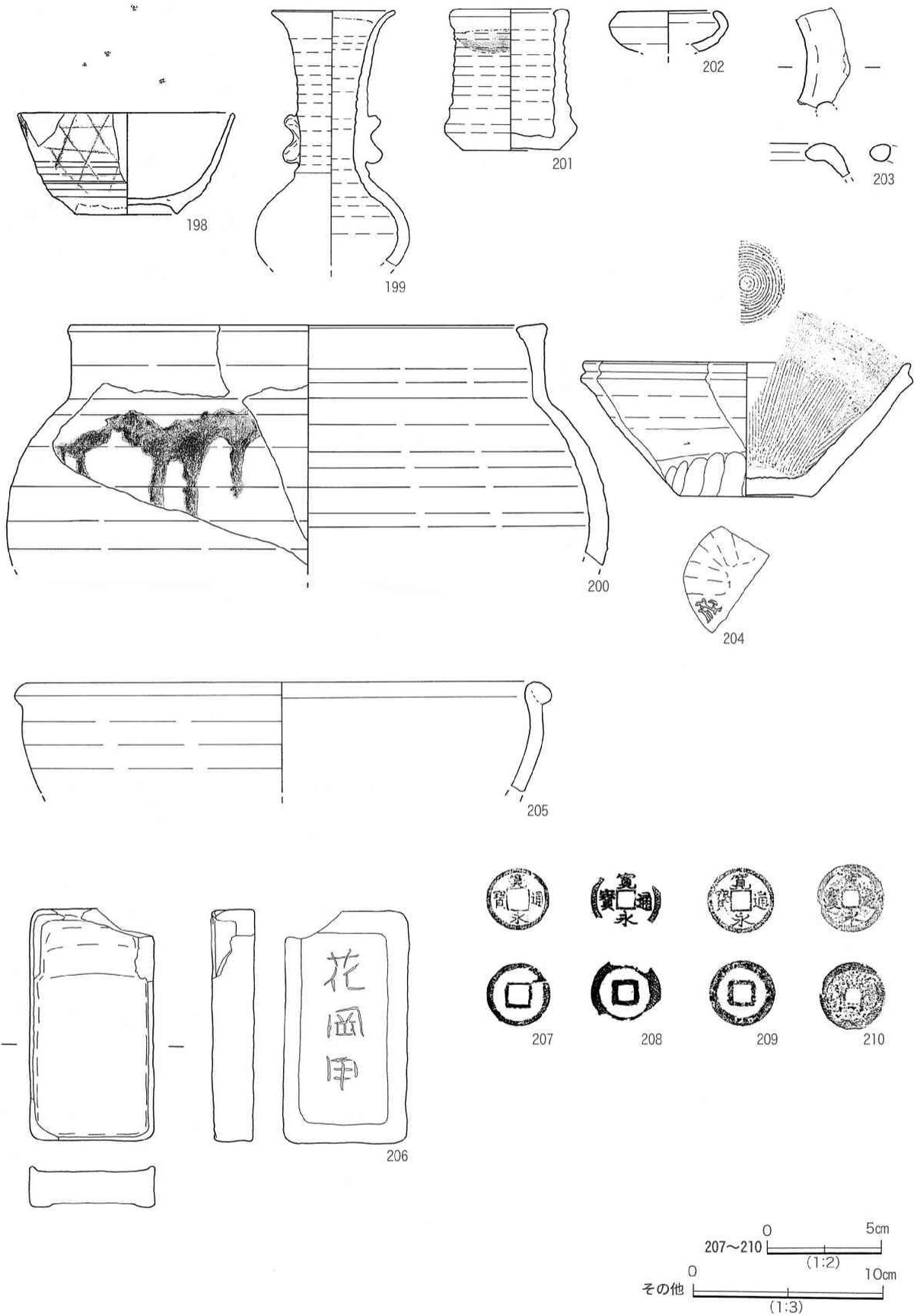
陶器では、16世紀代の瀬戸・美濃産のものが出土している。大窯期以降のものであり、その中でも丸皿（193）のような法量の小さいものが確認された。17世紀後半代に入り、肥前陶器の呉器手、京焼き写し（195）などの碗類がみられる。また、備前の植木鉢（197）が出土しており、岸窯産の製品（113）より丁寧な作りである。19世紀に入り、遺構外出土の例でも磁器同様に陶器で瀬戸からの搬入品が出上する。198は復古織部の碗で、外面に灰釉を施した後に鉄絵で格子目を描き、鉄釉を流し掛けている。また、遺構の出土状況と同様会津本郷産や大堀相馬産の陶器がこの時期に多く目に付く。

註

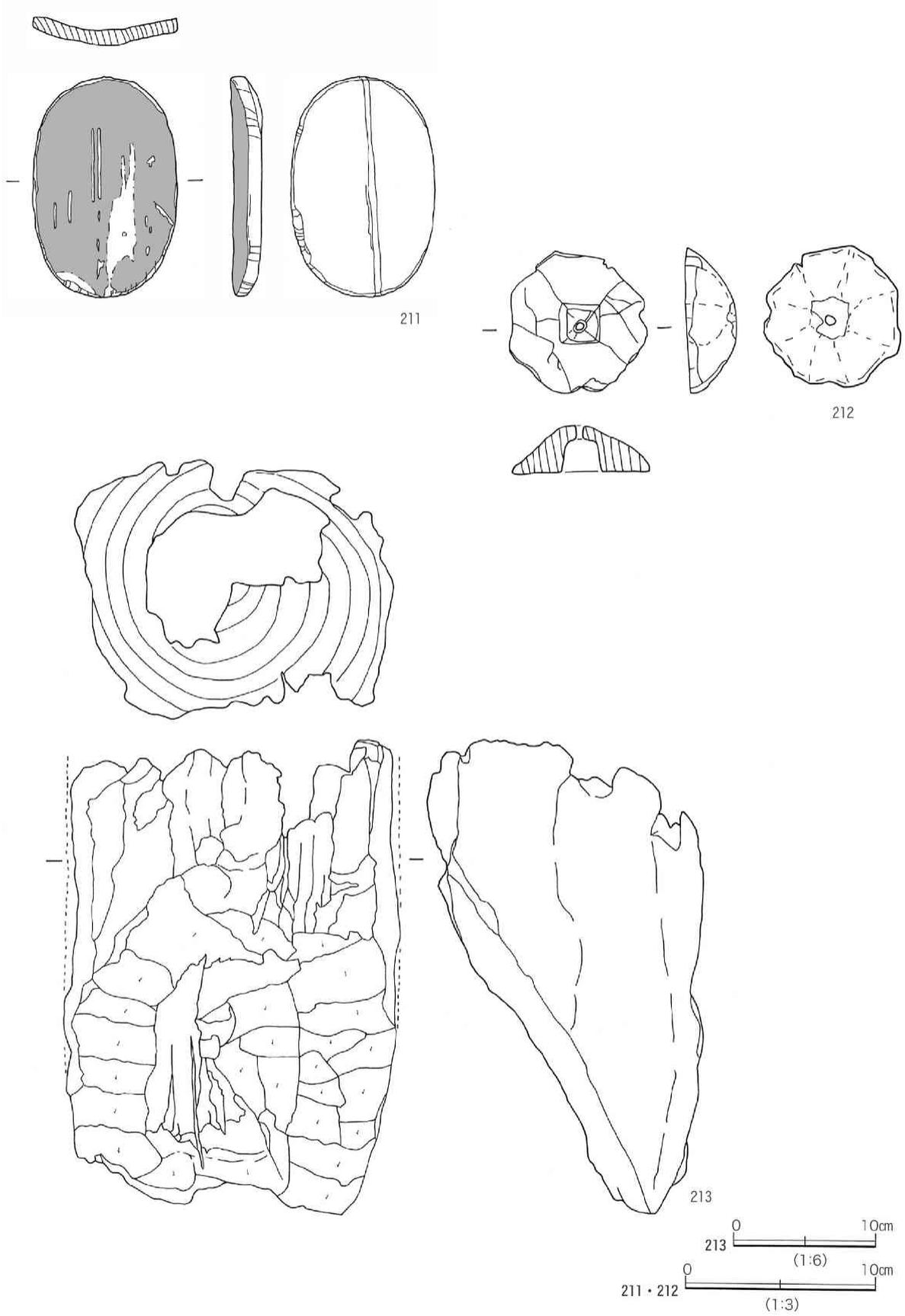
- 1) 関根達人氏のご教示による。
- 2) 青木昭博氏のご教示による。詳細については「V 考察」で述べる。
- 3) 前の土地所有者であった荏戸氏に訊いたところ、以前同じ場所に池があったとのこと。
- 4) 戦闘機を献納するため献金を募り、昭和16年に献納している（『続米沢市史』）。「献納記念」ではないかとの指摘がある。
- 5) 「池には西側の用水路から水が送られていた。この用水路の南側に蔵が建っていた。蔵は大正8年の大火で焼けたようである。」（荏戸氏）。被熱した近代陶磁器が出土する土坑は、この当時廃棄されたものと思われる。
- 6) 青木昭博氏のご教示による。詳細については「V 考察」で述べる。
- 7) 関根達人氏のご教示による。蚕養窯については本郷産のものとの区別が困難で、民窯期以前のもものは特に難しい。

引用文献

- 高桑登他 1999 『米沢城跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第66集）山形県埋蔵文化財センター
堀江格 2003 『岸窯跡』『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書店
月山隆弘他 1994 『米沢城発掘調査報告書』（米沢市埋蔵文化財調査報告書第44号）米沢市教育委員会



第32図 その他の遺物



第33図 その他の遺物

表1 土器・土製品・陶磁器観察表(1)

遺物 番号	出土 地点	種別	器種	計測値 (mm)				胎土色	生産地	備	考
				口径	底径	器高	器厚				
1	S D 85	土器	皿	(112)	(70)	28	5	灰白		かわらけ ロクロ 底部糸切 油煙付着 17C	
2	S D 85	磁器	皿	(120)			7	灰白	肥前	内面蛇ノ目軸割・二重斜格子文 18C	
3	S D 85	磁器	碗		42		6	灰白	肥前	外面雪輪草花文? 高台内「大明年製」 18C	
4	S D 85	磁器	碗		44		5	灰白	肥前	内面菊花・網目文 外面二重網目文 高台内渦「福」 18C	
5	S D 85	磁器	碗				4	灰白	肥前	外面山水文? 18C	
6	S D 85	磁器	瓶	18			2	灰白	肥前	仏花瓶 外面唐草・松竹 18C末	
7	S D 85	陶器	小坏		30		3	淡黄	大堀相馬	灰釉 貫入 高台露胎 19C	
8	S D 85	陶器	搦鉢				7	灰オリーブ	岸	片口 鉄釉 卸目8 17C後半~18C初	
10	S D 169	土器	内耳上鍋	(328)			13	浅黄		外面炭化物付着 R P 46 16C末	
11	S D 169	土器	搦鉢				13	灰		瓦質 酸化鉄付着 R P 54 16C	
12	S D 169	陶器	皿				5	淡黄	瀬戸・美濃	輪花 型打 長石釉 貫入 志野 16C末	
13	S D 169	陶器	盤				9	灰白	瀬戸・美濃	長石釉 志野 17C	
14	S D 169	土製品	埴塼	78	25	35	10	灰白		溶鉄付着	
16	S D 171	土器	皿	(116)			8.5	灰		かわらけ ロクロ 油煙付着 17C	
17	S D 171	土器	皿	(110)	(60)	20	3	浅黄		かわらけ ロクロ・ケズリ 17・18C	
18	S D 171	磁器	小坏				2	灰白	中国	青花 文様不明 17C	
19	S D 171	磁器	皿				3	灰白	肥前	変形皿 青磁 漆継ぎ 17C後	
20	S D 171	磁器	香炉				7.5	灰	肥前	青磁 獣足 内面露胎 17C後	
21	S D 171	磁器	鉢	(240)	74	106	6.5	淡黄	肥前長山田	青磁 輪花 型打 内面片切彫草文 見込蛇ノ目 目跡 畳付露胎 17C後	
22	S D 171	磁器	鉢				5	灰白	肥前	うかい茶碗 白磁 口縁部口紅 17C後	
23	S D 171	磁器	碗		(46)		4.5	灰白	肥前	色絵 赤・青(青部分剥離) 17C後	
24	S D 171	磁器	皿	(141)	(56)	32	4	灰白	肥前	内面獅子 蛇ノ目高台 畳付露胎 17C後	
25	S D 171	磁器	碗	(110)	(42)	59	3	灰白	肥前	文様不明 畳付露胎 18C	
26	S D 171	磁器	碗	(110)			3	灰白	肥前	外面桐・松・梅 17C後	
27	S D 171	磁器	碗	(102)			3	灰白	肥前	外面竹・梅 17C後	
28	S D 171	磁器	小坏		24		4	灰白	肥前	外面網目文? 砂底 18C	
29	S D 171	磁器	碗		(47)		3	灰白	肥前	外面こんにゃく印判 17C末~18C初	
30	S D 171	磁器	碗				5	灰白	肥前	外面網目文・不明 17C後	
31	S D 171	陶器	鉢	(220)			5	浅黄	肥前	二彩手(灰・鉄釉) 唐津 17C後	
32	S D 171	陶器	碗	(118)			5	淡黄	肥前	呉器手 灰釉 17C後	
33	S D 171	陶器	碗	(122)			4	灰白	肥前	呉器手 瑠璃釉 17C後	
34	S D 171	陶器	香炉				5	浅黄	肥前	京焼き写し 灰釉 高台内「清水」陰刻 高台露胎 17C後	
35	S D 171	陶器	瓶				5	灰白	肥前	灰釉 17C	
36	S D 171	陶器	碗				5	淡黄	瀬戸・美濃	天目 鉄釉 17C?	
37	S D 171	陶器	碗	99	47	65	5	灰白	岸	鉄釉 高台露胎 17C後	
38	S D 171	陶器	碗		44		5	灰白	岸	鉄釉 高台露胎 17C後	
39	S D 171	陶器	瓶				5	灰白	岸	鉄釉 被熱 17C後	
40	S D 171	陶器	香炉	(116)	(95)	60	6	灰白	岸	鉄釉 足・底露胎 灰吹として使用 17C後	
41	S D 171	陶器	水注				9	灰白	岸	鉄釉 底部静止糸切 17C後	
42	S D 171	陶器	甕				12	浅黄	岸	鉄釉 底部回転糸切 17C後	
43	S D 171	陶器	搦鉢				8	淡黄	岸	鉄釉 17C後~18C初	
44	S D 171	陶器	搦鉢				7	灰白	岸	鉄釉 卸目6 17C後	
45	S D 171	陶器	搦鉢				7	灰	岸	鉄釉 卸目9 17C後	
46	S D 171	陶器	搦鉢		119		8	淡黄	会津本郷	鉄釉 卸目15 18C後	
47	S D 171	陶器	甕				6	灰白	不明	灰釉 被熱	
56	S K 90	磁器	碗		52		3	灰白	中国	青花 見込草花 外面鉢・草 高台内「永□長春」 砂底 R P 50 16C	
57	S K 90	磁器	瓶		57		3	明緑灰	肥前系	白磁 畳付露胎 19C	

表2 土器・土製品・陶磁器観察表(2)

遺物 番号	出土 地点	種別	器種	計測値 (mm)				胎土色	生産地	備	考
				口径	底径	器高	器厚				
58	S K 90	磁器	香炉				5	灰白	会津本郷	淡緑色釉 一部白濁	
67	S K 123	磁器	皿	(110)	(72)	24	3	灰白	肥前	輪花 型打 内外面水梨文 畳付露胎 19C	
68	S K 325	磁器	皿	(84)	(49)	22	3	灰白	肥前	輪花 型打 内面こんにやく印判(桐) 外面変形唐草 畳付露胎 18C	
69	S K 325	磁器	皿	(98)	(50)	24	4	灰白	肥前	見込五弁花 内面草花 外面変形唐草 高台内不明 畳付露胎 18C	
70	S K 325	磁器	皿		(80)		5	灰白	肥前	内面山水文 外面不明 高台内渦「福」砂底 18C	
71	S K 325	磁器	皿				4	灰白	会津本郷	碎石釉 一部白濁 19C前	
72	S K 325	陶器	碗		(32)		3	灰白	大堀相馬	腰折 灰釉 貫入 被熱 高台露胎 18C	
73	S K 325	陶器	鉢	(144)	(58)	68	6	灰白	大堀相馬	片口? 灰釉 白濁 高台露胎 19C	
74	S K 325	陶器	香炉				6	灰白	会津本郷	鉄釉 口縁部釉剥ぎ 内面沈線3 19C	
75	S K 325	陶器	播鉢				8	オリーブ黄	会津本郷	鉄釉 卸目有 胎黒砂混 19C	
76	S K 325	陶製品	焼台	53	63	17		オリーブ黄		上下面糸切 側面指頭痕 黒砂多混入	
77	S K 325	土製品	土人形	長(120)	幅(50)		5	浅黄		武士 型合わせ 黒漆? 指頭痕 被熱	
82	S K 159	磁器	碗	(96)	(40)	53	4	灰白	肥前系	外面竹 畳付露胎 19C	
83	S K 159	磁器	碗				4	灰白	肥前系	筒形 外面宝尽くし文・草 19C	
84	S K 159	磁器	瓶		34		2.5	灰白	肥前系	仏花瓶 外面松竹梅 高台露胎 被熱 近代	
85	S K 159	磁器	段重	(136)	(120)	46	9	灰白	平清水	内面松竹梅 外面牡丹 段部紅 高台露胎 19C	
86	S K 159	陶器	香炉				7	淡黄		灰釉 口縁部釉剥ぎ	
87	S K 160	土器	皿	(154)	(100)	24	6	浅黄		かわらけ ロクロ 油煙付着 17C	
88	S K 160	磁器	皿				6	灰白	肥前	白磁 内面草木 外面唐草 19C	
89	S K 160	磁器	皿				5.5	灰白	肥前	内面草 貫入 17C後	
90	S K 160	磁器	碗				3	灰白	肥前	被熱 外面「寿」 17C	
91	S K 160	磁器	碗		(38)		6	灰白	肥前	外面網目文 砂底 17C後	
92	S K 160	磁器	小坏	61	24	44	3	灰白	平清水	端反 外面草花 近代	
93	S K 160	陶器	碗		38		4	淡黄	大堀相馬	灰釉 高台露胎 炭化物付着 18C後	
94	S K 159	陶器	碗		(36)		4	灰白	大堀相馬	灰釉 高台露胎 19C	
95	S K 160	陶器	鉢		75		6	淡黄	会津本郷	鉄釉 高台内墨書 18C後~19C初	
96	S K 170	磁器	香炉	(132)			6	灰白	肥前	青磁 被熱 内面(口縁部を除く)無釉 18C	
97	S K 170	磁器	皿		(84)		3	灰白	肥前	見込草木 砂底 17C後	
98	S K 170	磁器	碗				5	灰白	肥前	外面網目文 漆継ぎ 17C後	
99	S K 170	磁器	碗		(38)		5	灰白	肥前	内面菊花・網目文 外面二重網目文 高台内渦「福」 被熱 砂底 18C	
100	S K 170	磁器	碗		40		4	灰白	肥前	外面蕪 高台内「大明年製」 畳付露胎 18C	
101	S K 170	磁器	碗		(36)		3	灰白	肥前	見込五弁花 外面菜果 高台内「富貴長春」? 18C	
102	S K 170	磁器	碗	(76)			3	灰白	肥前系	腰張 外面宝船・松 被熱 19C	
103	S K 170	磁器	碗	(74)	(40)	37	3.5	灰白	肥前	外面蝶 畳付露胎 19C	
104	S K 170	磁器	皿	47	14	15.5	2.4	灰白	肥前系	紅皿 型打 19C	
105	S K 170	磁器	碗	108	50	59	3	灰白	肥前系	見込水鳥・水草 内面四方襷 外面草花・蝙蝠 被熱 畳付露胎 19C	
106	S K 170	磁器	鉢				3.8	灰白	肥前系	内面人物・竜?、「立口」 外面雷文 蓮弁文 体部途中外反 19C	
107	S K 170	磁器	鉢	(200)	84	72	4	灰白	肥前系	輪花 型打 芙蓉手 見込牡丹 内面菊花・格子 外面唐草 蛇ノ目高台 高台内「益」 被熱 19C	
108	S K 170	磁器	鉢	180	68	60	4.5	灰白	肥前系	端反 見込牡丹 内面草花 外面唐草 蛇ノ目高台 被熱 19C	

表3 土器・土製品・陶磁器観察表(3)

遺物 番号	出土 地点	種別	器種	計測値 (mm)				胎土色	生産地	備	考
				口径	底径	器高	器厚				
109	S K170	磁器	瓶	11	19	79	3	灰白	肥前系	仏花瓶 外面松・梅 底部露胎 被熱	19C
110	S K170	磁器	瓶	13			6	灰白	肥前系	御神酒徳利 外面梅? 被熱	19C
111	S K170	磁器	碗	(116)			3.5	灰白	瀬戸	端反 見込松 外面雨竜?	19C
112	S K170	磁器	瓶		56		7	灰白	平清水	外面草木 底部露胎 近代	
113	S K170	陶器	植木鉢				13	灰	岸	指ナデ 鉄釉 17C後	
114	S K170	陶器	碗		38		6.5	灰白	大堀相馬	灰釉 貫入 高台露胎	18C
115	S K170	陶器	土瓶蓋	52			4	灰白	大堀相馬	上部灰釉 貫入 摘欠損	19C
116	S K170	陶器	植木鉢			62	9	淡黄	不明	灰釉 貫入 底部露胎 穿孔有	近代
117	S K170	陶器	羽釜				6	浅黄	不明	鉄釉 下部露胎ケズリ 白砂混	
118	S K321	土器	皿		(50)		6	浅黄		かわらけ 底部回転系切 内面金箔	16C末~17C初
119	S K321	土器	火鉢蓋	(220)		61	12	浅黄		白砂混 内面被熱	
120	S K321	土器	行火				25	淡黄		指頭痕 白砂混 内面被熱	
121	S K321	土器	火鉢	(396)	(350)	(373)	12	浅黄		指頭痕 内外指ナデ 雲母混	
122	S K321	磁器	小坏	(64)	(30)	31	2	灰白	瀬戸	端反 見込独楽・不明 被熱	19C
123	S K321	磁器	小坏	56	18	28	3	灰		外形が軍用帽 金で「・記念」・飛行機? 底部に飛行機 底部露胎	
124	S K321	磁器	仏飯器	66	48	58	3	灰白	肥前系	外面七宝繫 底部露胎	19C
125	S K321	陶器	皿	(280)	(161)	78	10	灰白	会津本郷	灰釉 貫入 鉄釉流掛 ケズリ 目跡	19C
126	S K322	磁器	壺	24			4.8	灰白	肥前	油壺 外面梅	18C
127	S K322	磁器	碗	(72)	33	60	2.5	灰白	肥前系	筒形 外面宝尽くし文・松 壘付露胎	19C
128	S K322	磁器	蓋	(90)	(30)	23.5	3.5	灰白	瀬戸	内面雷文・「寿」? 外面縦縞 摘内不明	19C
129	S K322	陶器	瓶	(68)			5	灰	成島	鉄釉 被熱 白砂混	19C
130	S K322	陶器	鉢	(152)	110	153	8	灰	成島	切立 目跡 鉄釉・ナマコ釉 被熱	19C
131	S K322	陶器	甕	(192)	(180)	259	22	灰	成島	切立 鉄釉・ナマコ釉 被熱	19C
133	S K183	土器	鉢	(364)	(246)	96	10	灰		瓦質 内面ヘラナデ 外面ミガキ 口縁部穿孔有 石英混	16C
134	S K183	土製品	埴塙	(70)			8	灰白		溶鉄附着	
142	S K206	陶器	播鉢				11	灰白	岸	鉄釉 17C後~18C	
144	S K207	磁器	碗		49		9	灰白	中国	青磁 被熱	16C
145	S K207	陶器	碗	(122)			6	灰	瀬戸・美濃	天目 鉄釉 16C中・後	
146	S K207	陶器					8	灰白	瀬戸・美濃?	灰釉 貫入	
147	S K207	陶器	播鉢				12	灰白	瀬戸・美濃	鉄釉 卸目9 被熱	16C
148	S K310	土器	播鉢				17	灰		瓦質 指ナデ 卸目 石英混	16C
149	S K310	土製品	埴塙				15	灰白		石英混	
150	S K253	磁器	水滴				3	灰白	肥前系	外面竹 一部露胎	19C
151	S K251	土器	皿		60		4	淡黄		かわらけ ロクロ 底部回転系切	17C
152	S K251	土器	内耳土鍋				15	灰白		指ナデ 外面炭化物	17C
153	S K252	土器	皿		66		9	灰白		かわらけ ロクロ 底部回転系切	17C
154	S K252	土製品	埴塙				15	灰		溶鉄附着	
155	S K273	土器	皿	(102)	(58)	22	7	浅黄		かわらけ ロクロ 底部回転系切 油煙附着	17C
156	S K273	土器	皿	(102)	(59)	23	5	淡黄		かわらけ ロクロ 底部回転系切 内面墨書「七月廿四日 志源□□」	17C
157	S K273	土器	皿	(120)	(76)	25	4	淡黄		かわらけ ロクロ 底部回転系切	17C
158	S K273	土器	ひょう燭	(64)	(40)	16	7	浅黄		ロクロ 灯芯部残存	
159	S K273	陶器	碗		50		4	淡黄	肥前	京焼書き 灰釉 貫入 外面山水 高台露胎	17C後
160	S K273	陶器	碗		35		4	灰白	京焼	色絵 灰釉 貫入 内面桜(青)・外面草(灰) 高台内「寶山」陰刻 高台露胎	18C

表4 土器・土製品・陶磁器観察表(4)

遺物 番号	出土 地点	種別	器種	計測値 (mm)				胎土色	生産地	備	考
				口径	底径	器高	器厚				
177	S K277	土器	焜炉	240	(240)	266	12	浅黄		口縁部内「特許局登録 コークス完全燃焼筒・」 体部外面「瓦斯コークス用 たか らこんろ 二号 三河黎陶工場製」 ラナデ 白砂・雲母混	
178 -1	S K277	陶器	土瓶蓋				3	灰白	大堀相馬灰釉	文様不明 19C中	
178 -2	S K277	陶器	土瓶身				3	灰白	大堀相馬	灰釉 外面山水? 19C中	
182	58-3	土製品	籬羽口	長(70)	幅53		14	浅黄		溶鉄付着 白砂・雲母付着	
183 -1	S K254	土製品	七厘		(160)		50	灰白		珪藻土 窓1 攪乱出土	
183 -2	S K254	土製品	七厘部品				16	灰白		円形仕切	
184	55-3	磁器	碗				4	灰白	中国漳州	青花 外面草花 16C	
185	53-3	磁器	皿				7	灰白	肥前	青磁 内面ケズリ 18C後~19C前	
186	55-3	磁器	鉢				5	灰白	肥前	青磁 18C後	
187	54-2	磁器	皿	(143)	(96)	23	4	灰白	肥前	見込山水 内面墨吹き(花唐草) 外面唐 草 高台内匏削 畳付露胎 17C後	
188	55-3	磁器	皿	(140)	(72)	39	5	灰白	肥前	端反 内面矢羽・花唐草 外面唐草 畳付 露胎 18C	
189	53-3	磁器	碗				4	灰白	肥前	外面菊花・氷裂文 18C後	
190	55-3	磁器	瓶		(48)		4	灰白	肥前	砂底 内面露胎 18C	
191	55-3	磁器	碗	71	38	55	3	灰白	肥前系	見込こんやく印判(五弁花) 外面千鳥・ 草花 高台脇変形唐草 畳付露胎 19C前	
192	61-3	磁器	皿	(100)	(40)	25	5	灰白	会津本郷	碎石釉 一部白濁 高台内露胎 19C	
193	55-3	陶器	皿	(104)	(54)	16	6	淡黄	瀬戸・美濃	灰釉 貫入 輪ドチ痕 16C中・後	
194	S P69	陶器	皿	(124)			5	灰白	瀬戸・美濃	長石釉 志野 一部被熱 16C末	
195	X0	陶器	碗		52		5	灰白	肥前	京焼き写し 灰釉 貫入 内面山水 高台 内「森」陰刻 高台露胎 17C後	
196	55-3	陶器	皿				4	浅黄	肥前	銅緑釉 17C後	
197	55-3	陶器	植木鉢				12	灰	肥前	鉄釉 使用痕 17C後	
198	56・57 -2	陶器	碗	(114)	51	52	4	灰白	瀬戸・美濃	復古織部 灰釉・鉄釉 目跡 外面格子目 高台露胎 19C	
199	S P327	陶器	瓶	(64)			5	灰白	会津本郷	透明釉 一部白濁 19C	
200	63-2	陶器	甕	(244)			10	灰	会津本郷	錆釉・鉄釉流掛 口縁部露胎 19C	
201	55-3	陶器	灰吹	64	50	74	5	灰白	大堀相馬	鉄釉(茶)→鉄釉(黒)→灰釉 被熱 底部 露胎 19C	
202	55-2	陶器	ひょう燭	(52)			4	淡黄	大堀相馬	鉄釉 19C	
203	55-3	陶器	手焙				8	浅黄	大堀相馬	灰釉→鉄釉流掛 口縁部直下穿孔有 19C	
204	55-3	陶器	播鉢	(168)	(70)	70	10	灰白	成島?	ロクロ・ケズリ 卸目14 底部「成」陰刻 鉄釉 近代	
205	55-3	陶器	甕	(266)			7	灰	成島	口縁部折り返し ナマコ釉 近代	

表5 ガラス製品観察表

遺物 番号	出土 地点	種別	器種	計測値 (mm)				備	考
				口径	底径	器高	器厚		
179	S K277	ガラス	瓶	25	52	228	5	体部「K I N S E N」・「日本麥酒麒麟株式会社」 底部「4・8」	
180	S K277	ガラス	瓶	22	36	96.5	3・5	体部「R A D I U M」・「ラジウム液」 底部「平尾」	
181	S K277	ガラス	瓶	20	33	35	2	底部☆にPB	

表6 木製品観察表

遺物 番号	出土 地点	種別	部位	計測値 (mm)				備 考
				長さ・口径	幅・底径	器高	器厚	
51	S D171	箸		182	6		6	断面丸 ケズリ
52	S D171	楔		129	35		15	使用痕
53	S X72	差歯下駄	台	(143)	95		26	指頭痕 雲形の線刻 上面赤・側面黒漆 RW67
54	S X72	連歯下駄	台・歯	(203)	102		45	指頭痕 砂粒 RW68
55	S X72	連歯下駄	台・歯	198	110		64	指頭痕 一部被熱 RW43
59-1	S K90	連歯下駄	台	(102)	84		12	
59-2	S K90	連歯下駄	台	(86)	(70)		10	
60-1	S K90	差歯下駄	台	(71)	83		23	RW48
60-2	S K90	差歯下駄	台	(112)	78		23	RW48
60-3	S K90	差歯下駄	台	(44)	70		17	RW48
60-4	S K90	差歯下駄	歯	79	101		12	砂粒 RW48
60-5	S K90	差歯下駄	歯	76	98		12	砂粒 RW48
61	S K90	差歯下駄	歯	70	(95)		11	台との接合部に木片付着
62	S K90	樽	栓	80	40		35	炭化物付着 使用痕
63-1	S K90	樽	側板	241			8	籬で4箇所固定 外面黒漆
63-2	S K90	樽	底板	(217)	(88)		8	使用痕
64	S K90	部材		(110)	81		12	穿孔有 RW49
65	S K90	部材		(75)	(52)		(36)	穿孔1箇所 ト車?
66	S K90	部材		(403)	12		15	接合凹2箇所
81	S K325	樽	底板	(113)	(57)		9	黒漆 ケズリ キズ多
135	S K183	差歯下駄	台	199	(80)		24	指頭痕 ケズリ RW65
136	S K183	連歯下駄	台・歯	(146)	(42)		27	穿孔有 一部被熱 RW64
137	S K183	箸		(226)	5		4	断面丸 ケズリ 先端欠損
138	S K183	箸		(218)	8		6	断面四角 ケズリ
139	S K183	箸		192	5		4	断面丸 ケズリ
140	S K183	未製品		105	35	57		木榑未製品? 工具痕
141	S K183	曲物	側板		(86)		(1)	土とともに採取 2個体? 穿孔有
161	S K273	差歯下駄	台・歯	243	105		70	台部裏に穿孔有 被熱 砂粒 RW61
162-1	S K273	差歯下駄	台	(163)	80		30	指頭痕 RW59
162-2	S K273	差歯下駄	歯	59	98		12	砂粒 RW59
162-3	S K273	差歯下駄	歯	55	101		17	砂粒 RW59
163-1	S K273	差歯下駄	台	(65)	(60)		19	指頭痕 RW59
163-2	S K273	差歯下駄	台	(61)	(63)		20	RW59
163-3	S K273	差歯下駄	台	(74)	63		20	RW59
163-4	S K273	差歯下駄	歯	80	123		16	RW59
163-5	S K273	差歯下駄	歯	76	(111)		15	RW59
164	S K273	差歯下駄	歯	(86)	84		19	下部欠損
165	S K273	漆器椀	身	(100)			7	内面赤・外面緑・底部黒漆 文様(桜ほか) 金箔
166	S K273	漆器椀	身		57		18	赤漆
167	S K273	漆器椀	身				6	内面赤・外面黒漆 文様(松?) 緑漆?
168	S K273	漆器皿					8	片口 内面赤・外面黒漆 文様松竹?・緑漆? 穿孔有 蓋?
169	S K273	箸		(201)	6		6	断面四角 ケズリ
170	S K273	箸		(197)	7		7	断面四角 ケズリ
171	S K273	箸		(195)	5		6	断面四角 ケズリ
172	S K273	柄杓?	底板		97		15	内側工具痕 RW62
173	S K273	円板状		59	58		7	中央部桜皮を通す
174	S K273	刮物鉢		(744)	(510)	143	15	側面と底面に穿孔有 ケズリ RW63
175	S K273	部材		(107)	46		48.5	長方形ほぞ穴1 ケズリ
176	S K273	板状	先端	(315)	27		11	ケズリ
211	53-1	筒形入物?	底板	114	74		8	黒漆 ケズリ RW44
212	53-1	部材		72	71		25	穿孔有 ト車? RW45
213	S P335	柱根	先端	(333)	234		192	内部腐蝕で空洞 先端部一方向の面取

表7 石製品観察表

遺物 番号	出土 地点	種別	計測値 (mm)			石色	備	考
			長さ・直径	幅	厚さ			
9	S D85	碁石	20		6	黒	流紋岩?	
15	S D169	ト車	38		10	灰白	凝灰岩 中央に1mm穿孔有	
48	S D171中	硯	(51)	59	18	黒	粘板岩 被熱 硯縁部剥離	
49	S D171中	硯	(63)	54	13	黒	粘板岩 裏面刻書「五日 駒方茂衛門」	
50	S D171底	凹石	117	89	58	灰	軽石 中央部に凹	
78	S K325	砥石	145	36	39	オリーブ黄	砂岩 (メノウ含む) 1面使用? (側面にもキズ有)	
79	S K325	凹石	178	105	70	灰	軽石 中央部に凹	
132	S K322	砥石	(60)	38	14	灰	泥岩 5面使用 欠損有	
143	S K206	砥石	(75)	45	13	灰白	泥岩 被熱 5面使用 欠損有	
206	53-3	硯	122	64	21	灰	砂岩? 被熱 裏面「花岡甲」線刻	

表8 金属製品観察表

遺物 番号	出土 地点	種別	計測値 (mm)			備	考
			長さ・直径	幅・穿径	厚さ		
80	S K325	かんざし	(137)	10	3	銀製? 一部欠損 中位から折れている	
207	55-3	古銭	22	7	1	寛永通宝 (新寛永)	
208	55-3	古銭	24.5	5.5	1.1	寛永通宝 (古寛永) 一部欠損	
209	X○	古銭	23	6	1.5	寛永通宝 (新寛永) 錆付着	
210	S P185	古銭	24	5	1.4	寛永通宝 (古寛永)	

表9 土器集計表

産地等	器種	総計
土師質	皿 (かわらけ)	28
	内耳土鍋	5
	行火	2
	焜炉	2
	火鉢	2
	七厘	1
	ひょう燭	1
	不明	15
	計	56
	瓦質	搦鉢
鉢		5
七厘部品		1
甕		1
不明		3
計	12	
土製品	埴塼	6
	鞆羽口	2
	土人形	1
	計	9
総計		77

肥前	青磁鉢	1
	白磁碗	1
	青磁皿	6
	青磁碗	1
	青磁香炉	1
	青磁火入	1
	白磁鉢	1
	色絵碗	1
	碗	79
	皿	29
	鉢	3
	小坏	5
	壺	1
	瓶	13
計	143	
肥前系	青磁皿	1
	碗	27
	皿	10
	鉢	4
	仏飯器	1
	徳利	2
	瓶	4
	水滴	1
	紅皿	1
	不明	1
計	52	

会津本郷	皿	8
	瓶	1
	計	9
瀬戸	碗	8
	碗蓋	1
	計	9
平清水	小坏	3
	段重	1
	計	4
不明 (磁製品 も含む)	碗	97
	小坏	2
	皿	29
	鉢	5
	蓋	2
	壺	4
	徳利	10
	甕	1
	瓶	6
	罎子	1
	水筒	1
	箸置	1
	カップソーサー	1
不明	1	
計	161	
総計		383

表10 磁器集計表

産地等	器種	総計
中国	青花碗	2
	青花小坏	1
	青花皿	1
	青磁碗	1
	計	5

表11 陶器集計表

産地等	器種	総計	
肥前	碗	11	
	皿	3	
	瓶	1	
	香炉	1	
	計	16	
岸	碗	2	
	皿	1	
	擂鉢	21	
	甕	3	
	香炉	3	
	德利	1	
	水注	1	
	植木鉢	1	
	把手	1	
	計	34	
	瀬戸・美濃	皿	2
		碗（織部含）	3
天目		3	
擂鉢		1	
志野皿		2	
志野盤		1	
計	12		
大畑相馬	碗	11	
	皿	1	
	土瓶	1	
	土瓶蓋	1	
	瓶	2	
	鉢	1	
	小坏	4	
	手焙	1	
	ひょう燗	1	
	火入	1	
	計	24	
会津本郷	碗	0	
	皿	1	
	鉢	5	
	擂鉢	13	
	甕	6	
	火入	3	
	計	28	
京	碗	4	
計	4		
備前	植木鉢	1	
計	1		
成島	甕	11	
	擂鉢？	4	
	鉢	1	
	不明	1	
	計	17	
陶製品	焼台	1	
	計	1	

不明	碗	20
	皿	4
	鉢	14
	擂鉢	26
	瓶	4
	甕	29
	壺	4
	土瓶	3
	土鍋	1
	火入	1
	土瓶蓋	2
	德利	1
	植木鉢	8
	急須	1
	香炉	4
	羽釜	1
	不明	11
	計	134
	総計	271

表12 ガラス製品集計表

産地等	器種	総計
不明	麦酒ビン	5
	氷コップ	1
	小ビン	2
	化粧ビン	2
	不明	1
	計	11

表13 木製品集計表

分類	器種	総計
食用具	箸	14
	計	14
生活雑貨	楔	1
	計	1
装身具	下駄	12
	計	12
生活容器	樽	1
	栓	1
	曲物	3
	筒形人物	1
	刳物皿	1
	計	7
食器	漆器碗	4
	漆器皿	1
	計	5
調理用具	柄杓？	1
	計	1
建材	柱根	1
	計	1

不明	部材	6
	箍	3
	杭	27
	円板状	1
	棒状	13
	板材	21
	角材	6
	丸太材	3
	未製品	1
	計	81
	総計	122

表14 石製品集計表

分類	器種	総計
遊具	碁石	1
	計	1
文具	硯	2
	計	2
生活雑貨	砥石	3
	計	3
石器	凹石	2
	計	2
不明	ト車	1
	計	1
	総計	9

表15 金属製品集計表

分類	器種	総計
生活容器	鉄瓶蓋（永井屋）	1
	計	1
生活雑貨	かんざし	1
	計	1
銭貨	古寛永	2
	新寛永	2
	計	4
総計	6	

※その他樹脂製品として歯ブラシ
（ライオン歯刷子・マサキヨ歯刷子）
が出土している。

IV 理化学分析

1 出土木製品の樹種調査結果

(1) 試料

試料は山形県米沢城跡から出土した容器2点、服飾具3点の合計5点である。

(2) 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の格切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

(3) 結果

樹種同定結果（広葉樹5種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) クルミ科サワグルミ属サワグルミ (*Pterocarya rhoifolia* Sieb. Et Zucc.)

(遺物No. 59)

散孔材である。木口では、比較的大型の道管（ $\sim 200\mu\text{m}$ ）が単独ないし2、3個放射方向に複合して散在し、晩材部で径を減じる傾向にある。軸方向柔細胞は1細胞幅の接線状あるいは網状柔組織である。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり、同性である。板目では、放射組織は1～2細胞列、高さ $\sim 0.5\text{mm}$ 以下からなる。サワグルミは北海道（南部）、本州、四国、九州（北部）に分布する。

2) ブナ科ブナ属 (*Fagus* sp.)

(遺物No. 165・166)

散孔材である。木口では、やや小さい道管（ $\sim 10\mu\text{m}$ ）がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2～3列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は単穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物（チロース）が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2～3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1～3mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道（南部）、本州、四国、九州に分布する。

3) カツラ科カツラ属カツラ (*Cercidiphyllum japonica* Sieb. Et Zucc.)

(遺物No. 60-4・5)

散孔材である。木口ではやや小さい薄壁で角張っている道管（ $\sim 100\mu\text{m}$ ）がおおむね単独または2～3個不規則に接合して平等に分布する。道管の占有面積は大きい。放射組織は不顕著。柾目では道管は階段穿孔と側壁に階段穿孔を有する。放射組織は平伏、方形と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状の壁孔がある。道管内腔には充填物（チロース）がある。板目では放射組織は方形ないし直立細胞からなる単列のものと、方形ないし直立細胞の単列部と平伏細胞の2列部からなるものがある。高さ

～900 μm からなる。カツラは北海道、本州、四国、九州に分布する。

4) モクレン科モクレン属 (*Magnolia* sp.) (遺物No. 61)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～110 μm)が単独ないし2～4個複合して多数分布する。軸方向柔組織は1～2層の幅で年輪界に配列する。柾目では道管は単穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなる同性と平伏と直立細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は階段状である。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～700 μm となっている。モクレン属は、モクレン、ホオノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

5) ウコギ科ウコギ属 (*Acanthopanax* sp.)

(遺物No. 60-1～3)

散孔材である。木口では極めて小さい道管(～50 μm)が20個以上集団となり、斜線方向ないし接線方向に長く連なる。柾目では、道管は単穿孔と側壁に大型の交互壁孔を有する。放射組織は平伏、方形と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は中型の篩状である。板目では、放射組織は1～8細胞列、高さ～2mmからなる。鞘細胞が見られる。ウコギ科ウコギ類はケヤマウコギ、ウラジロウウコギなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

表16 出土木製品同定表

No.	品名	樹種
59	連歯下駄	クルミ科クルミ属サワグルミ
60-1～3	差歯下駄(台)	ウコギ科ウコギ属
60-4・5	差歯下駄(歯)	カツラ科カツラ属カツラ
61	差歯下駄(歯)	モクレン科モクレン属
165	漆器椀	ブナ科ブナ属
166	漆器椀	ブナ科ブナ属

参考文献

- 島地 謙・伊藤隆夫 1988 『日本の遺跡出土木製品一覧』 雄山閣出版
 島地 謙・伊藤隆夫 1982 『図説木材組織』 地球社
 伊藤隆夫 1982 『日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V』 京都大学木質科学研究所
 北村四郎・村田 源 1979 『原色日本植物図鑑木本編 I・II』 保育社
 深澤和三 1997 『樹体の解剖』 海青社

使用顕微鏡

Nikon MICROFLEX UFX-DX Type115

2 近世漆器の塗膜構造調査

(1) はじめに

山形県米沢市に所在する米沢城跡から出土した、近世の漆器2点について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

(2) 調査資料

調査した資料は、表17に示す近世の漆器碗2点である。

表17 調査資料

No.	器種	樹種	概要
165	碗	ブナ属	内面赤色で外面体部と高台は全面緑色、高台内は黒色の碗。外面体部には金箔と赤色の漆で桜色を、黄色の漆で松葉を描く。高台内には金箔で桜花、黄色の漆で松葉を描く。
166	碗	ブナ属	内外面とも赤色の無文の碗

(3) 調査方法

表10の資料本体の内外面から数mm四方の破片を採取してエキポシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

(4) 断面観察結果

塗膜断面の観察結果を表18に示す。

表18 断面観察結果表

No.	器種	部位	塗膜構造(下層から)			
			下 地		漆 層	
			膠着剤	混和剤	構造	顔料等
165	碗	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	ベンガラ
		外面(金箔 文様部)	柿渋	木炭粉	緑色漆1層/黄色漆1層/ 金箔	藍+石黄/ 石黄/金箔
		外面(赤色 文様部)	柿渋	木炭粉	緑色漆1層/赤色漆1層	藍+石黄/ ベンガラ
		外面(黄色 文様部)	柿渋	木炭粉	緑色漆1層/黄色漆1層	藍+石黄/ 石黄
		外面(高台 内の黒色部)	柿渋	木炭粉	墨?/透明漆1層	油煙類
166	碗	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	ベンガラ
		外面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	ベンガラ

塗膜構造：2点とも下層から、下地、漆層と重なる様子が観察できた。

下地：内外両面すべて褐色の柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地が認められた。

漆層：概ね下地の上に漆層が1層という構造であった。漆に赤色顔料を混和した赤色漆と、漆に藍と黄色顔料を混和した緑色漆と、下地の上に墨？を塗布してから透明漆を重ねた透明漆層が認められた。

顔料：赤色漆に混和された赤色顔料はベンガラである。ほとんど薄青色の層の中に黄色の顔料と青色の凝集物が観察された。また透明漆層の下に塗布された墨？はおそらく油煙類であろう。

装飾：No. 165の体部外面には、金箔、赤色漆、黄色漆をそれぞれ用いた3種類の装飾が見られた。金箔を用いた装飾部には、緑色漆層の上に黄色漆層が1層とその上に薄い金箔が観察された。黄色漆層は金箔を貼る接着用の漆である。また赤色漆文様部にはベンガラを混和した漆層が、黄色漆文様部には石黄を混和した漆層が観察された。

(5) 摘要

米沢城跡から出土した近世の漆碗2点の塗膜構造調査を行った。1点には、外面に緑色地の上に金箔、赤色漆、黄色漆を用いて文様が施されており、もう1点は全面が赤色の無文碗である。

ともにブナ属の木胎の上に、下地、漆層と重なる塗膜構造であった。

下地は炭粉渋下地で、その上に1層漆層が塗布される、という比較的簡素な構造であった。

地色の赤色漆には、赤色顔料としてベンガラが、緑色漆には、藍と石黄が混和されていた。

また透明漆層の下層に墨？を塗布して塗膜をより黒く見せる塗装が見られた。

装飾には黄色漆で金箔を貼ったもの、赤色漆と黄色漆で文様を描く漆絵の技法がみられた。

V 考察

1 歴史的考察

(1) 拝領家臣の変遷

今回の調査区の位置について、現在までの調査や城下絵図によって凡そ推定できる¹⁾。二の丸の堀跡の検出位置から推定して、南三の丸の上中級家臣団の屋敷地内に調査区があることがわかる。第34図屋敷地推定図には字限図から想定した屋敷割図と主な絵図を載せている。

今回の調査区は、二の丸堀の南東側で道に面した2～3軒分に当たることが推定される。表19拝領家臣の変遷では、3軒の区画に①～③と付番し、「住人ツキ」絵図から人名を拾い、表中に列挙している。なお、絵図の作製年代については、青木(1992)・渡辺(2003)によった。

①の区画は、17世紀半ばに侍組斉藤助之丞の居宅であったが、17世紀後半に高家衆二本松家の居宅になり、江戸末まで継続して住んでいる。②の区画は、18世紀半ばまで侍組本庄家の居宅であったが、その後、安江家、大平家の居宅に変わっている。③の区画は、18世紀初頭までは五十騎組宮家の居宅であったが、その後御典医の水野家の居宅に変わっている。

移動の理由²⁾のわかる史料が無く、詳細は不明だが、17世紀後半～18世紀後半にかけて屋敷地の移動が行われていることがわかる。特に②に関しては、18世紀半ばから複数人の移動が確認できる。

(2) 人名刻書・墨書

硯(49)の裏面には「五日 駒方茂衛門」と刻まれている。「駒方茂衛門」は「駒形茂右衛門」に当たると考えられる(米沢温故会1987a)。八代当主重定執政時の勘定頭(在任期間1756～1766年)であったが、御側役森平右衛門の失脚と同時に職を辞している(横山他1994)。駒形家が当該地区に屋敷地を得たかは絵図等で確認できなかった。

「かわらけ」(156)内面には「七月廿四日 志源□□」と書かれている。共伴する陶磁器の年代観が17世紀後半で、当時の居住者は絵図等で「本庄修理」に当たる。『御家中諸土略系譜』には「実志駄修理亮義秀五男始於三磨源四郎」(米沢温故会1987b)とあり、元志駄家であったことが窺える。1630年(寛永七)中に家督を嗣いでおり、それ以降に土坑の遺物廃棄年代を求められよう。

2 遺構の変遷

今回の調査は、主要地方道米沢猪苗代線3・4・4窪田・諸仏線改良工事に係る緊急発掘調査である。調査区は市街地の中心部にあるが、遺構の遺存状態は比較的良好であった。

調査面積は500㎡であるが、遺構総数は300基を超え、掘立柱建物跡・溝跡・土坑・性格不明遺構などの遺構が検出された。

第35図は出土遺物や検出状況から遺構の新旧関係をまとめたものである。

掘立柱建物跡は、17～19Cまでの土坑などに壊されているため、下限の年代が想定できる。しかし、柱穴からの出土遺物が皆無で、正確な存続年代が確定できなかった。S B156をのぞいては17C代の遺構から壊されており、三の丸造成前後の時期に当たると思われる。溝跡や土坑

住人の変化

遺構の新旧関係

表19 拝領家臣の変遷

区画 番号	絵図 記号	絵図記載名	本名	身分	石高	備考
①	A	斉藤助之丞	市之進安信	侍組	300石	「七之丞」(年譜) 慶安2年家督 貞享3年卒 宝永2年家督 同8年病死
	B	二本松外記	国政	高家		
	C	同人				
	D	二本松備前	国茂	高家	100石	正徳元年家督 享保14年半知・隠居
	E	二本松吉茂	国当	高家		宝暦10年家督 寛政3年隠居
	F	二本松政弥	国審	高家	200石	文化3年家督 文政3年病死
②	A	本庄修理	秀長	侍組	300石	元志駄修理5男 「始於三鷹源四郎」 寛永7年家督 元禄4年卒 50+200+50石 天和元年家督 元禄8年卒
	B	本庄数馬	貞長	侍組	300石	
	C	本庄新五郎	清長	侍組		200又は300石 元禄8年家督 享保6年隠居
	D	本庄舎人	新左衛門範長	侍組		享保6年家督
	E	安江五郎左衛門	繁英	馬廻組	50石	50石 50→200石 享保12年家督 安永3年改易・在郷 安永6年卒
	F	大平宮次	次芳	侍組		文化8年家督
③	A	宮盛右衛門	信儀	五十騎	50石	50石→25石 「森右衛門」(年譜) 寛永20年家督 延宝2年 作事屋頭
	B	同人				
	C	宮総左衛門	信次	五十騎	200石	元禄元年家督 正徳2年卒
	D	水野道益				御典医 享保3年近習
	E	水野吉□				
	F	水野某				

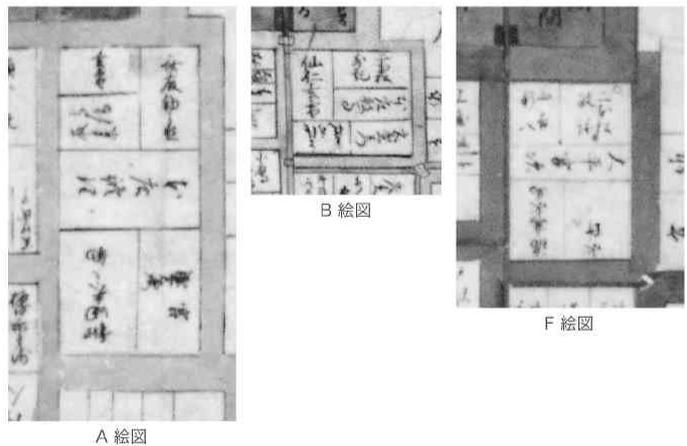
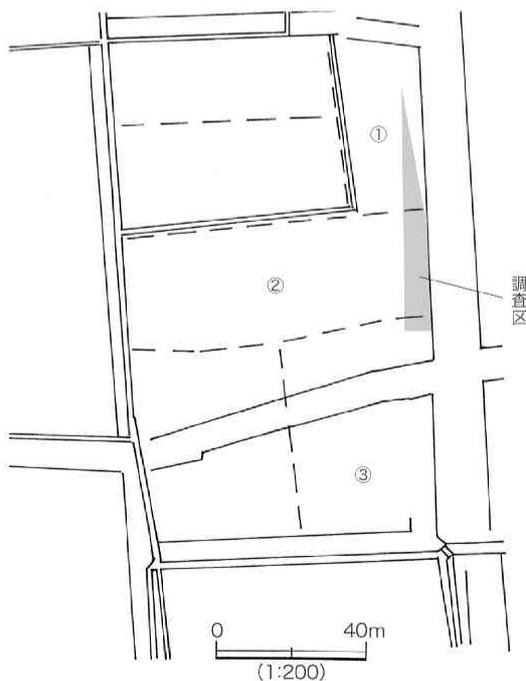
(角屋由美子氏作成のものに加筆)

※絵図記号

	絵図名 (旧作製年代)	(作製年代)
A	御城下絵図 万治年中	1653年 (承応2)
B	御城下絵図 元禄7年	1682年 (天和2)
C	旧米沢城下絵図 享保3年	1700年 (元禄13)
D	御城下絵図 承応2年	1725年 (享保10)
E	米沢御城下絵図 明和6年	1769年 (明和6)
F	御城下絵図 文化8年	1811年 (文化8)

※年譜：上杉家年譜

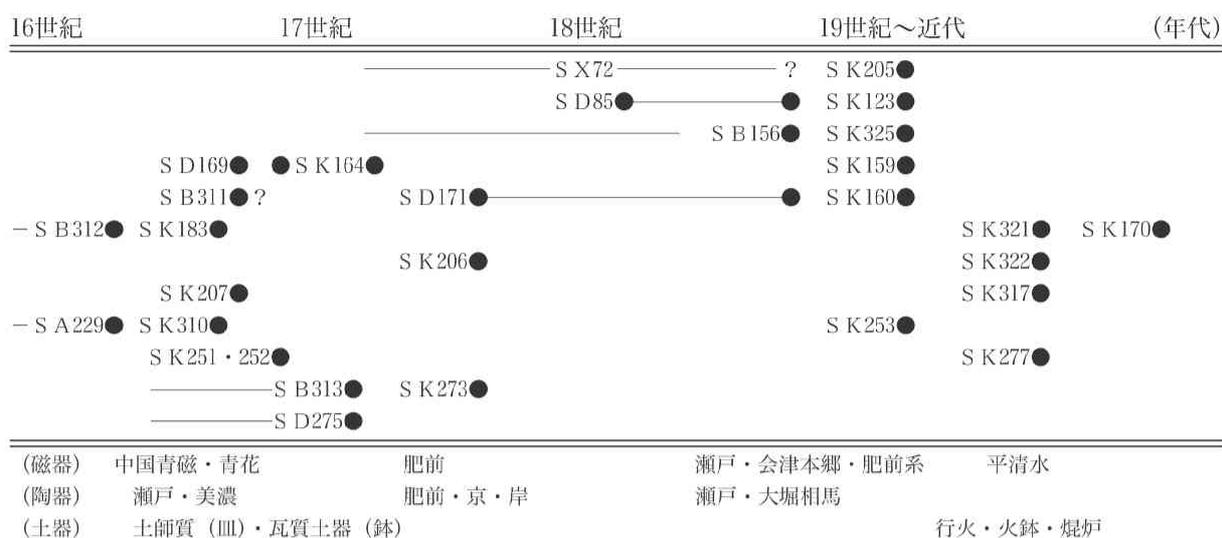
※作製年代は、青木 (1992)・渡辺 (2003) によった。



※右は、昭和期の字限図である。(上が北方向)
 ※一筆ごとの区画の記載をせず、道路・水路を主に載せた。
 ※屋敷割はA絵図を参照した。(---は屋敷区画境界)
 ※A・B・F絵図ともに米沢市上杉博物館所蔵である。
 ※図中の①～③は表19と対応する。

第34図 屋敷地推定図

第35図 遺構相関図



は前述のように出土遺物から廃絶年代や存続年代を窺うことができる。土坑は、16世紀末・17世紀後半頃のものとは19世紀(近代も含む)頃のものとは大別できる。いずれの出土遺物も被熱しているものが多く、火事や拝領地の移動などが原因で使用していた生活容器・雑貨類を廃棄したと思われる。また、遺構の検出状況や遺物の出土状況からS D 171(遺構の南北における柱穴等の検出状況の差異)とS K 273(南側に近世の遺構が皆無)付近に、近世を通しての屋敷地の境界

の結果として前回調査同様上杉期以前の様相は不明な点が多かった。今後の調査では、16世紀以前の様相が明らかになればと思う。

3 遺物組成の変遷

(1) 16世紀～17世紀初

磁器は中国青磁(碗)、青花(碗)のみである。陶器は瀬戸、美濃産の播鉢、天目茶碗、丸皿、志野輪花皿などである。それらに、「かわらけ」、内耳土鍋、瓦質土器鉢、播鉢、坩堝などが共伴している。特に坩堝の破片が16～17世紀の遺構から万遍無く出土しており、遺構外から発見された轆羽口と合わせて、屋敷地以前の土地利用について検討を要する。また、木製品については、下駄(連歯・差歯)、箸、曲物などが挙げられる。

(2) 17世紀後半～18世紀初

磁器は肥前磁器のみで構成されるようになり皿、碗、香炉、鉢などが挙げられる。

陶器は、肥前のものは二彩手鉢や瓶・呉器手または京焼き写し(銘「清水」)碗が見られる。しかし、それを凌駕する勢いで岸窯の製品が大量に入ってくる。碗、瓶、水注、甕、播鉢など多岐にわたる。1次調査においても同製品は多くみられた。今次調査でも同じ様相が窺える。

木製品では、特に17世紀後半以降に廃棄された土坑(S K 273)から外面緑色漆が塗られた漆器碗(165)が出土している。緑色漆は、藍等の天然植物染料で青色に着色した漆の中に石黄が混入される場合が多い。当遺跡出土品も同じである。北野氏(2003)は「18世紀以降の江戸時

漆器(緑色漆)の
出土遺跡

代中～後期頃に奥州会津生産地で開発された青色と黄色の混合で緑色の発色を得る緑色漆の延長線上にある技術である」としている。他に緑色漆の漆器が出土している遺跡は、東京：「溜池遺跡」・「増上寺子院群」・「汐留遺跡」、愛知：「岡崎城」などである。中でも汐留遺跡は、黒・赤漆の製品に混じって前述の漆が多く出土している。本遺跡では、他にベンガラ赤漆塗りのような安価なものもあり、使い分けも想定される。

特に、質・量ともに十分な出土があったのは、S D171下層出土遺物である。先に述べたようにこの溝を屋敷地の境界とすれば、それより北側の拝領地が斉藤家から二本松家に移行する時期でもあり興味深い。屋敷替に因る投棄とは考えられないだろうか。

(3) 18世紀中～末

磁器は、「くらわんか手」のものを主力にして肥前が圧倒的である。陶器は、肥前のものに代わって大堀相馬や会津本郷産のものが後半代から増加してくる。相馬産の腰折形の碗や会津本郷産の播鉢は、この時期の大半の遺構から出土している。

(4) 19世紀～

磁器は、瀬戸・肥前系・会津本郷・肥前に分かれ、肥前産のものが減少する。特に肥前系が各器種にわたって使用されている。筒形碗や仏花瓶・御神酒徳利まで様々である。また、後半代になると平清水産のもの(瓶・段重など)が散見される。陶器では、大堀相馬・会津本郷産のものが多く、また、瀬戸産陶器も磁器とともに搬入される。復古織部の碗はその代表例である。地元成島焼は近代を通して甕・鉢を中心に充実している。

なお、S K325に窯道具の焼台(相馬産片口鉢?と共伴)が出土しており、さらに遺構外であるが癒着した陶器の小片が見つまっている。失敗した状態の品を購入するとは考えられず、近くに窯場が存在するか、居住者が関係していたか、詳細は不明である。

註

- 1) 角屋由美子氏のご教示による。
- 2) 屋敷地の移動は、(1) 公的な理由、(2) 私的な理由に分けることができる。(1) はさらにA: 新知行や加増による移動・B: 藩用施設増設のための移動・C: 1664年(寛文4)の削封による移動に分類される。(2) はA: 養子縁組による移動・B: 借家として血縁者を住ませるための移動・C: 相対替による移動に分類される(渡辺2003)。

引用文献

- | | | |
|-------|-------|---|
| 青木昭博 | 1992 | 「城下絵図の伝来と作製年代」『絵図でみる城下町よねざわ』米沢市立上杉博物館 |
| 渡辺理絵 | 2003 | 「米沢城下町絵図と侍の居住について」『山形県地域史研究28』山形県地域史研究協議会 |
| 横山昭男他 | 1994 | 『米沢市史 近世編2』米沢市史編さん委員会 |
| 米沢温故会 | 1987a | 『上杉家御年譜24』米沢温故会 |
| 米沢温故会 | 1987b | 『上杉家御年譜23』米沢温故会 |
| 北野信彦 | 2003 | 「汐留遺跡出土漆器碗類の材質と製作技法」『汐留遺跡Ⅲ』東京都埋蔵文化財センター報告書第125集 |

第36図 出土陶磁器変遷図

	磁器	陶器
16世紀 ～ 17世紀初		
17世紀後半 ～ 18世紀初		
18世紀中 ～ 末		
19世紀 ～		

写真図版



調査区近景



航空写真（平成12年）



重機稼動状況



面整理状況



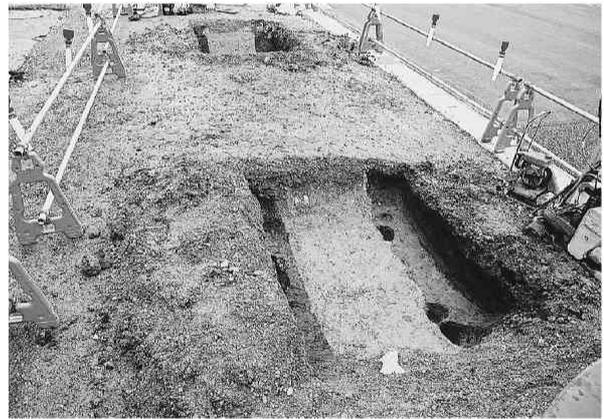
遺構精査状況



調査説明会



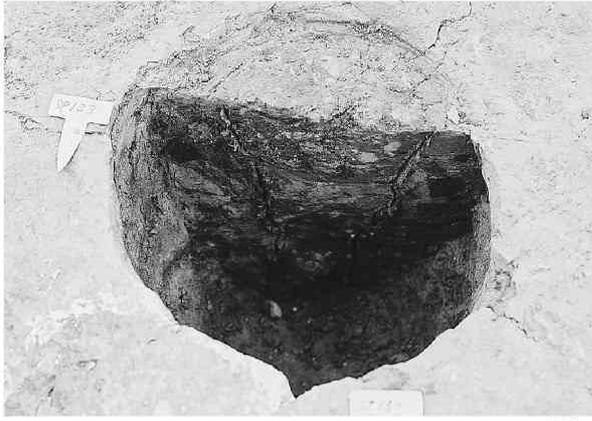
基本層序 A



G・H区



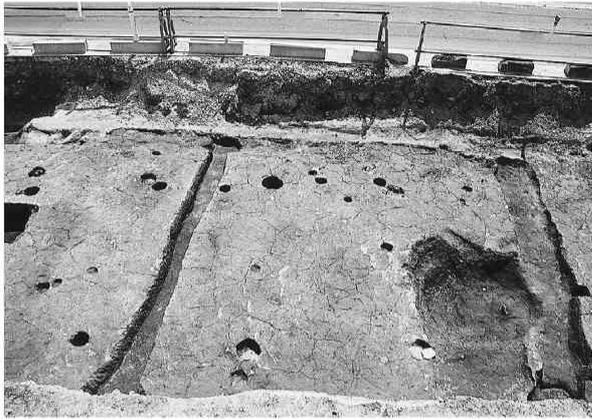
SBI56完掘状況



EB133断面



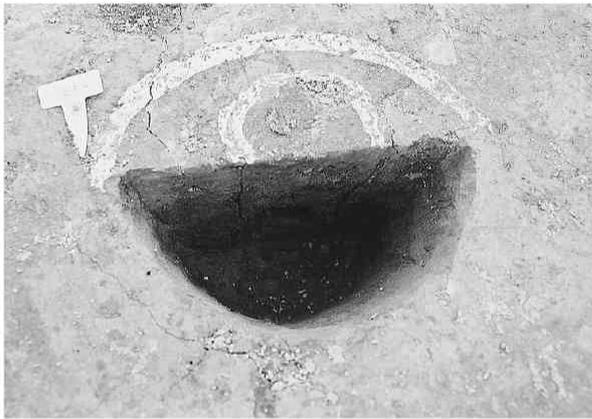
SB311完掘状況



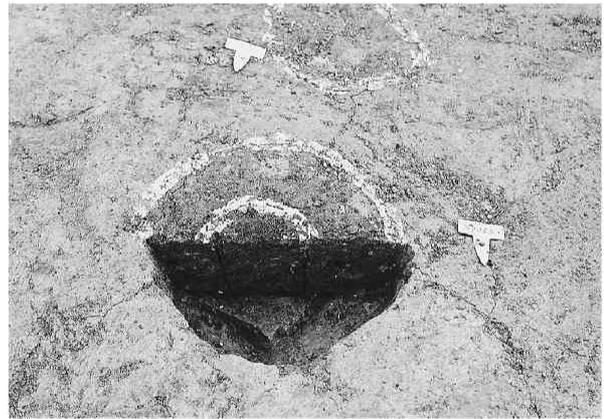
SB313完掘状況



EB266断面



EB243断面



EB263断面



SD85・SK90断面



SD169断面



SD171全景



SD171・172断面



SD171近世陶器出土状況



SD171近世陶器出土状況



SX72断面



SX72完掘状況



SX72断面



SX72出土状況



SK90炭化層出土状況



SK90最深部出土状況



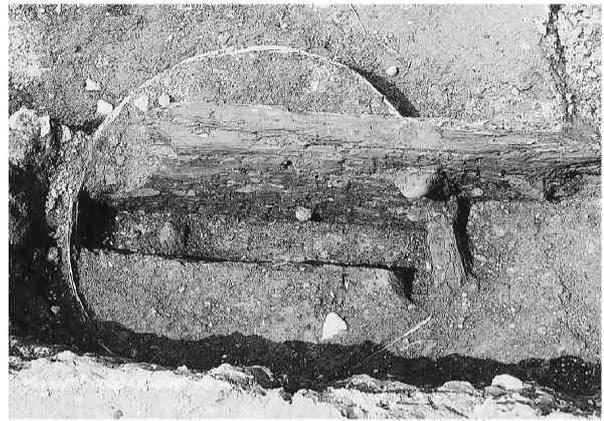
SK325検出状況



SK325



SK159断面



SK160断面



SK159・160



SK170・321・322



SK159・160完掘状況



SK170・321・322断面



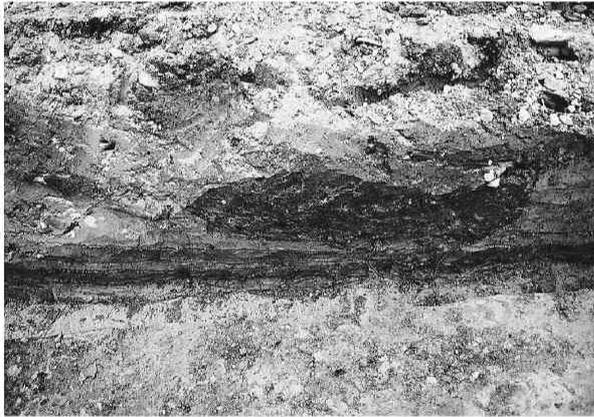
SK183断面



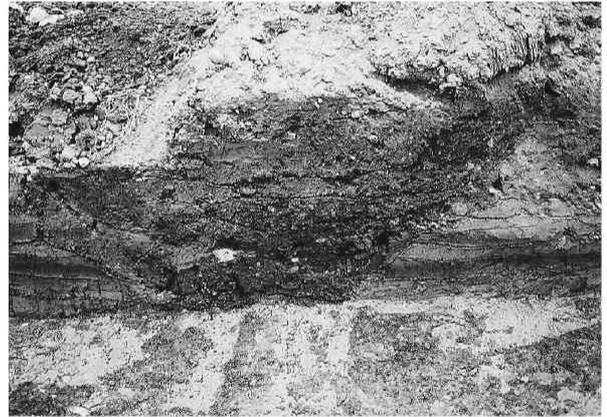
SK183出土状況



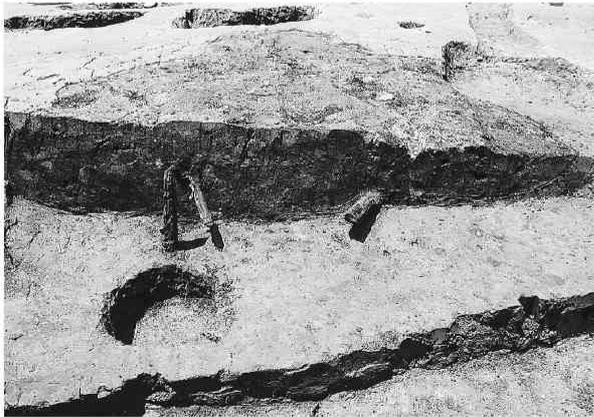
SK183出土状況



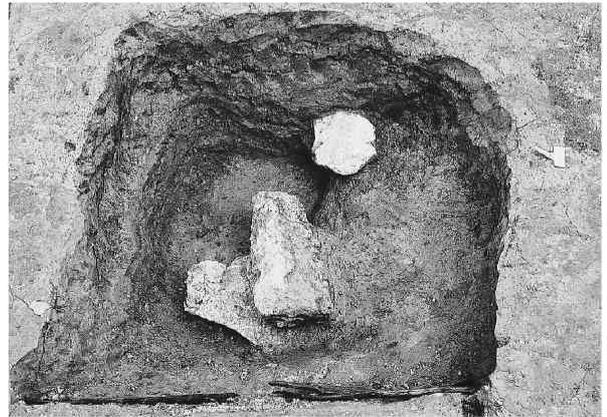
SK206断面



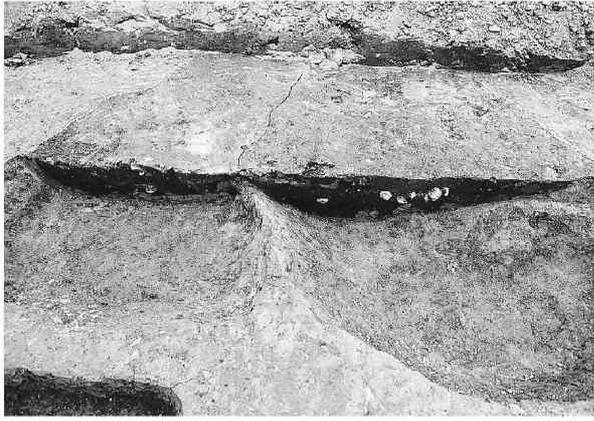
SK207断面



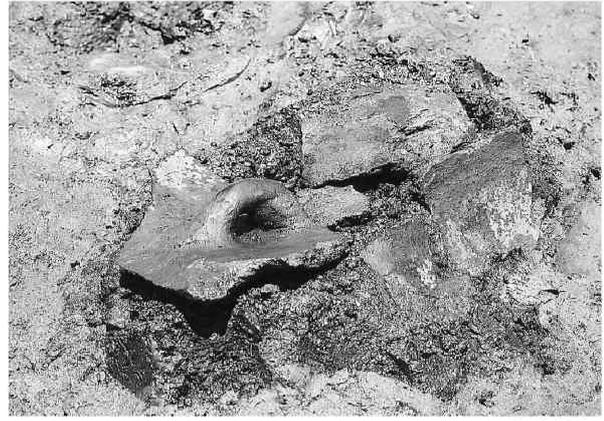
SK310断面



SK253



SK251・252断面



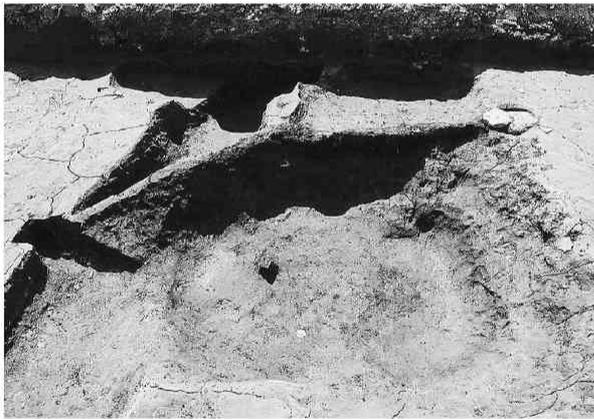
SK251出土状況



SK273断面



SK273出土状況



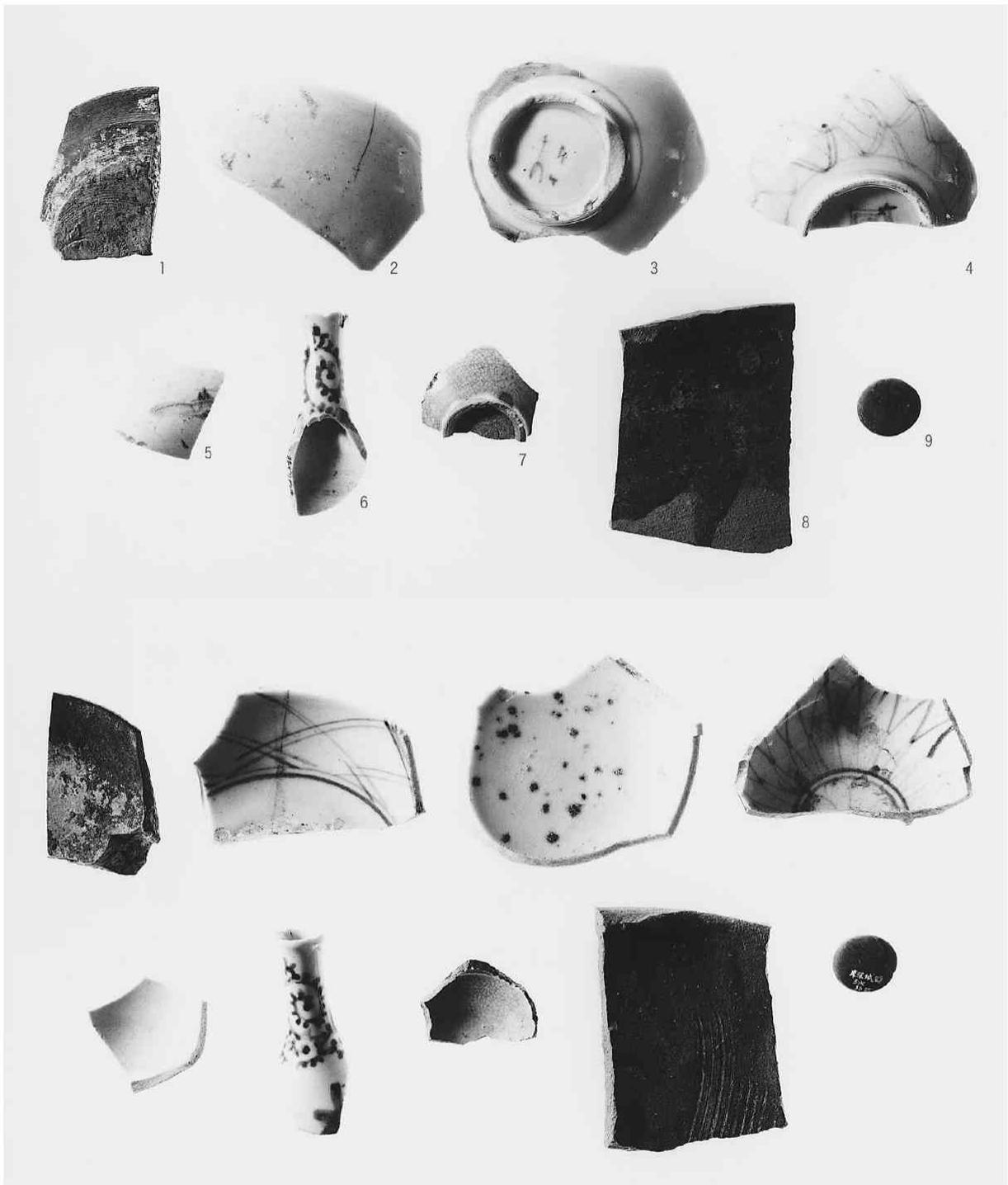
SK273完掘状況



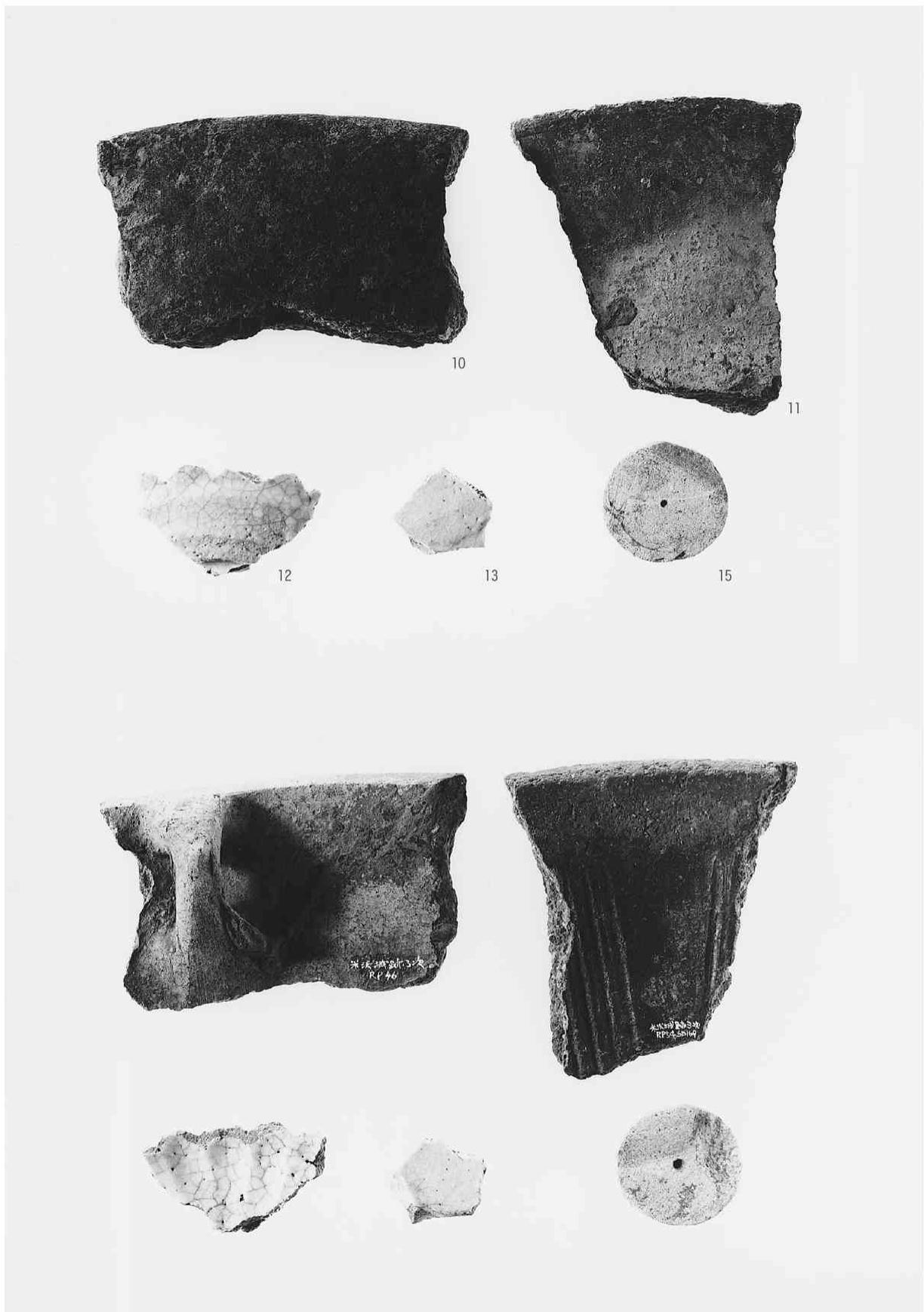
調査区全景



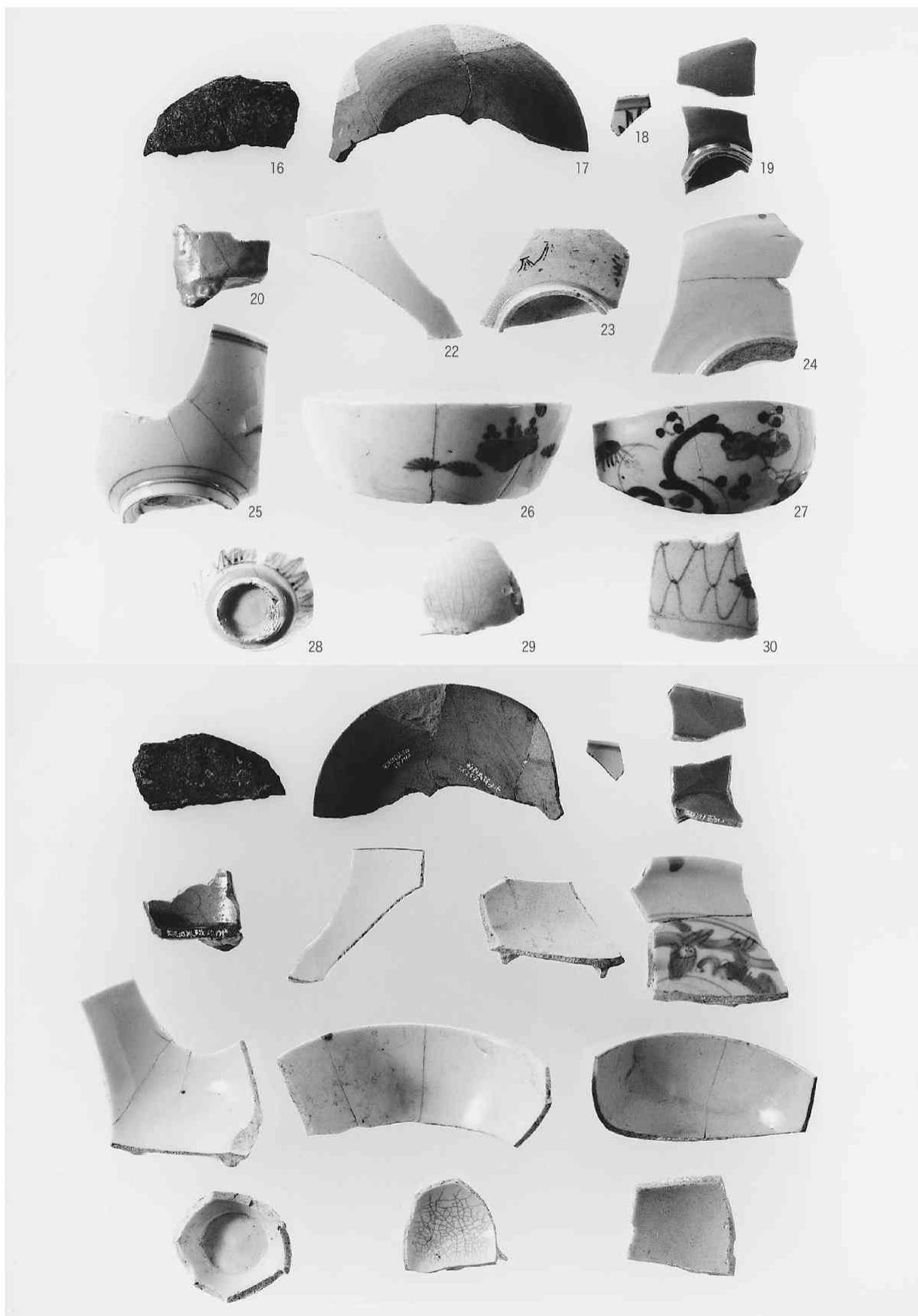
調査区全景



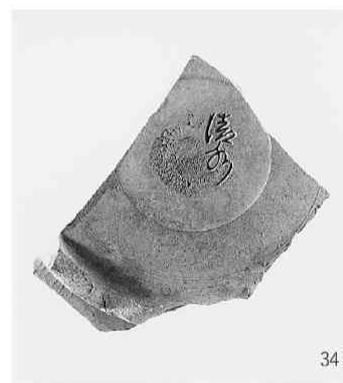
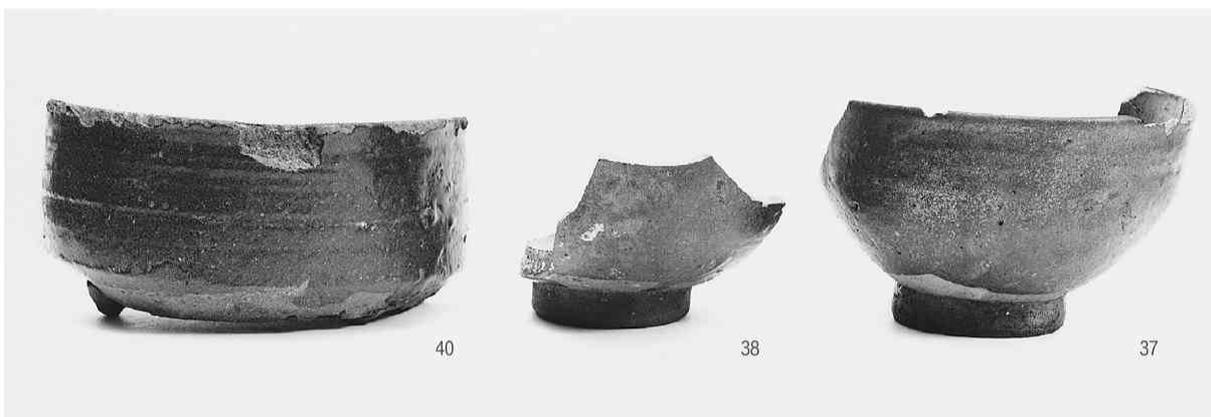
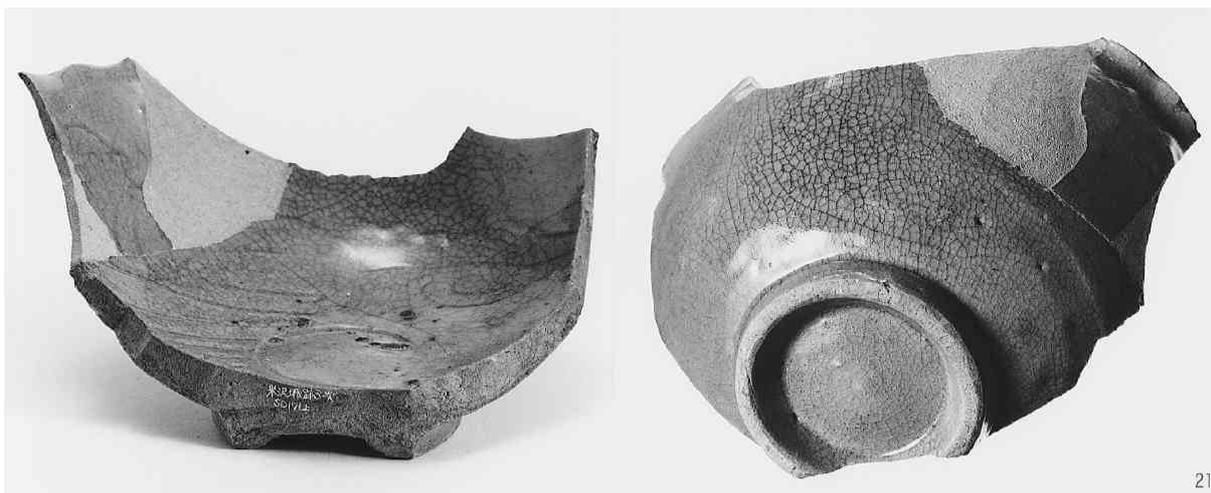
出土遺物 (1)



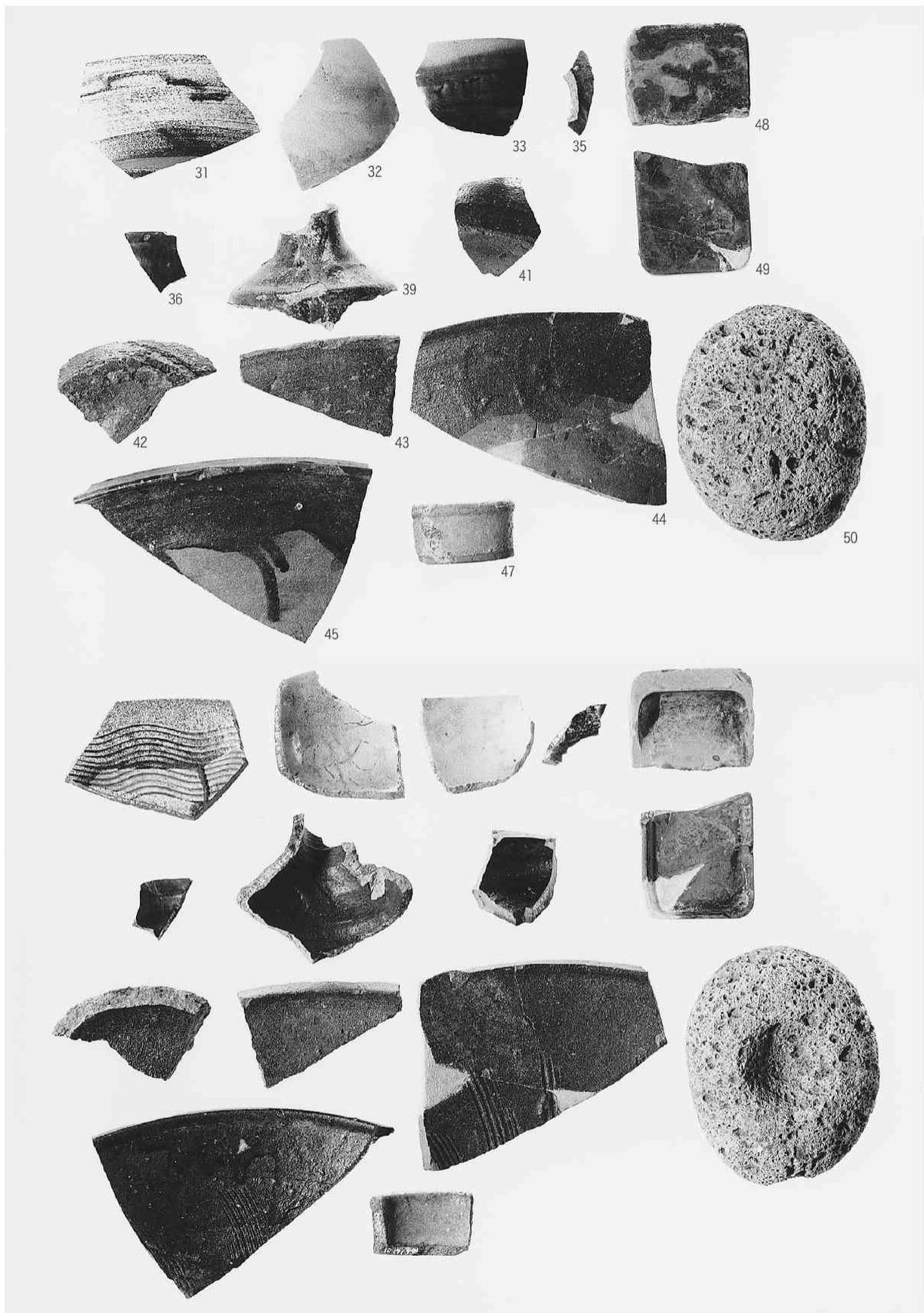
出土遺物 (2)



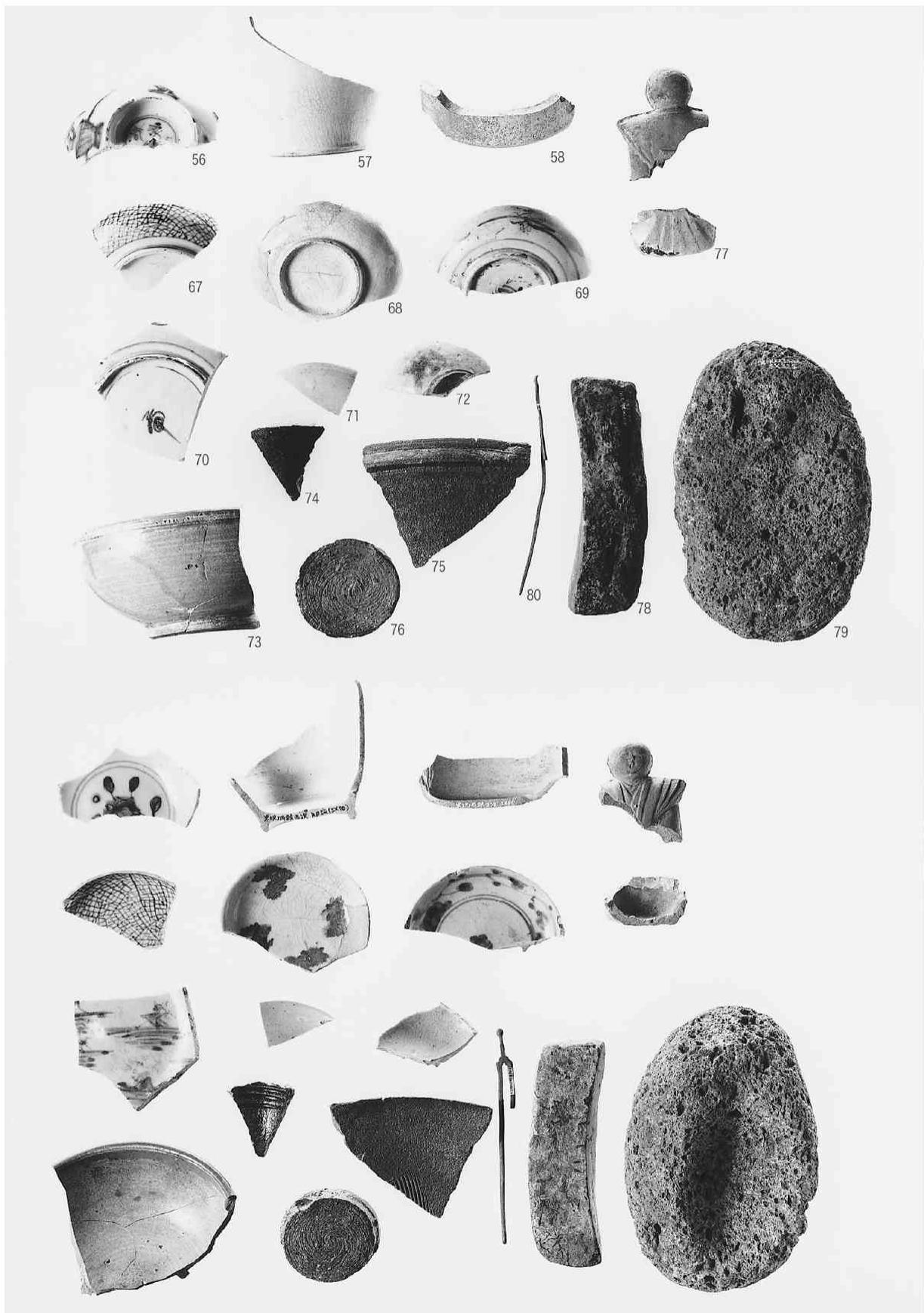
出土遺物 (3)



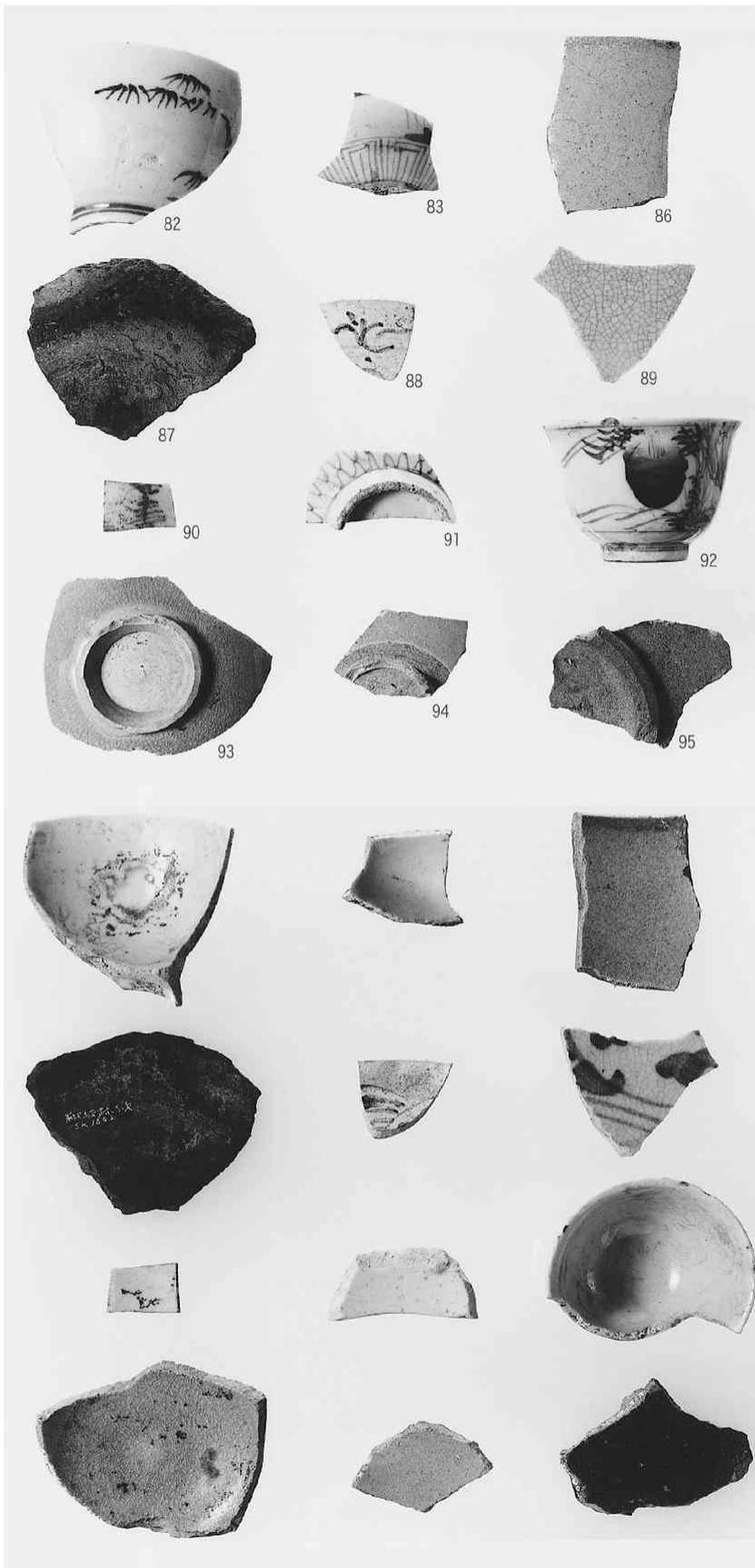
出土遺物（4）



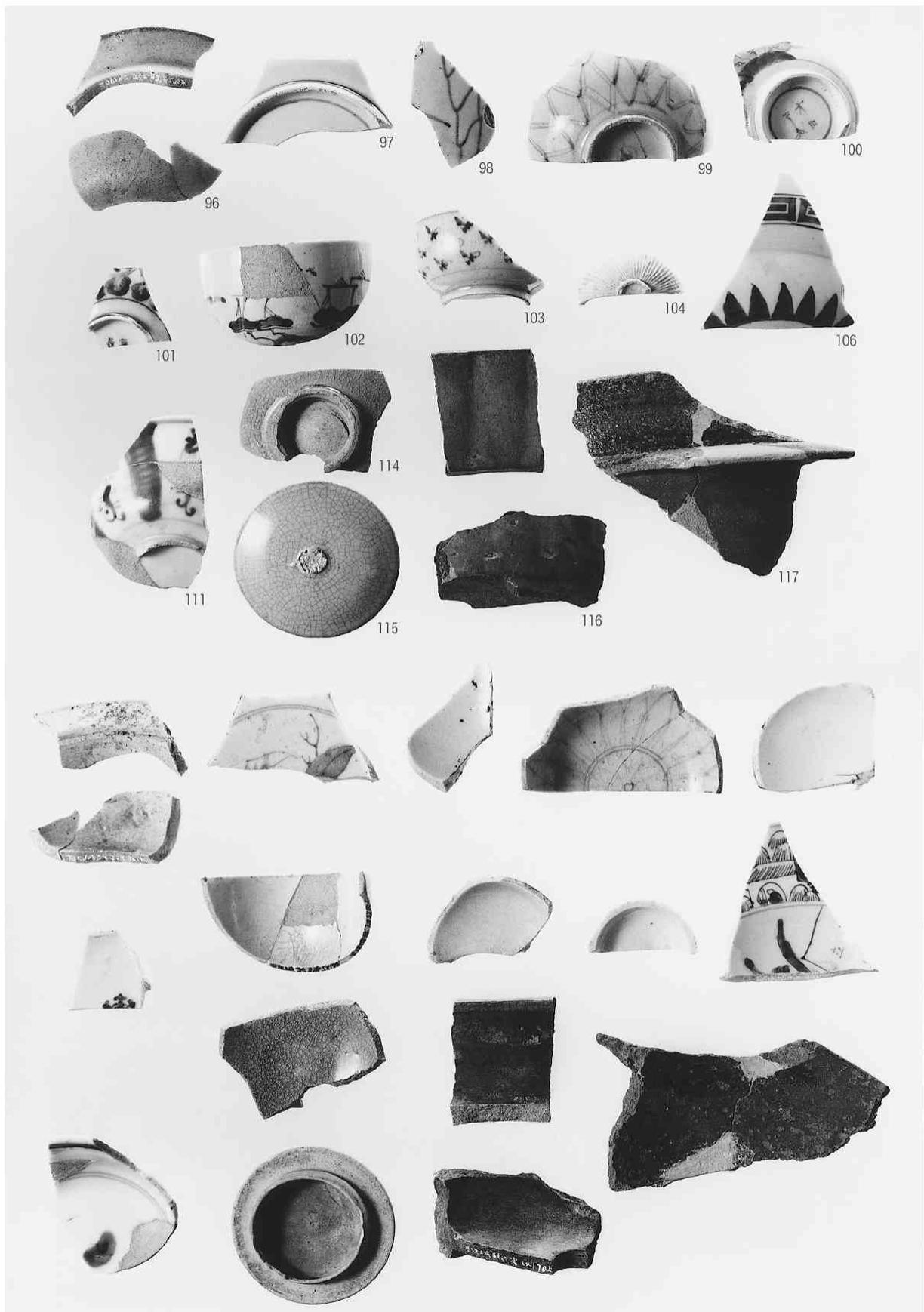
出土遺物 (5)



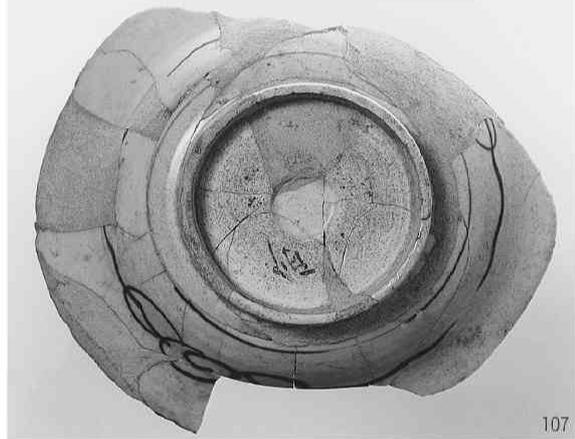
出土遺物 (6)

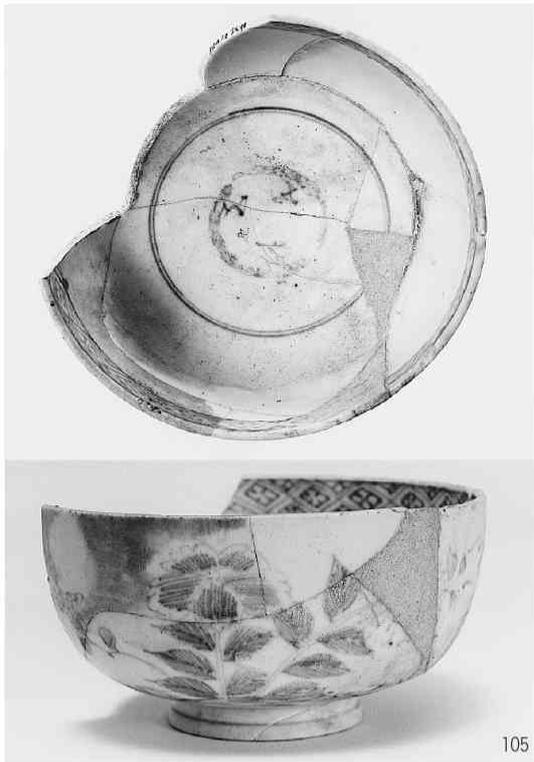


出土遺物 (7)

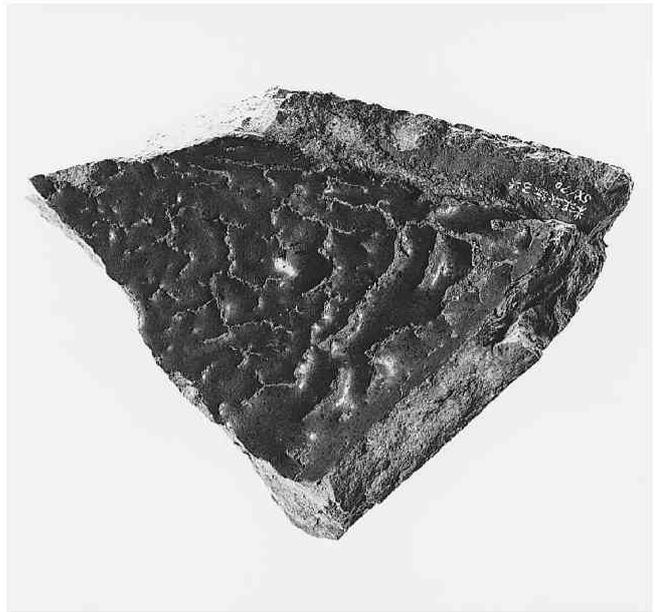


出土遺物 (8)

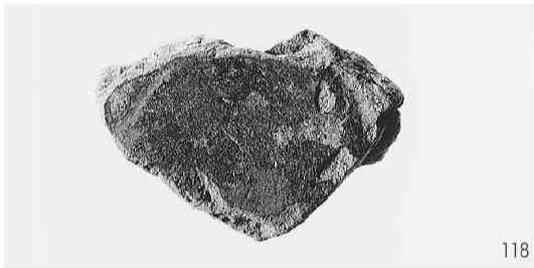




105



113



118

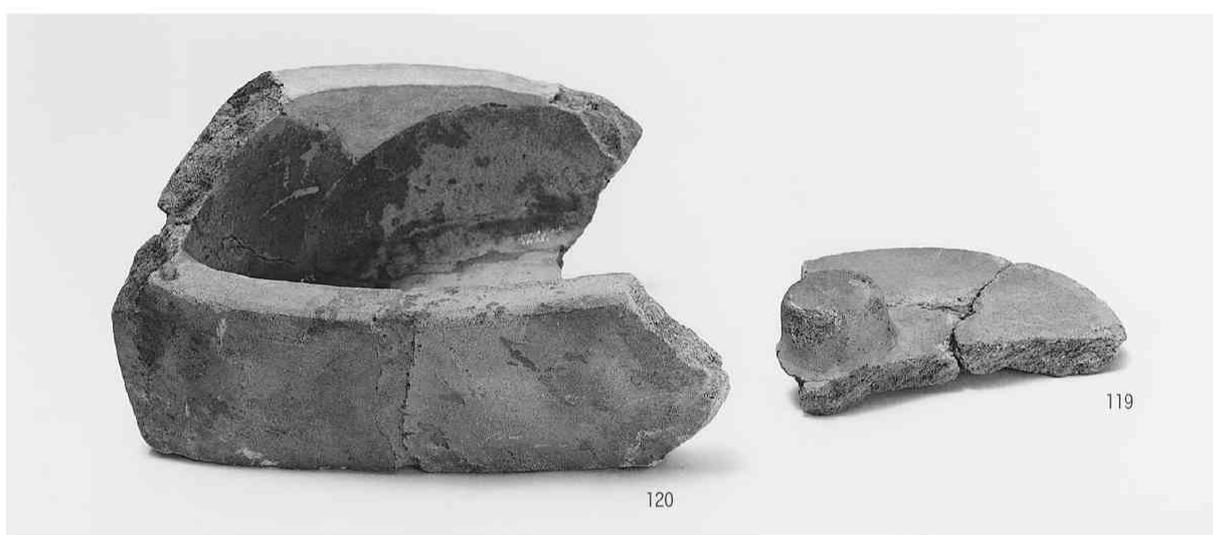
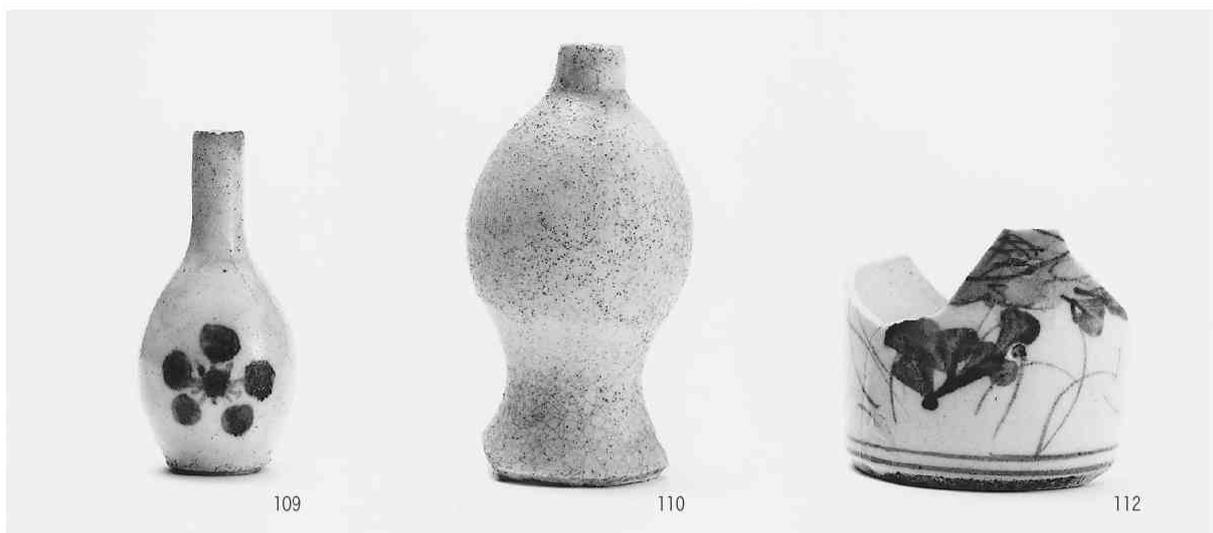


124

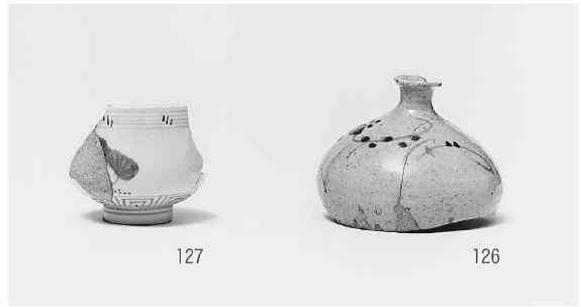
122

123

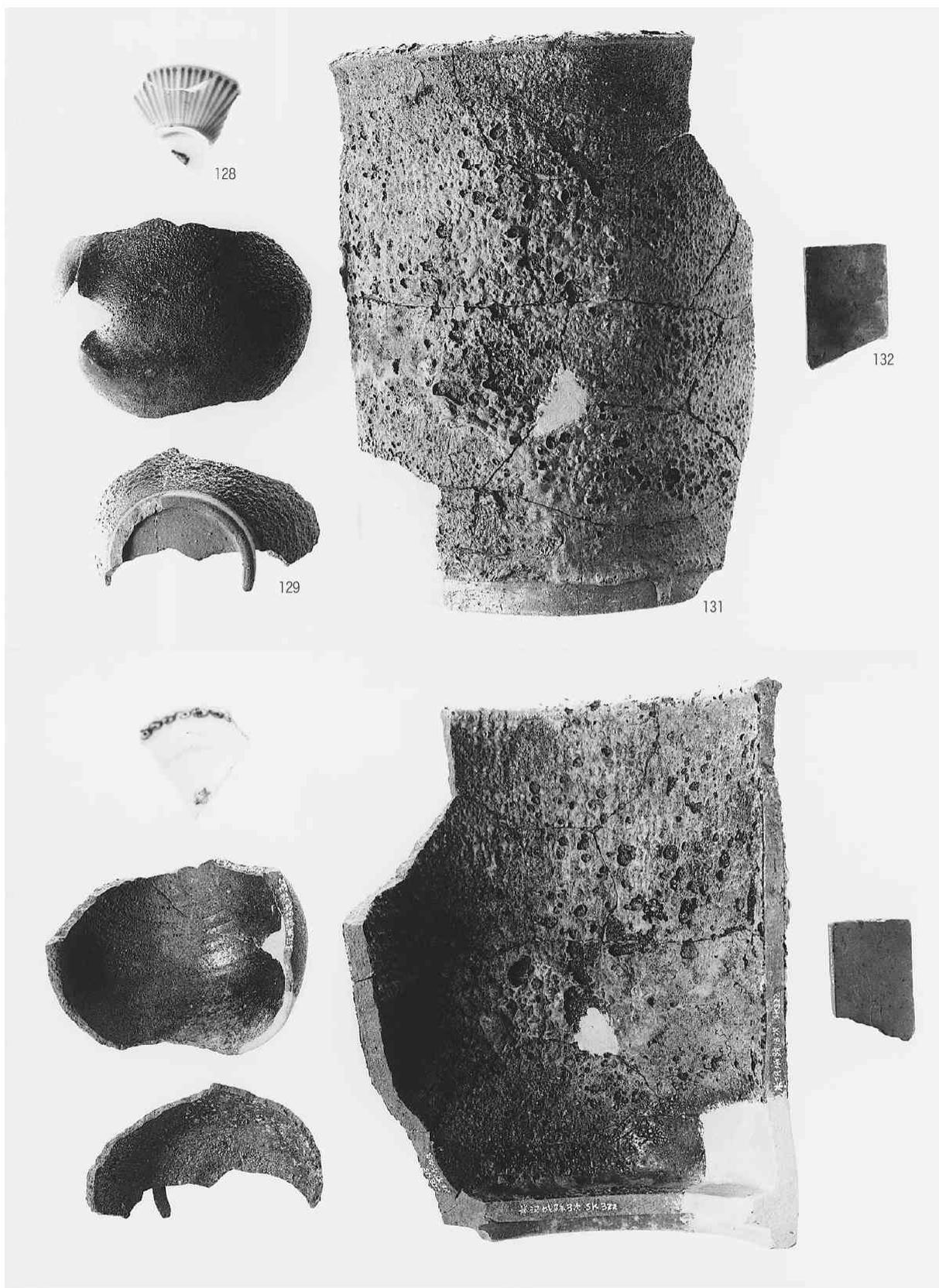
出土遺物 (10)



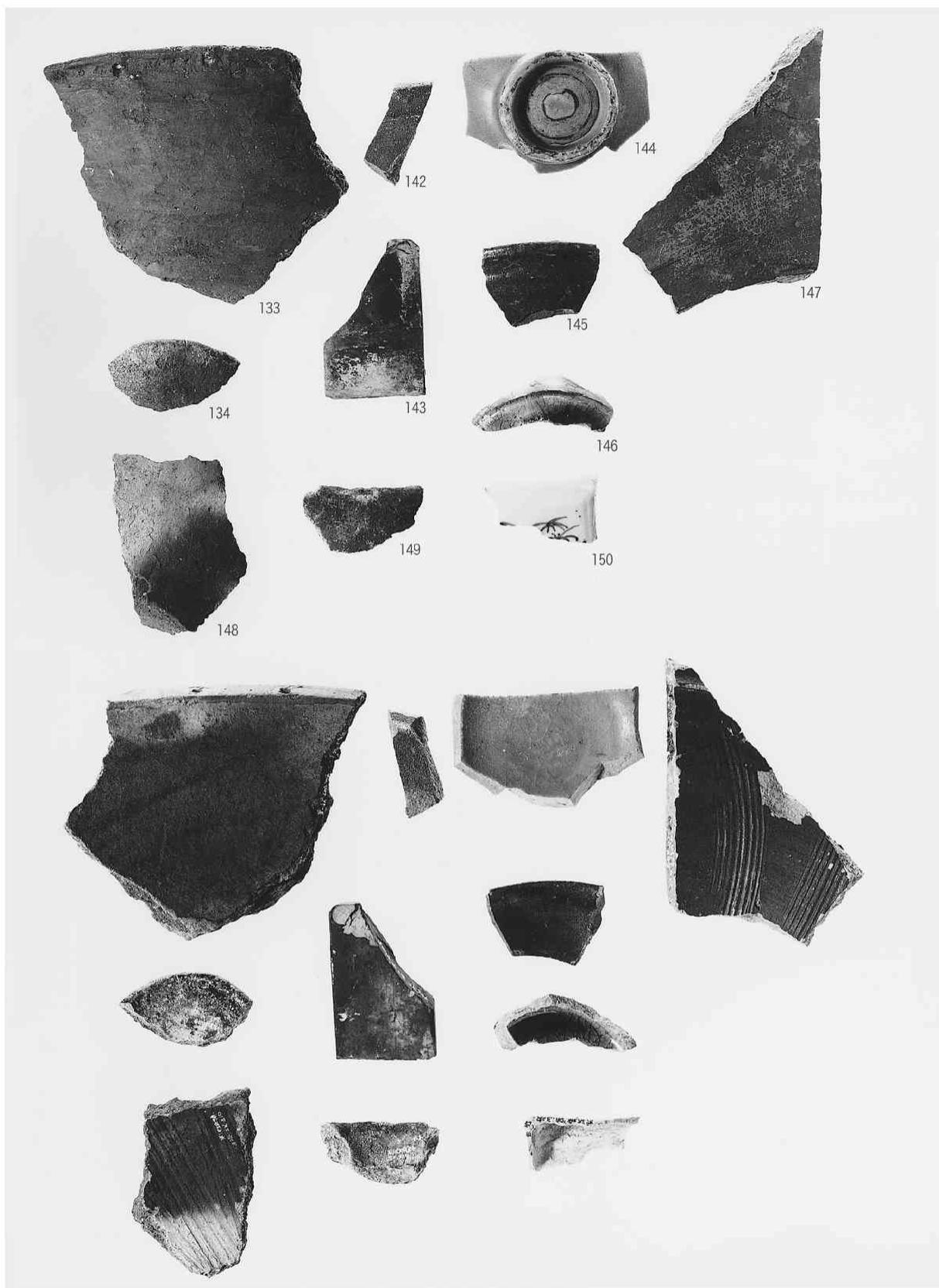
出土遺物 (11)



出土遺物 (12)



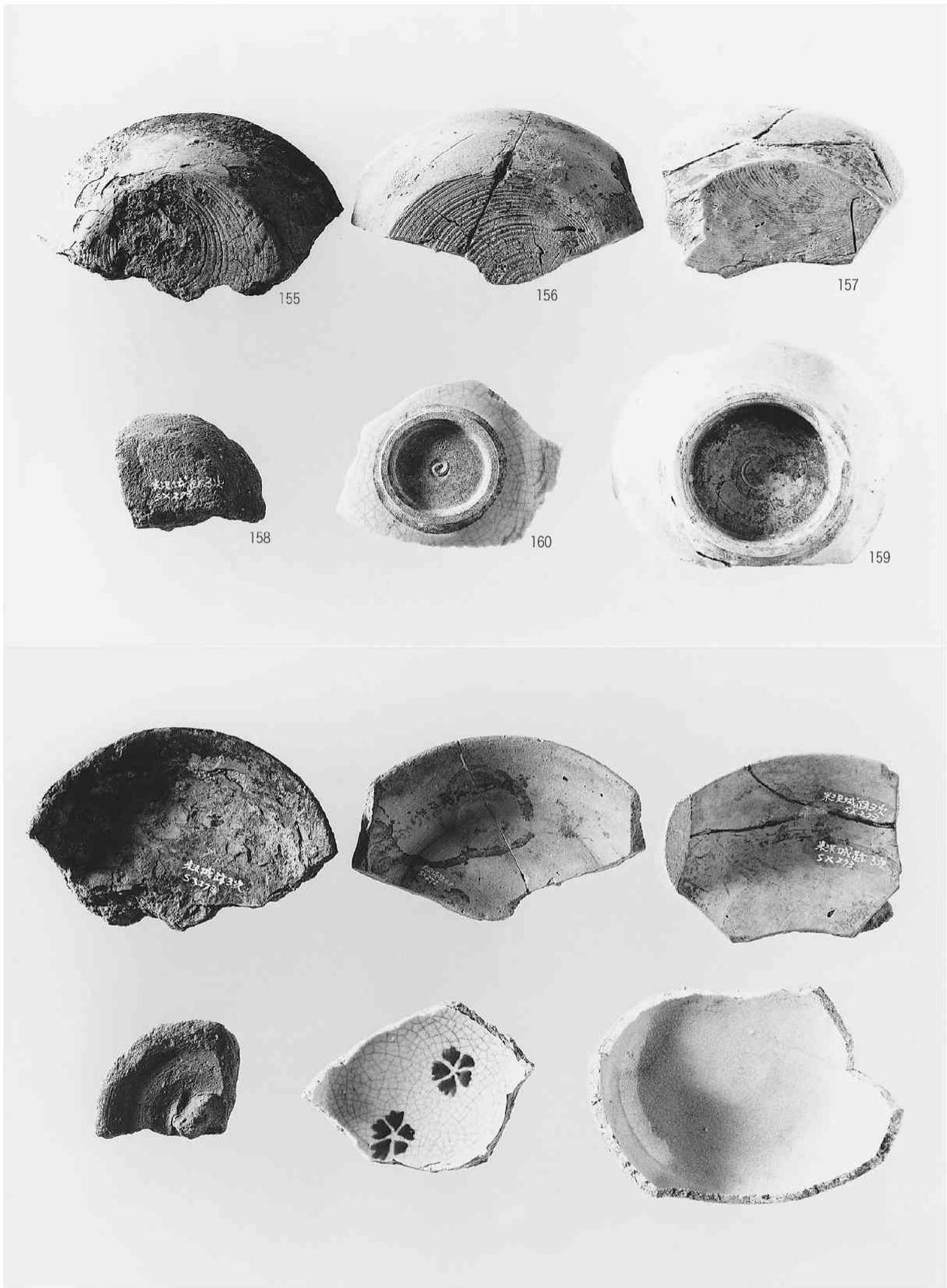
出土遺物 (13)



出土遺物 (14)



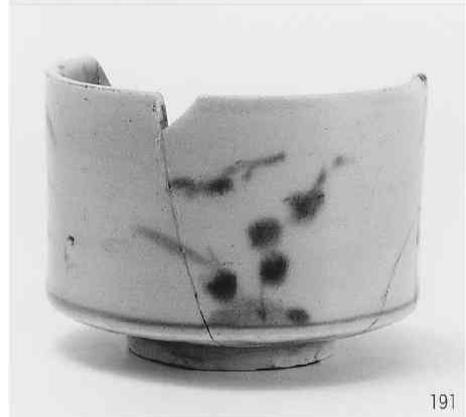
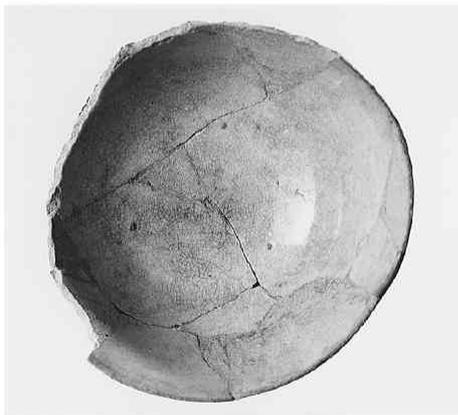
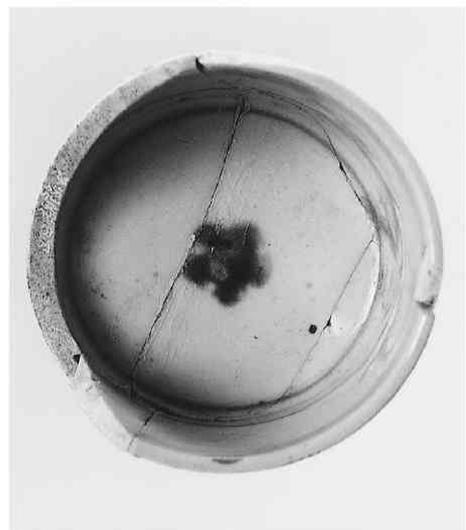
出土遺物 (15)



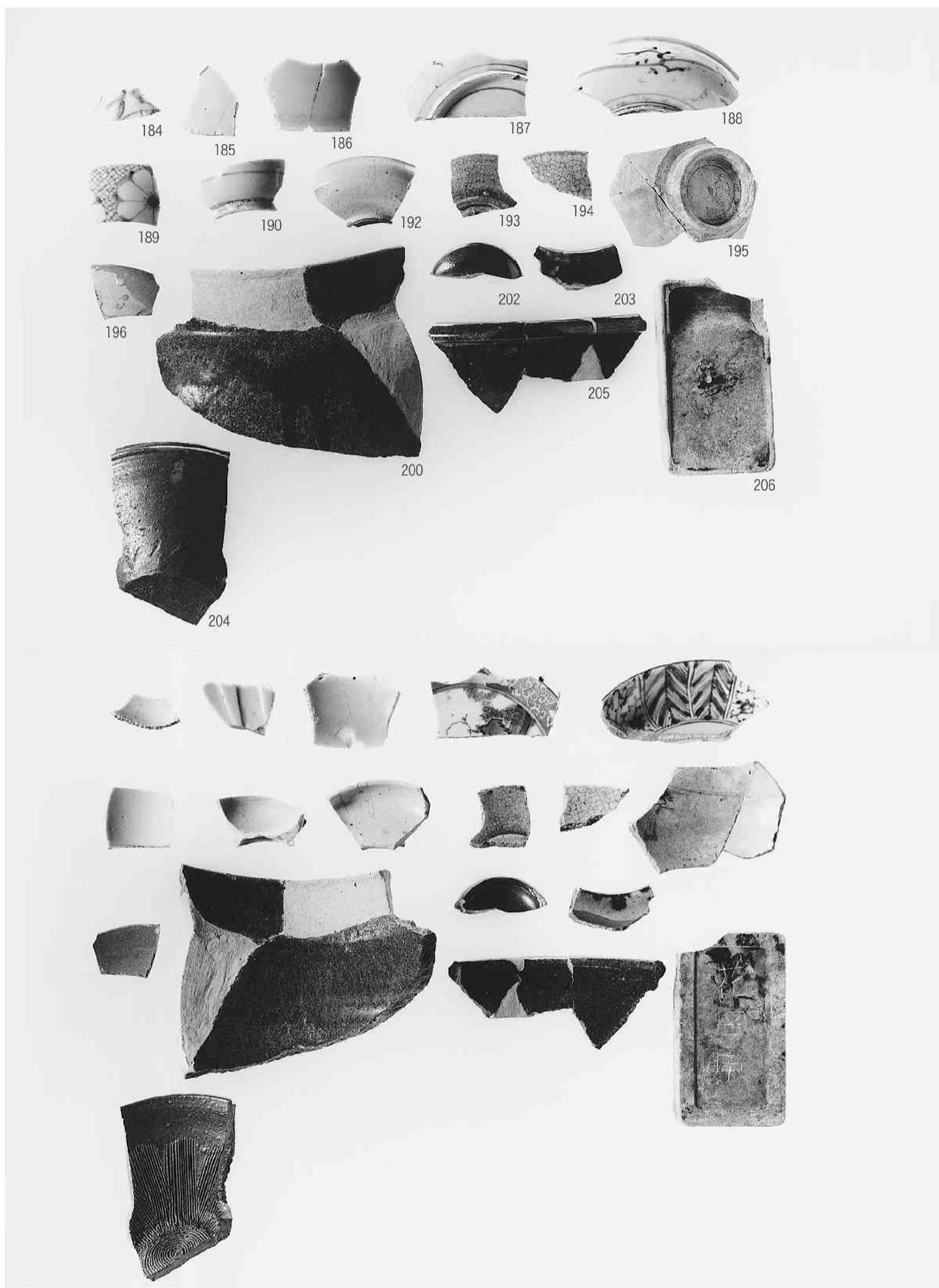
出土遺物 (16)



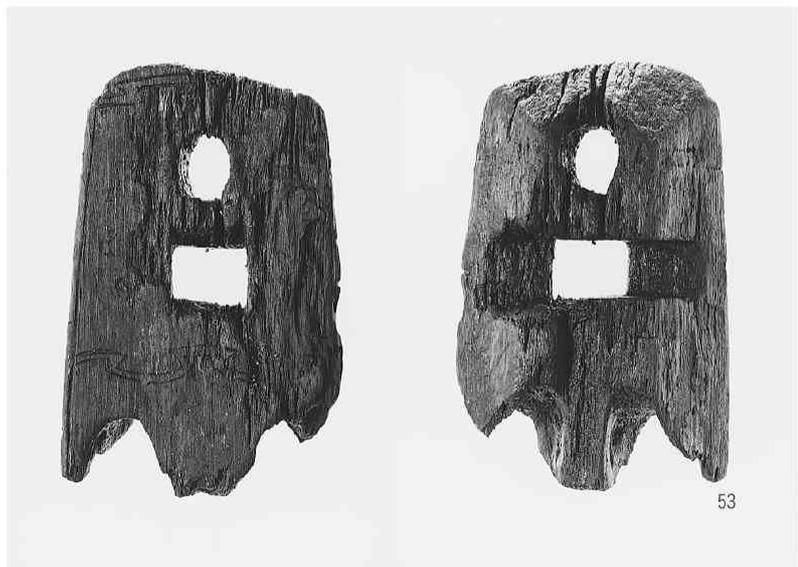
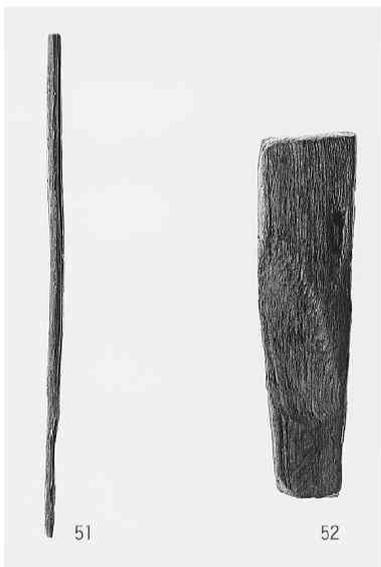
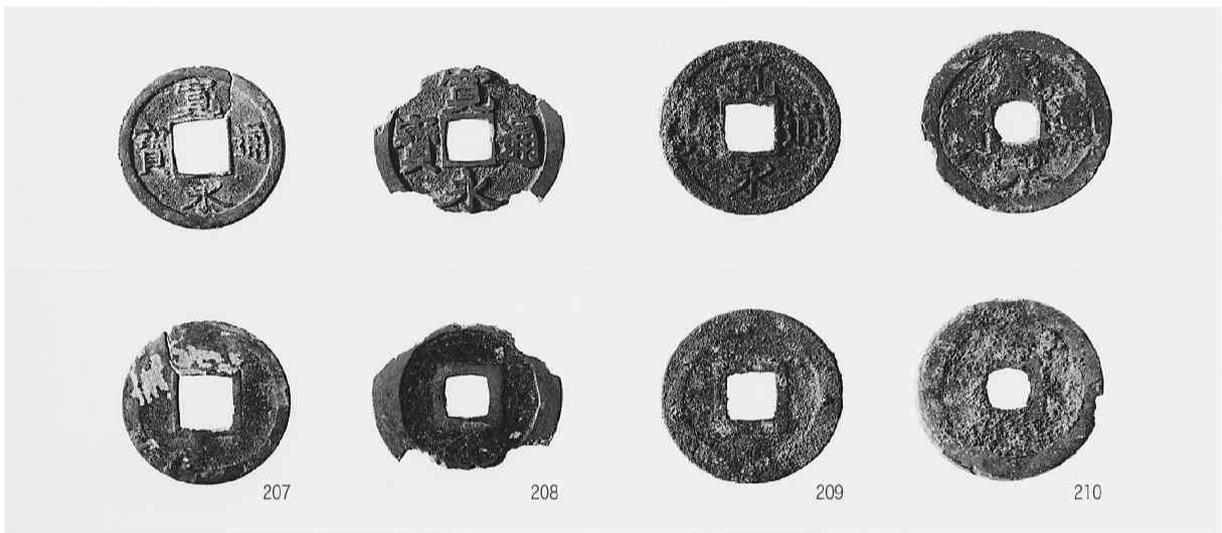
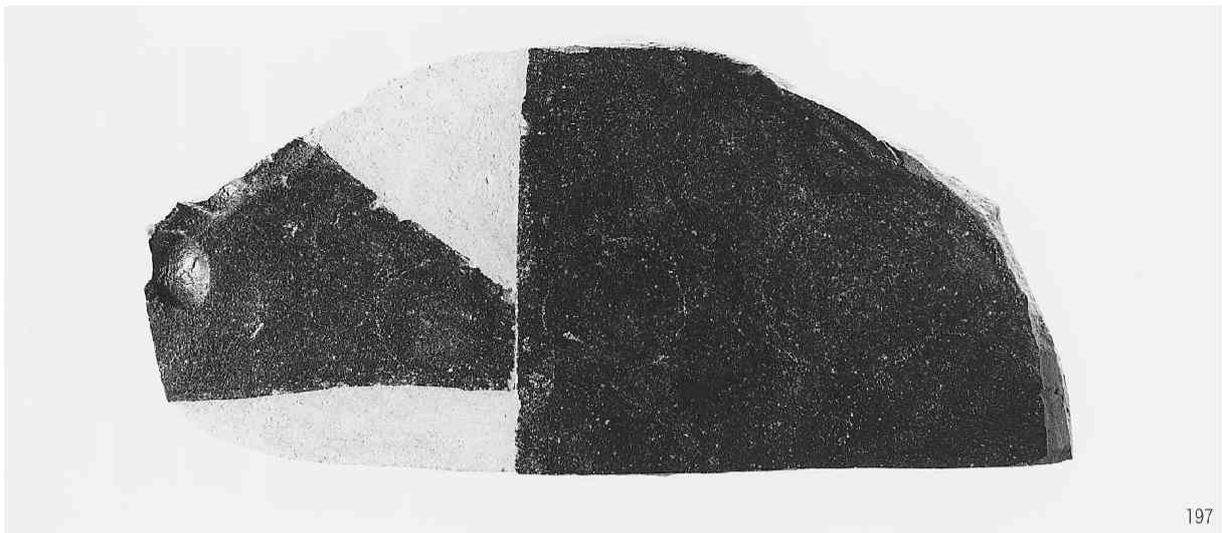
出土遺物 (17)



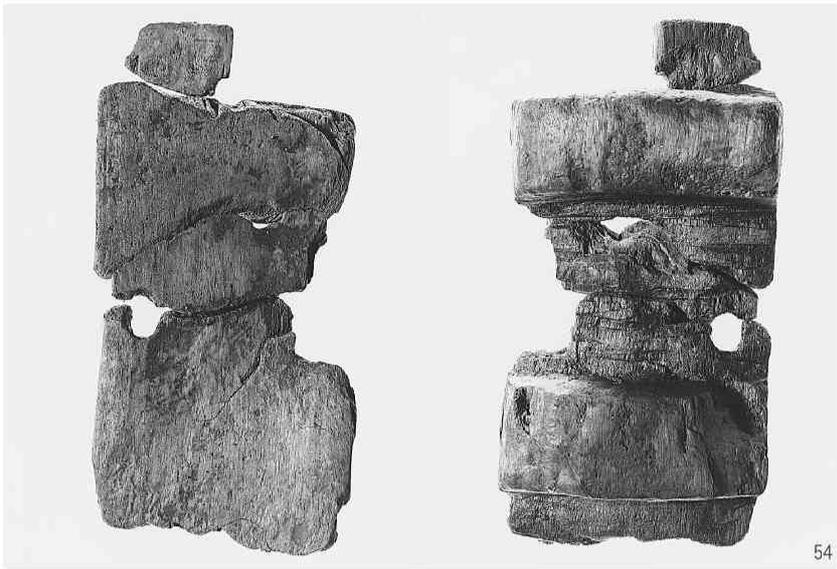
出土遺物 (18)



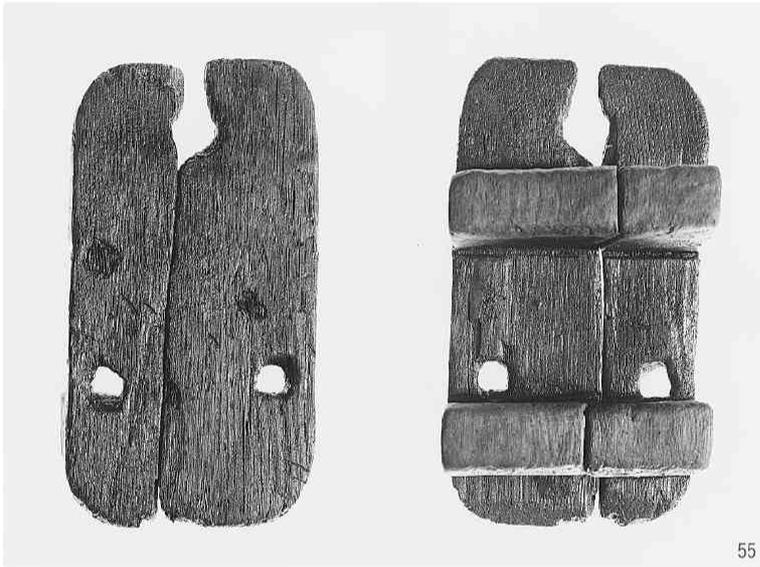
出土遺物 (19)



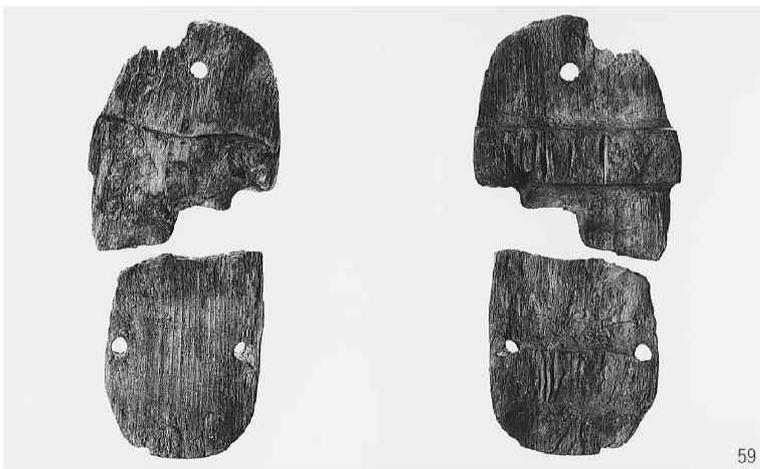
出土遺物 (20)



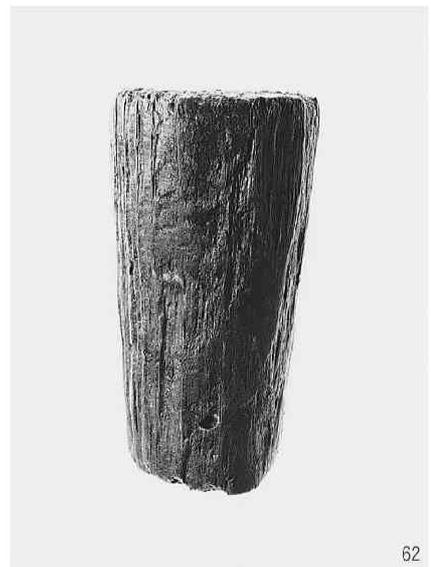
54



55

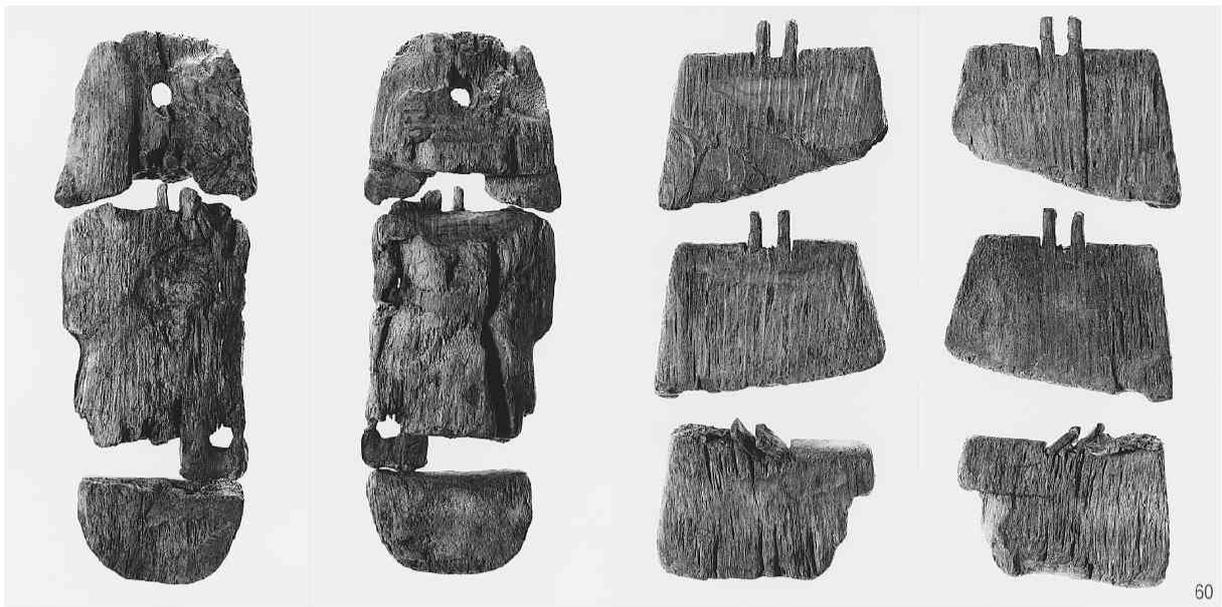


59

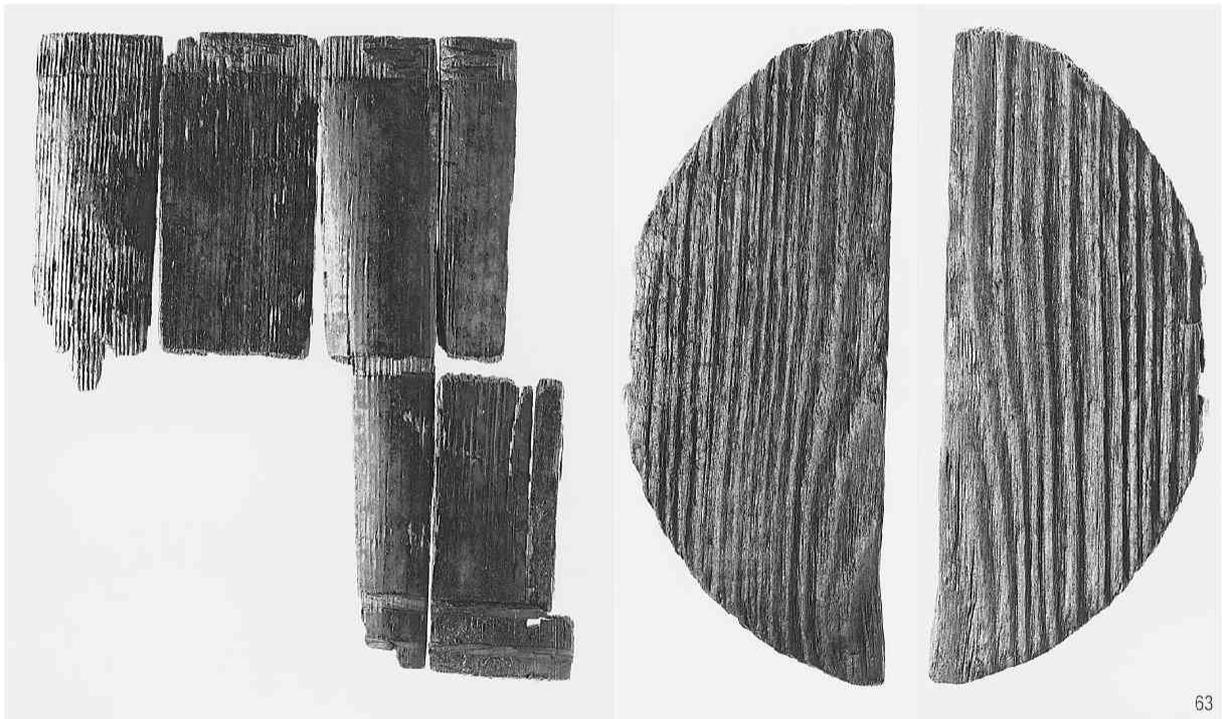


62

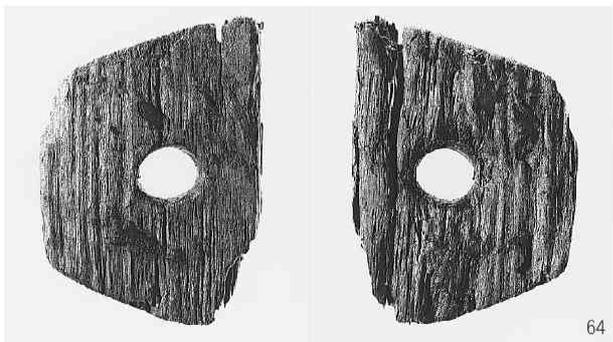
出土遺物 (21)



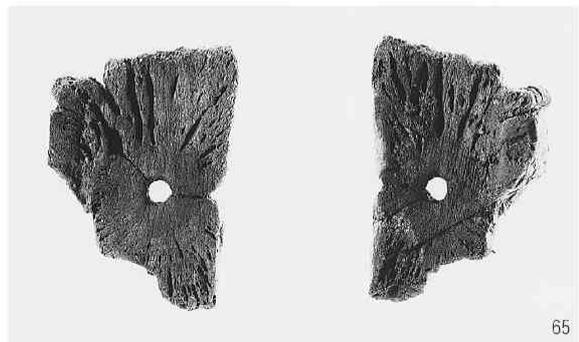
60



63

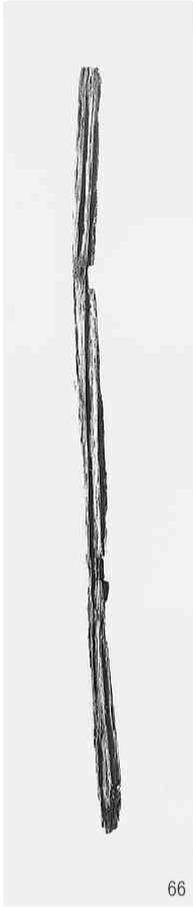


64

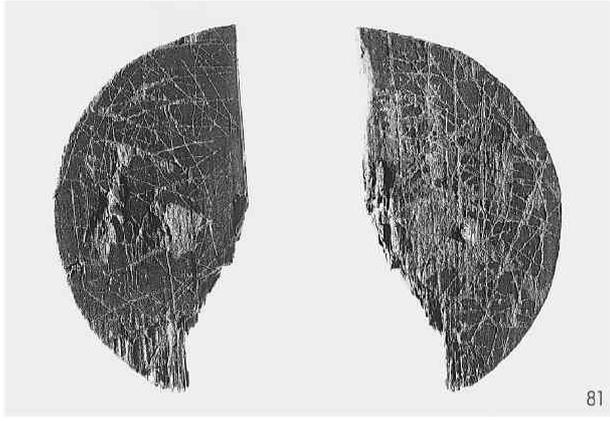


65

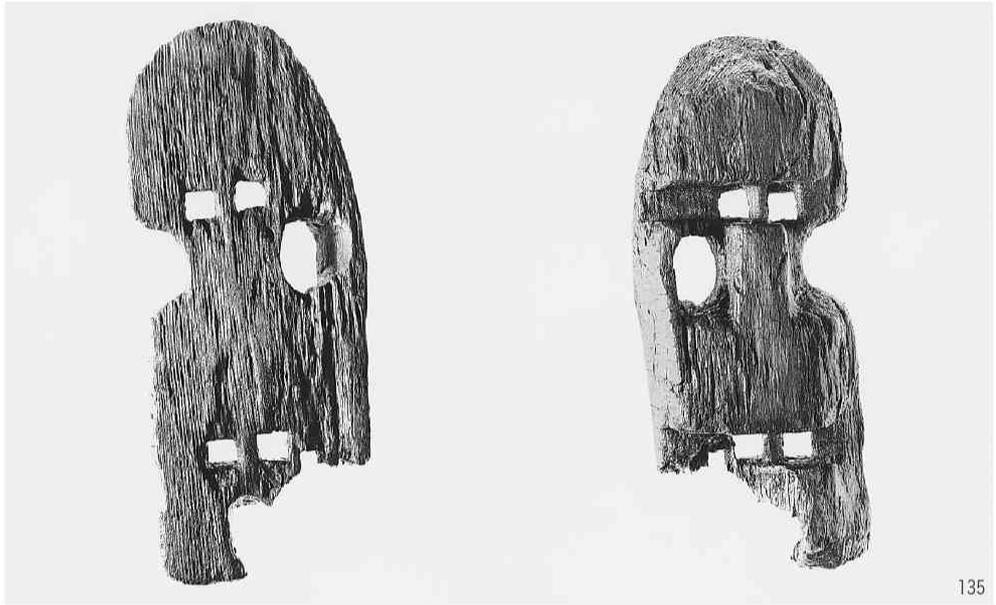
出土遺物 (22)



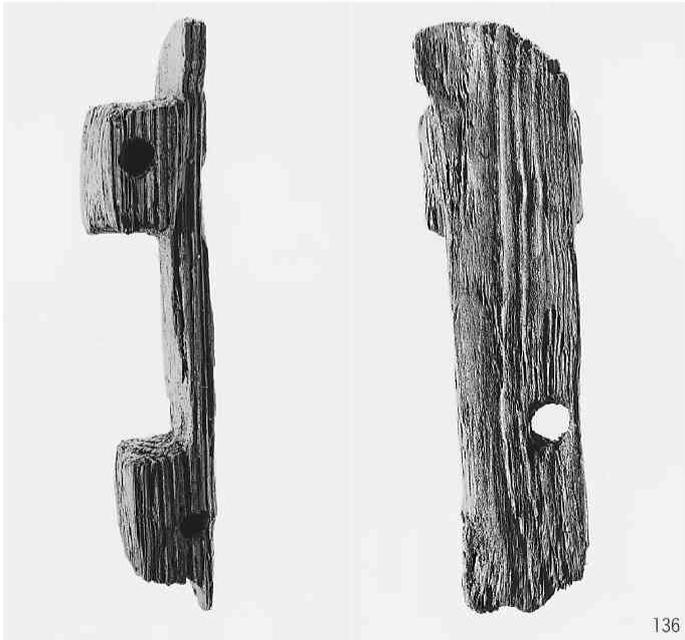
66



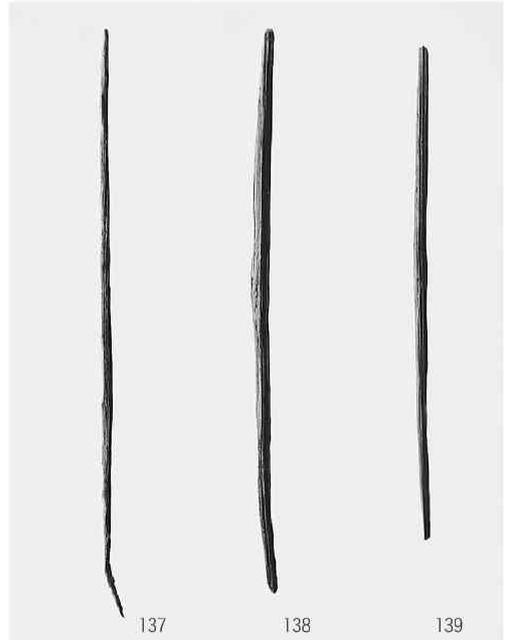
81



135



136



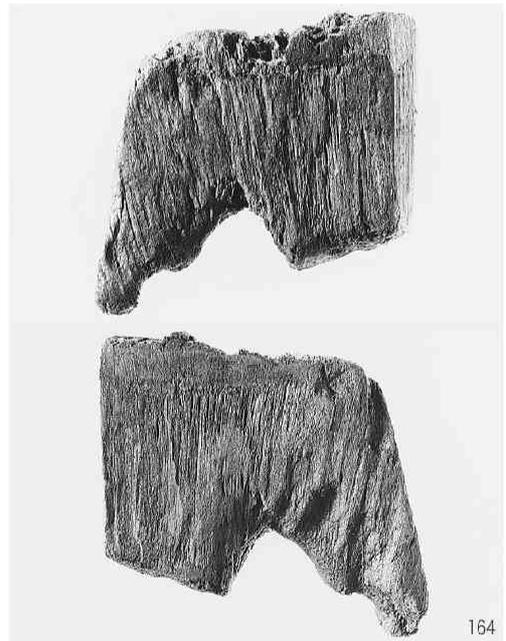
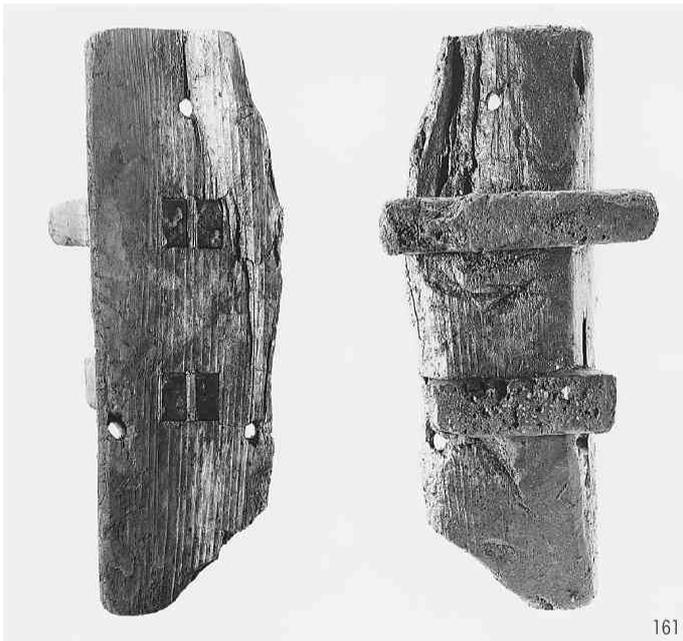
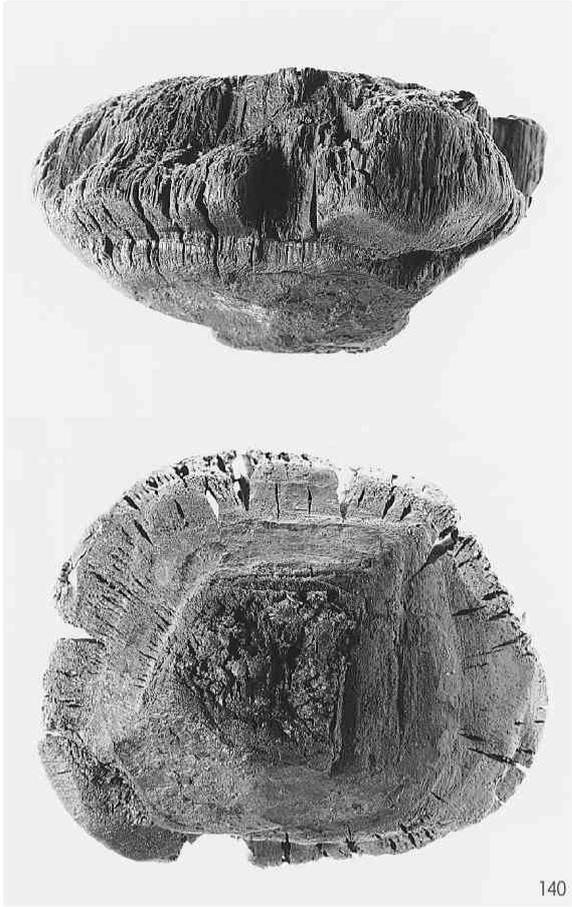
137

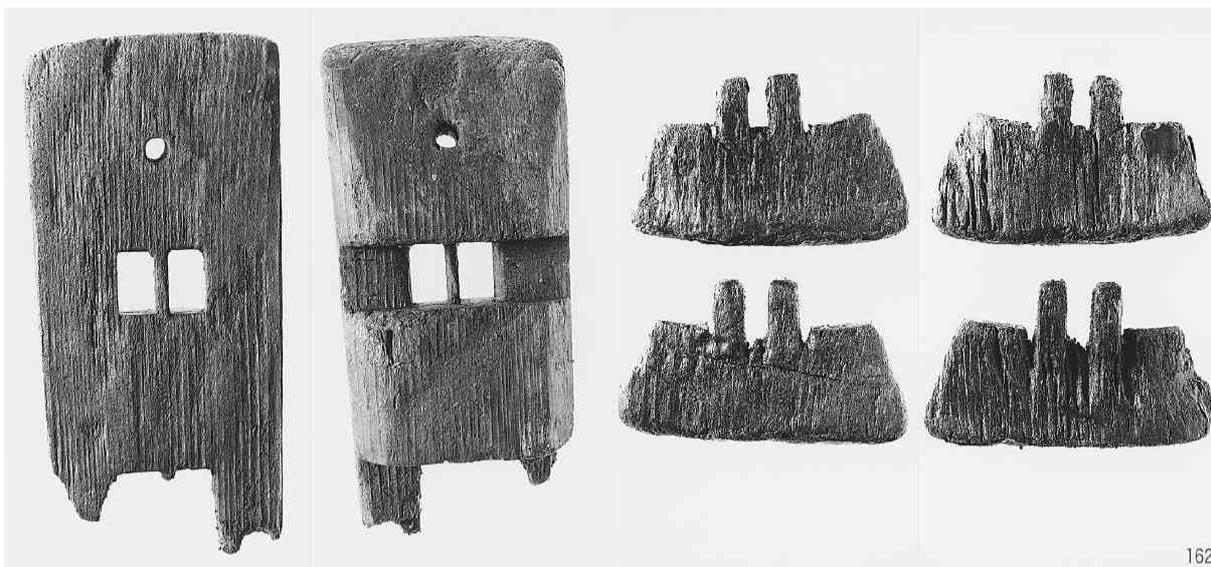
138

139

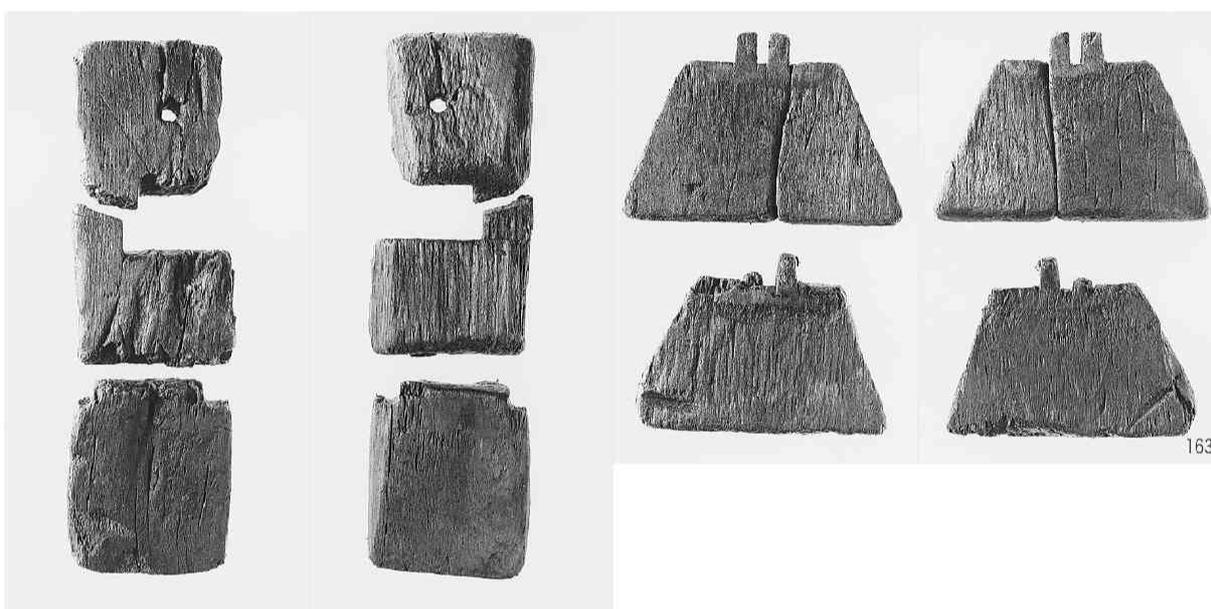
出土遺物 (23)

写真図版31





162



163



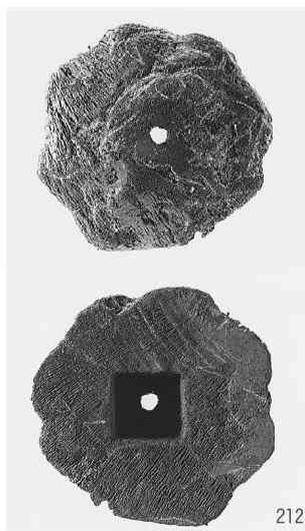
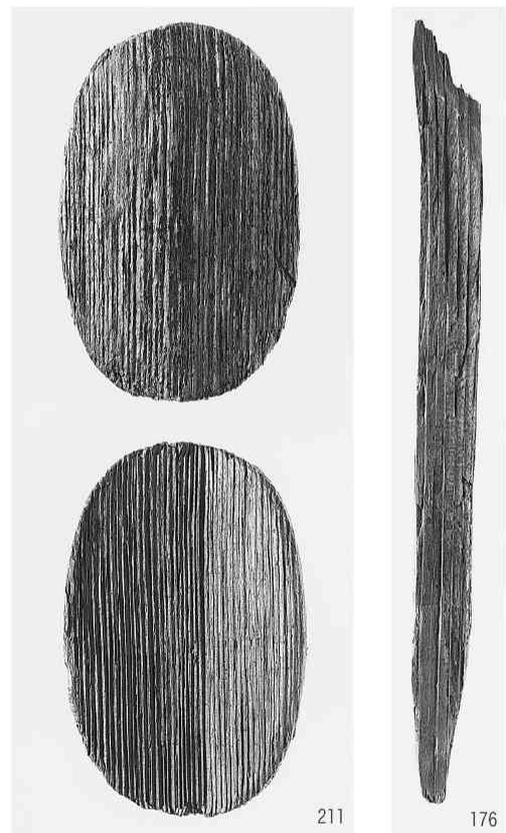
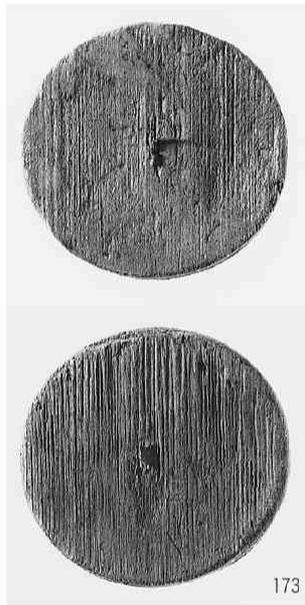
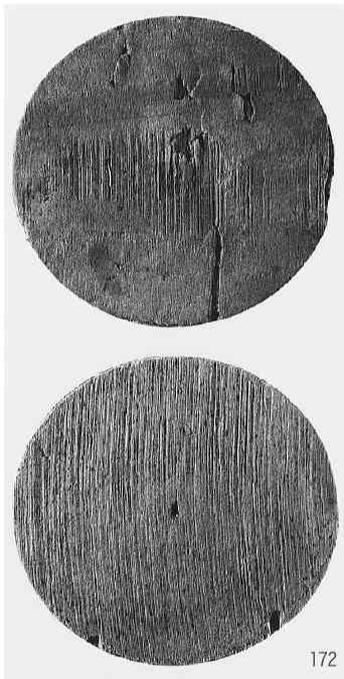
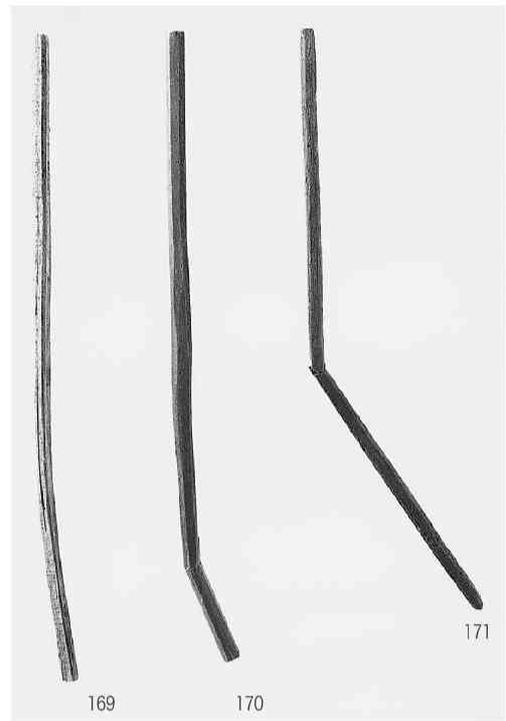
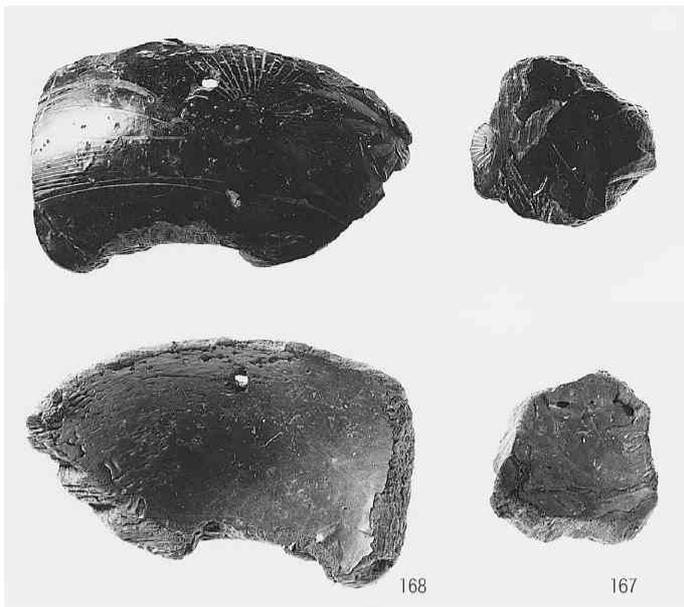
165



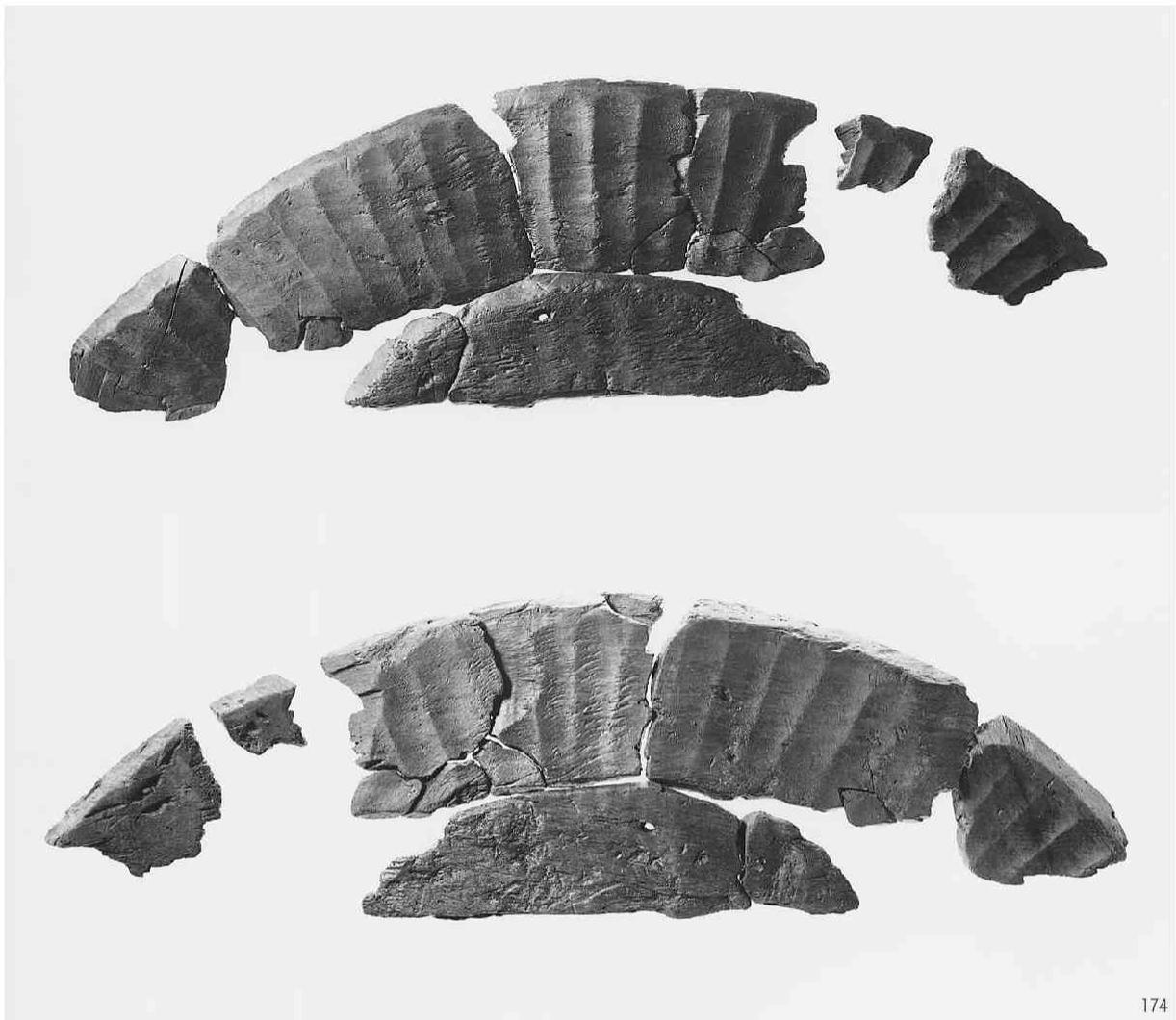
166

出土遺物 (25)

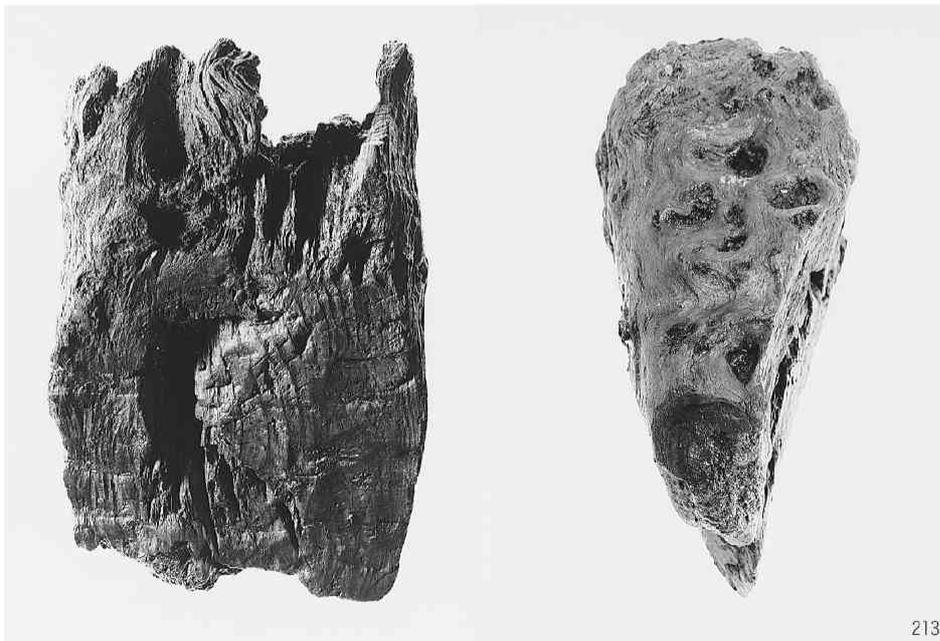
写真図版33



出土遺物 (26)



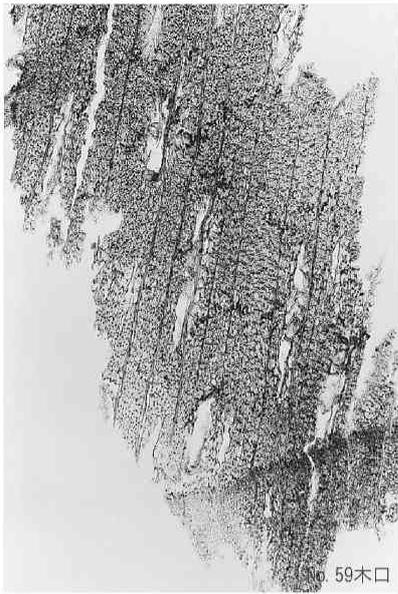
174



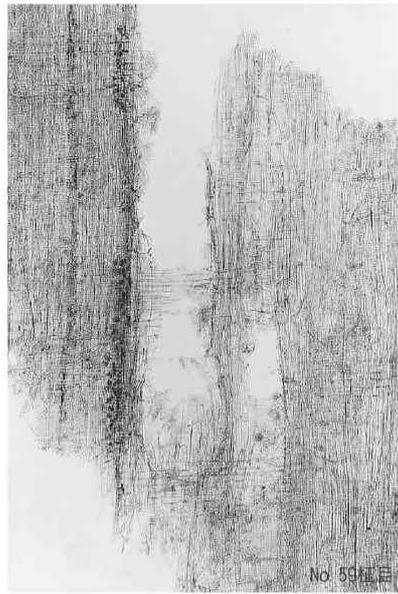
213

出土遺物 (27)

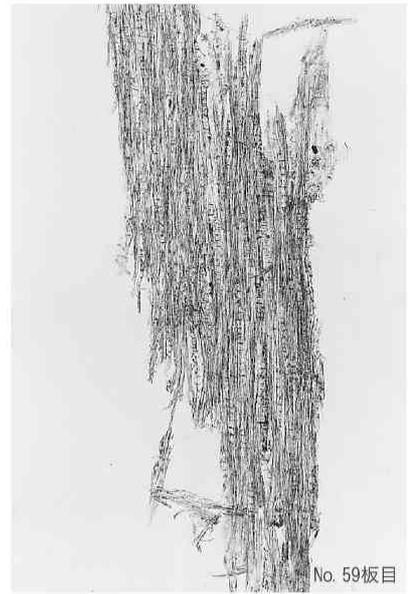
写真図版35



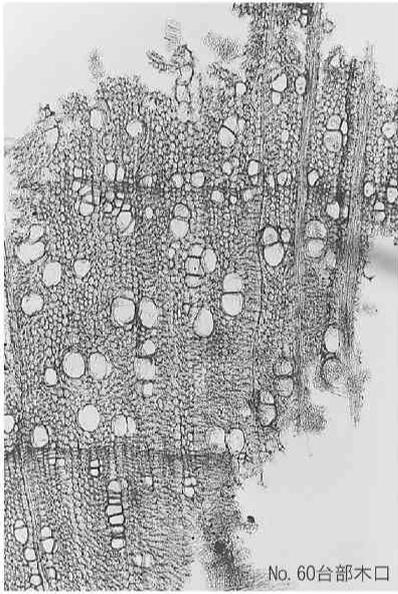
No. 59木口



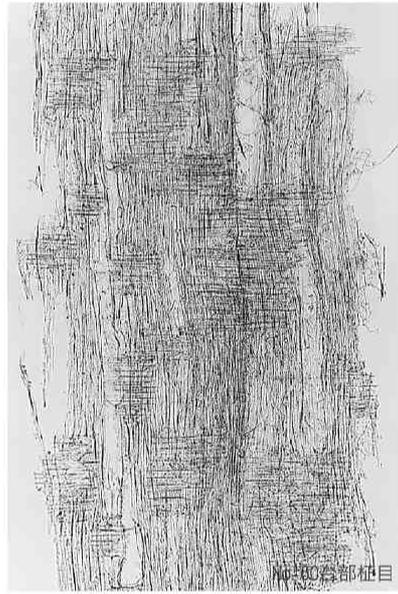
No. 59板目



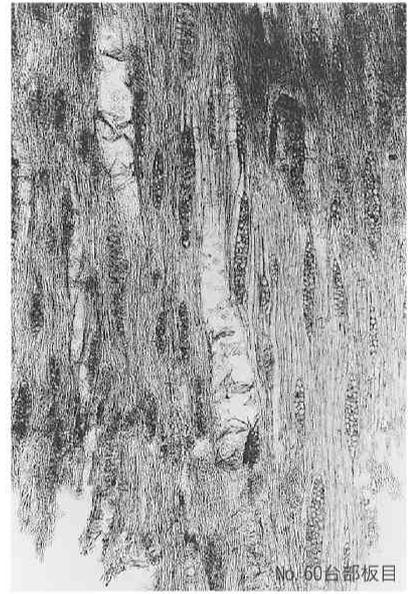
No. 59板目



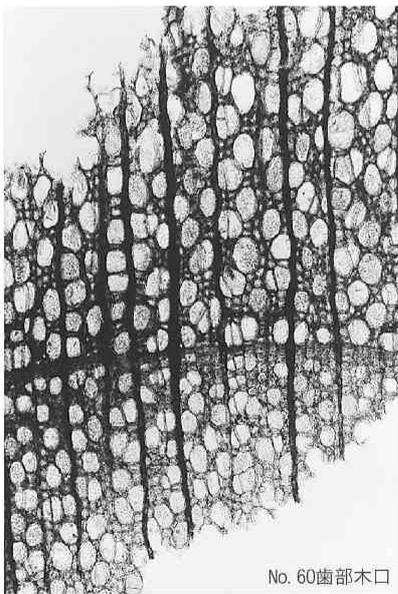
No. 60台部木口



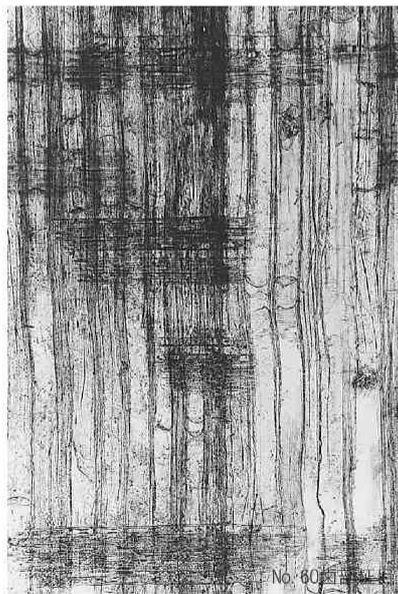
No. 60台部板目



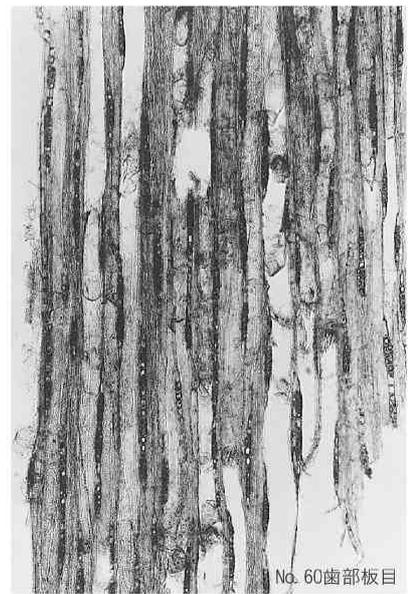
No. 60台部板目



No. 60歯部木口

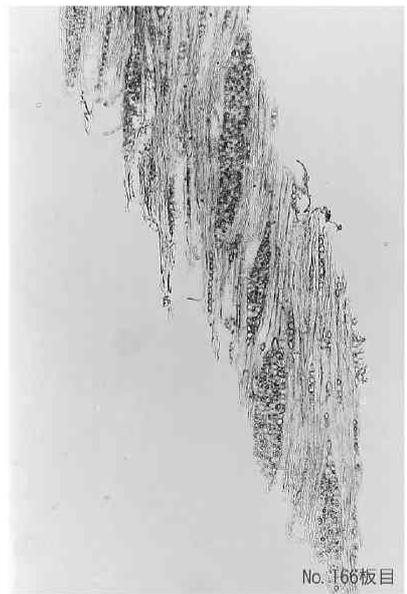
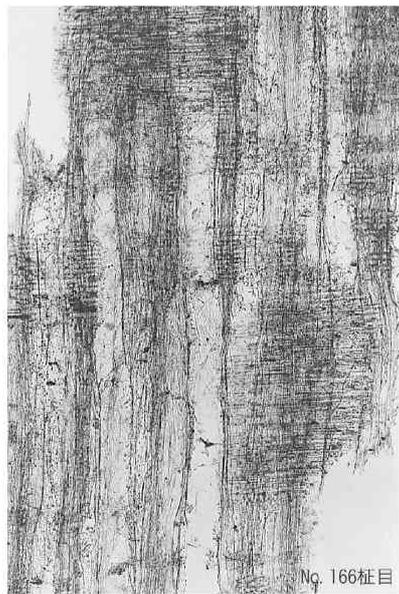
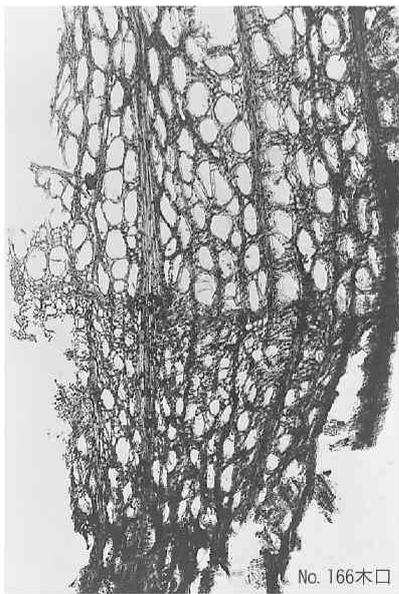
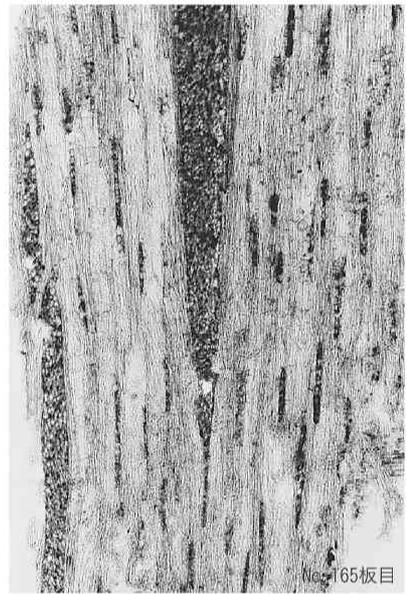
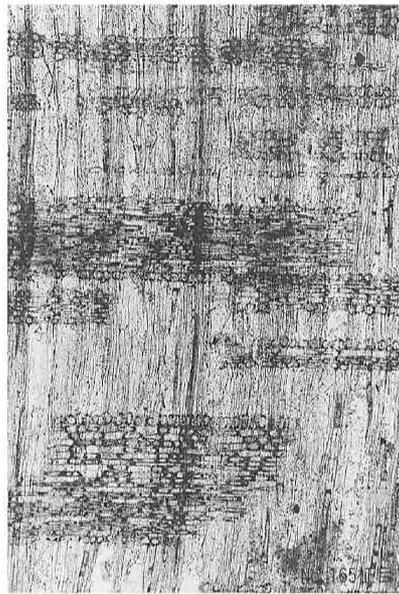
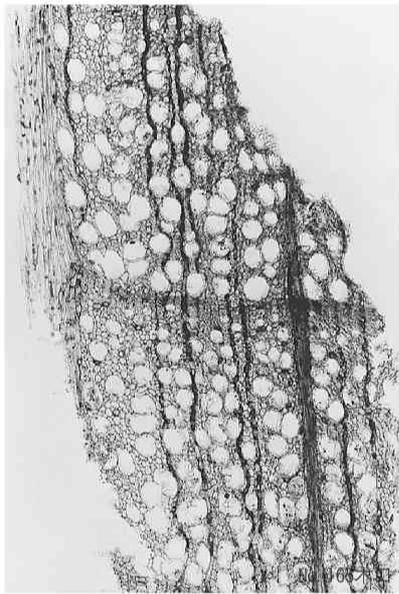
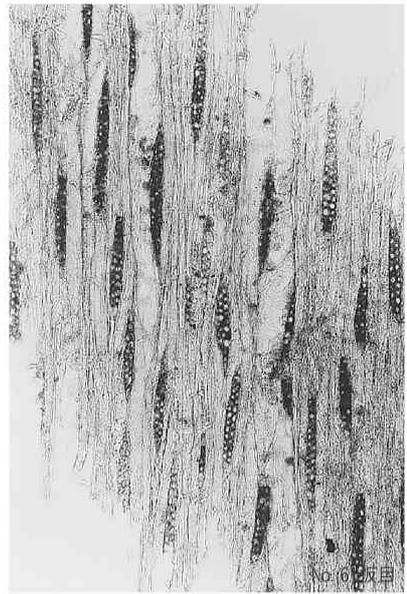
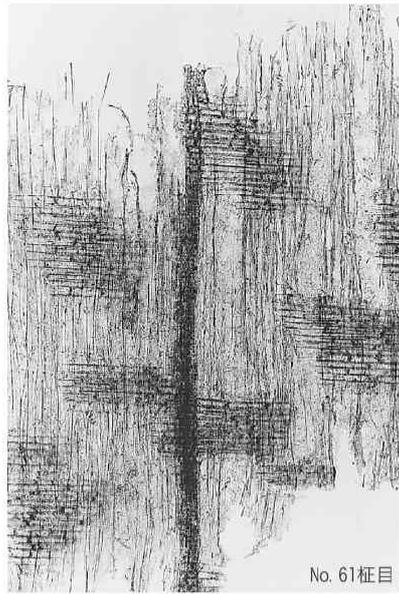
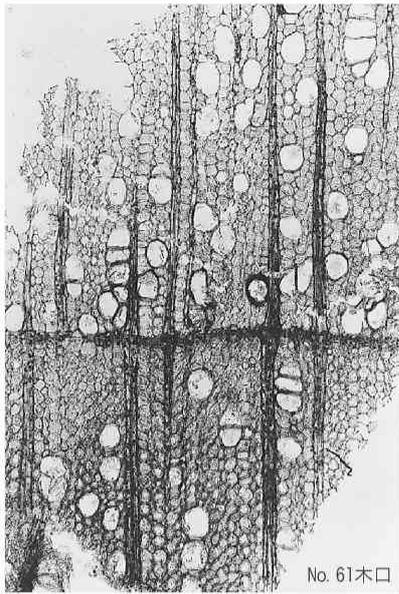


No. 60歯部板目

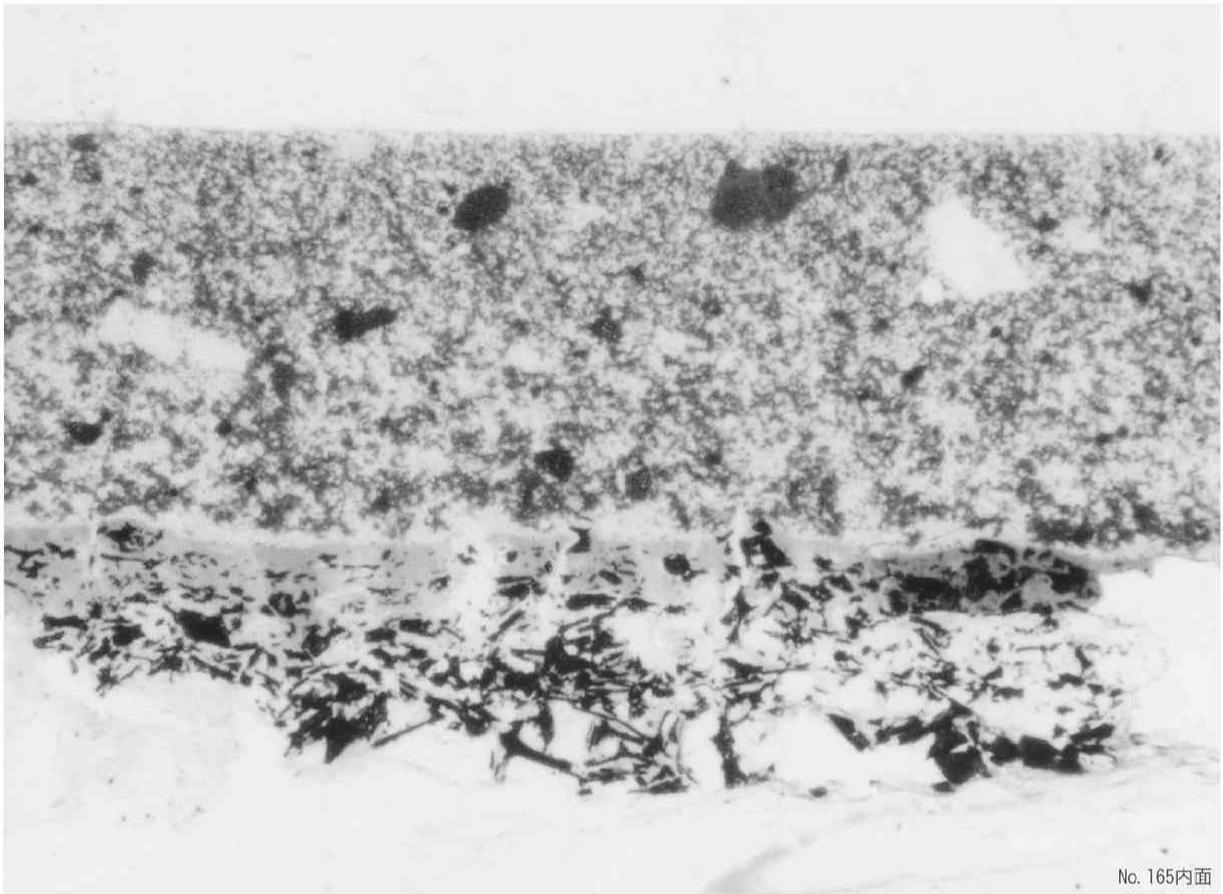


No. 60歯部板目

木材組織写真(1)



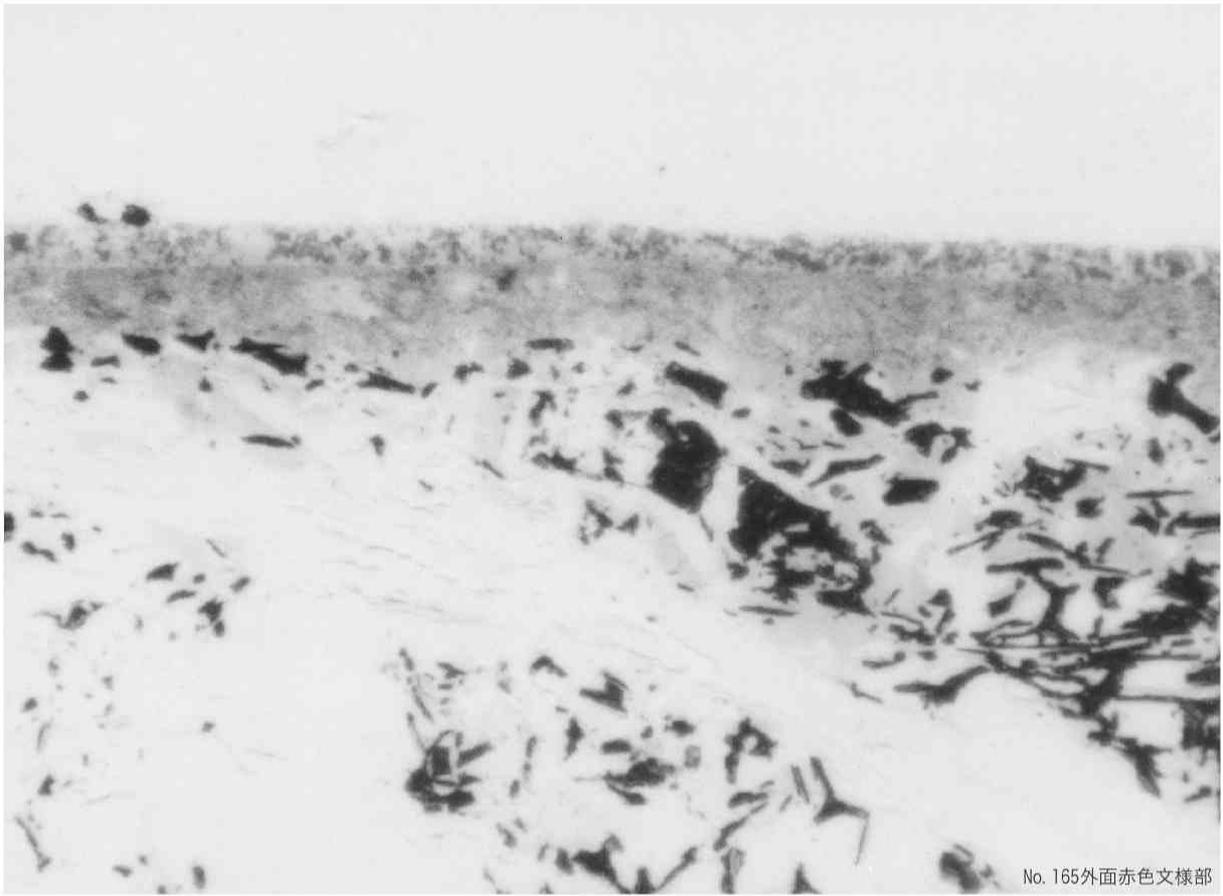
木材組織写真(2)



No. 165内面



No. 165外面金箔裝飾部
塗膜断面写真(1)



No. 165外面赤色文様部

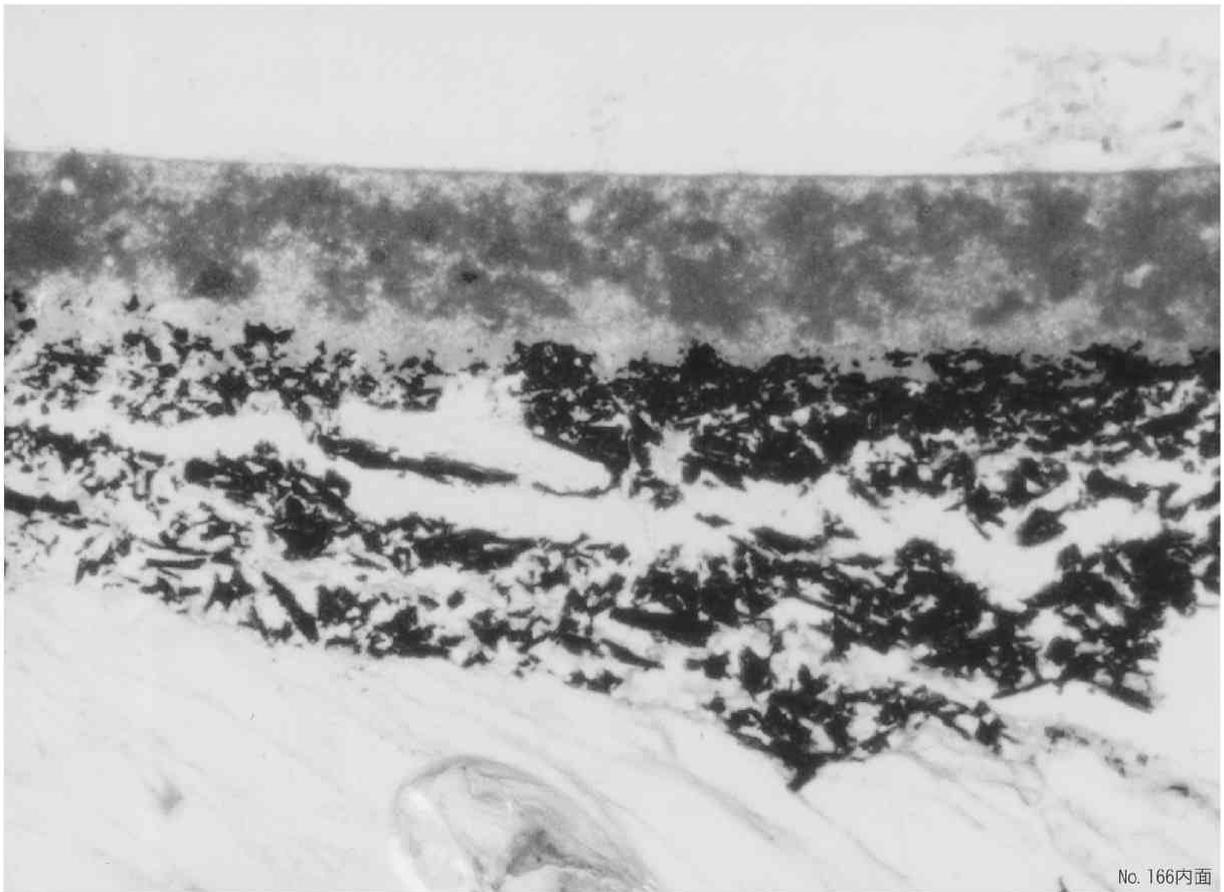


No. 165外面黄色文様部

塗膜断面写真(2)

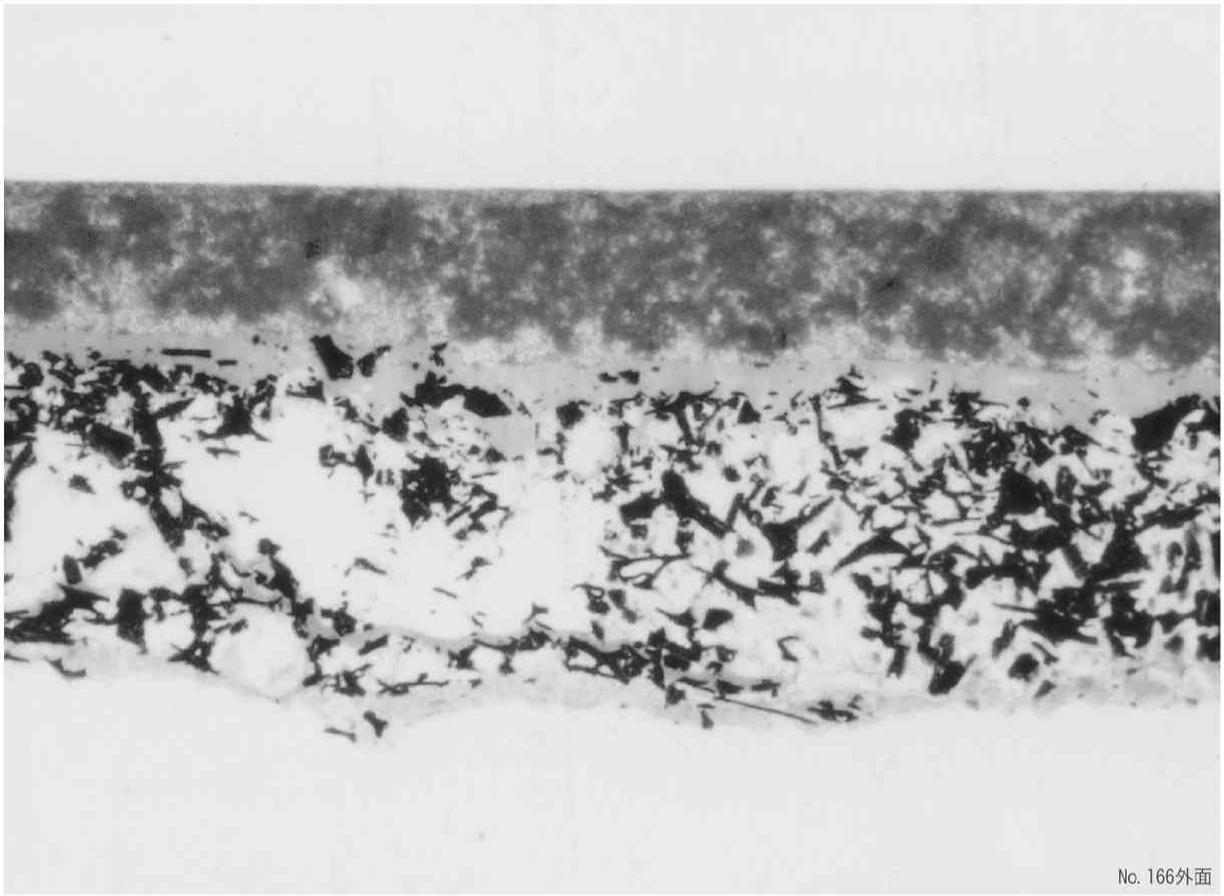


No. 165外面高台内黑色部



No. 166内面

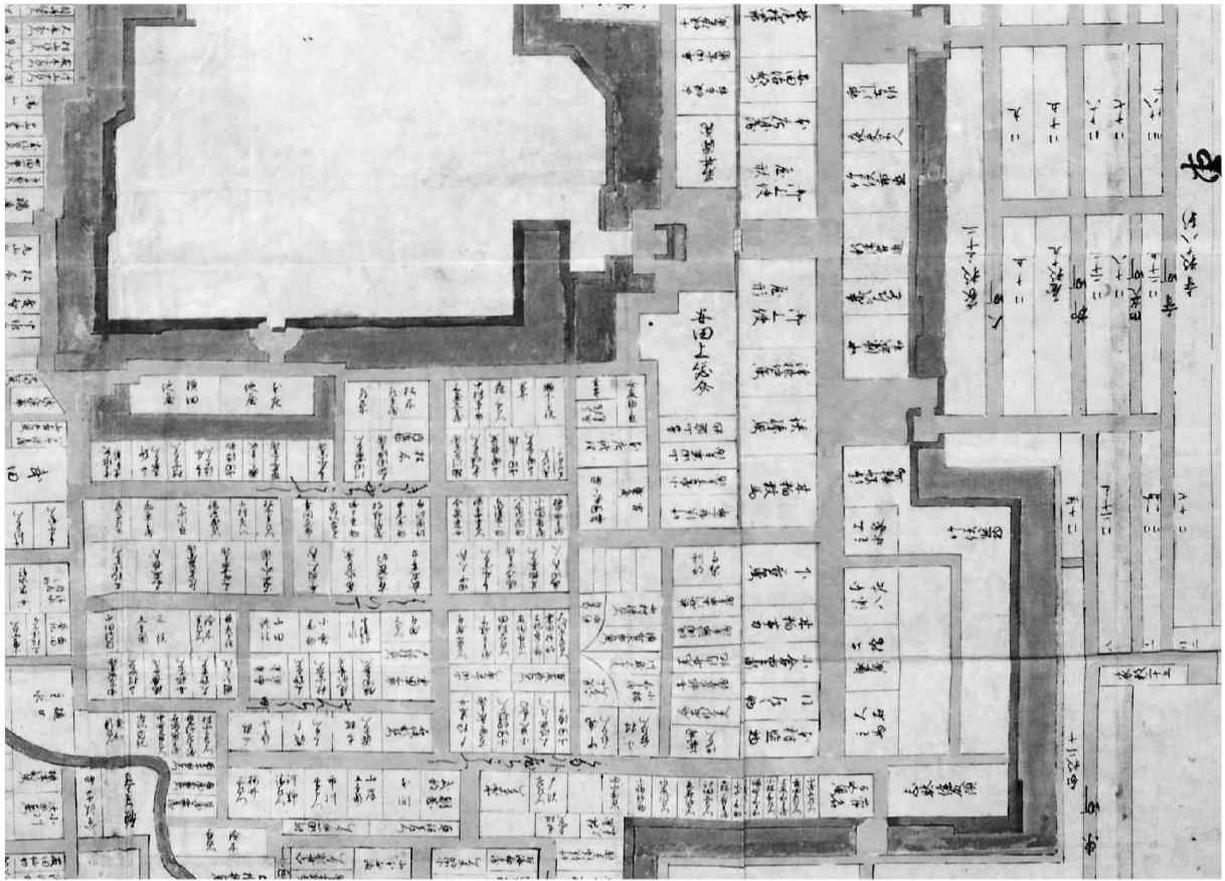
塗膜断面写真(3)



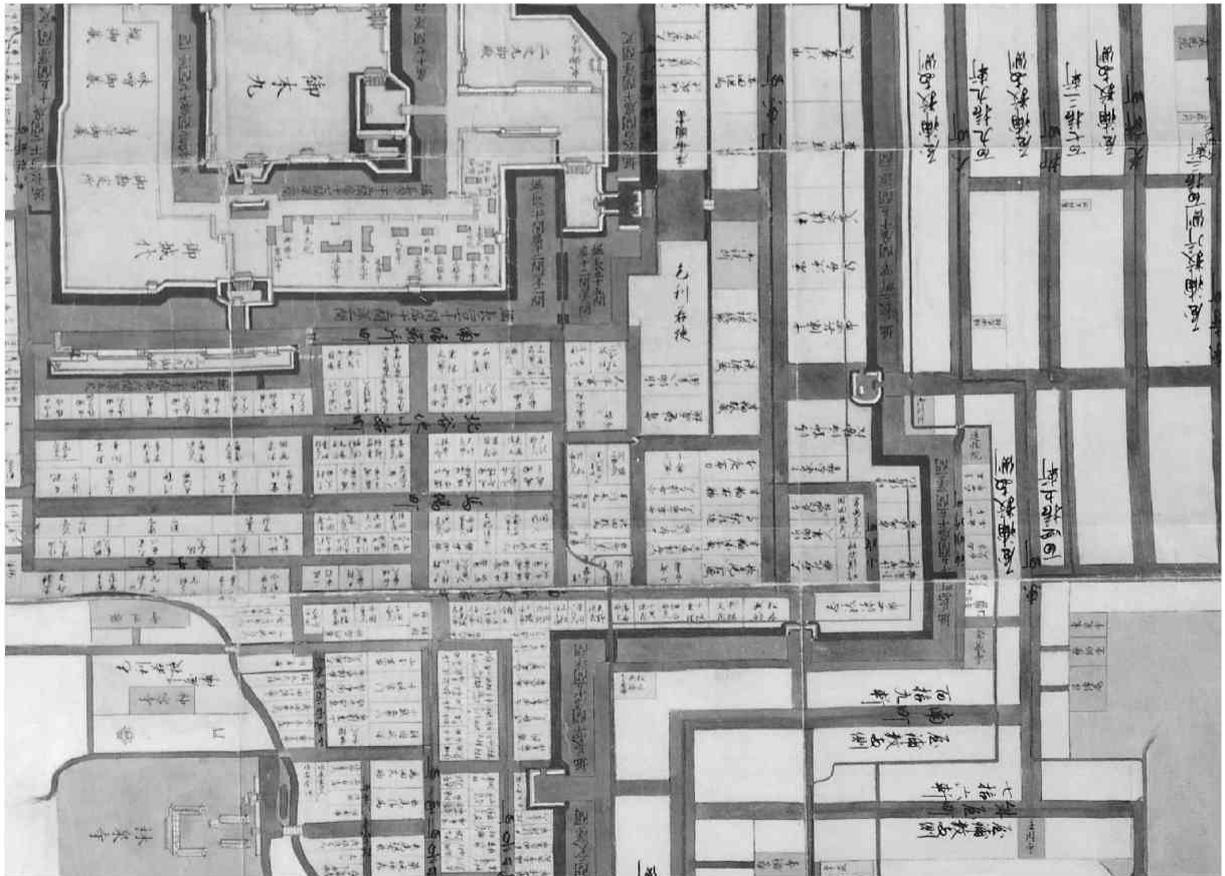
No. 166外面

塗膜断面写真（4）

写真図版41



御城下絵図 万治年中 (米沢市上杉博物館所蔵)



御城下絵図 文化8年 (米沢市上杉博物館所蔵)

報告書抄録

ふりがな	よねざわじょうあとだい3じはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	米沢城跡第3次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第135集							
編著者名	押切智紀 榎 綾							
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301							
発行年月日	平成16年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よねざわじょうあと 米沢城跡	やまがたけん 山形県 よねざわし 米沢市 じょうなん 城南 いちちやうめ 一丁目	6202	1216	37度 54分 23秒	140度 6分 26秒	20030506 S 20030606 20030724	500	主要地方道 米沢猪苗代線 3・4・4 窪田・諸仏線 改良工事
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
城館跡	中世～近代	掘立柱建物跡	4	土器・陶磁器		中世から近代までの遺構が検出された。被災した建物跡や多数の廃棄土坑を確認し、被熱した遺物が多数出土した。 (総出土箱数：37箱)		
		溝跡	10	木製品・土製品				
		土坑	35	石製品・金属製品				
		性格不明遺構	13					

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第135集

米沢城跡第3次発掘調査報告書

2004年3月26日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上市市弁天二丁目15番1号
電話 023-672-5301

印刷 田宮印刷株式会社
〒990-2251 山形県山形市立谷川3丁目1410番1号
電話 023-686-6111